

2023年度インターゼミサービスエンター・テインメント班

「広島観光」の可能性——

原爆・戦争・平和を学ぶ旅をどう組み立てるのか

〈指導教員〉

桐谷多恵子

今村康子

巴特尔

〈執筆メンバー〉

[大学院生]

池内晋史

[学部生]

片沼来夢、井上保奈海、趙子昊、井上慶太郎、

野上隆之介、中村晃大、五十嵐蓮

目次

はじめに	243
第1節 研究の動機	243
第2節 広島観光をめぐる先行研究	244
第3節 本論文の課題	245
第4節 本論文の構成	247
第1章 広島観光を検討するための基礎的情報 (1) 原爆被害と復興	248
第1節 原爆投下前の広島	248
第2節 原爆被害の概要	252
第3節 復興の概要	254
第2章 広島観光を検討するための基礎的情報 (2) 核兵器と核兵器に関する認識	258
第1節 核兵器の現状	258
第2節 海外のマスコミ・博物館展における核認識	261
第3章 広島観光を検討するための基礎的情報 (3) 広島観光の過去と現在	264
第1節 戦前の広島観光	264
第2節 戦後の広島観光—とくに「広島修学旅行」	265
第3節 広島市による観光振興の現状	266
補論 長崎との対比	274
第4章 広島ツーリズムの事例 —広島現地調査の結果	275
第1節 広島調査のスケジュール	275
第2節 特徴的広島旅行 (1) 広島平和記念資料館の見学	276
第3節 特徴的広島旅行 (2) 被爆者の体験を聞く：切明千枝子氏の証言	279
第4節 特徴的広島旅行 (3) 被爆体験伝承者の講話を聞く：仁木美恵氏の講話	282
第5節 その他の観光名所	290
第5章 広島ツーリズム体験の分析とZ世代ツーリストへの提言	295
第1節 被爆体験を継承するとはどういうことか—広島調査をふまえて	295
第2節 広島ツーリズムを計画するにあたって	295
おわりに	303
参考史料・文献	310
付録	312
謝辞	326

はじめに

第1節 研究の動機

近年、世界を取り巻く国際情勢が混沌としている。ロシアによるウクライナ侵攻、米中対立、台湾有事への危機感、北朝鮮による核ミサイル開発、核保有国と非核保有国の分断に加え、最近では、イスラエルとパレスチナ自治区ガザを実効支配する、イスラム原理主義組織ハマスとの交戦が激化するなど、世界平和が脅かされている。

日本においては、令和5(2023)年は太平洋戦争終結から78年目となる年である。世界的に猛威をふるった新型コロナウイルス感染症によるパンデミックを経て、G7先進国首脳会議(広島サミット)が5月19日から21日まで開催された。そこでは、ウクライナのゼレンスキー大統領が広島を訪れ、G7の各国首脳とともに、未だ終わりの見えないウクライナ情勢や、エネルギーと食料に対する不安の増大など、世界経済に大きな影響が出ていることについて、深い懸念が表明された。同サミットでは、インドやブラジルなどの招待国の首脳らも加わり、「平和で安定し、繁栄した世界に向けて」をテーマに、「グローバル・サウス」と呼ばれる新興国や途上国の首脳らとも顔を合わせた。

岸田文雄首相は、閉会后、平和記念公園で記者会見に臨み、「厳しい安全保障環境だからこそ、法の支配に基づく、自由で開かれた国際秩序を堅持し、平和と繁栄を守り抜く決意を世界に示す。それが議長国である日本に課せられた使命と言える。そのような決意を発信するうえで、平和の誓いを象徴する広島の地ほどふさわしい場所はない」と述べ、唯一の戦争被爆国の被爆都市の一つである「広島」でサミットを開いた意義を強調した。広島と密接にかかわる核軍縮の問題を巡っては、「77年間の核兵器不使用の重要性について一致するとともに、核戦争に勝者はなく、核戦争は決して戦ってはならないことを確認した」と説明し、核軍縮に関するG7首脳広島ビジョンを発表したものの、核廃絶を訴える被爆者との間には隔たりが生じた。

そのようななか、本年度、サービス・エンターテインメント班は、広島・長崎という被爆都市と、戦後78年を経て、先の太平洋戦争を知らない世代が増えてきつつある現状を踏まえ、「原爆・戦争・平和を学ぶ旅をどう組み立てるのか」を論文の主要テーマに置き、「広島・長崎」の新しい観光の可能性を探ることを研究したいと考えた。

具体的には、以下の三つの関心の所在を心に抱き、論文のテーマとして研究を進めたいと考えた。

- ①終戦後78年目で戦争・原爆の実相を知らない若い世代が増えていることへの危機感
- ②混沌とする国際情勢のなか、改めて日本の役割とは何かを考え直すことのきっかけ
- ③学生である筆者たちの視点から社会に発信できることは何かの考察

第2節 広島観光をめぐる先行研究

本節では広島観光についての先行研究を整理する¹。近年の研究動向において、負の遺産のツーリズムを主に行っているのは、ダークツーリズム論である。そのため、まずダークツーリズム論の井出明の文献を確認する。次に、一般的なダークツーリズム論では、今回の筆者たちの目的には必ずしもそぐわないため、広島の修学旅行について桐谷多恵子論文を確認する。加えて、平和博物館も研究するため、福島在行の論文を確認する。最初はダークツーリズムの定義についてである。

ダークツーリズムとは、井出明氏によると、1990年代にイギリスで生まれた新しい観光の概念で戦争や災害などの悲惨な記憶を巡る旅を指しており、人類のネガティブな記憶に関する場所は全て潜在的なダークツーリズムになると著者は定義している。

次に、広島の観光における原爆・平和・被爆者を取り上げて論じた先行研究を行った。広島観光は、戦争の聖跡・軍都・平和都市という意味付けに変化し、継続・発展してきた。戦前の広島は軍都としての広島を売りとしていたが、戦後は原爆で観光資源も施設も壊滅してしまったため、原爆被爆都市の背景から平和記念都市としての広島の観光を対象に復興、発展を目指している（なお広島の復興をめぐる議論は当事者不在であったことから、広島復興の内実を被爆者の戦後史の中から読みとき、被爆者の思想を踏まえた復興論を描く必要があると指摘が行われ、広島の復興は築かれていったという事が分かった）。

また桐谷は、戦後の「広島修学旅行」について次のように整理している。現在の広島観光は二つの世界遺産、原爆ドームと宮島を中心としており、中でも原爆ドームを軸とした平和をテーマとした旅行が特徴的である。個人や私的集団による訪問に限らず、学校での修学旅行も広島観光を支えている。広島への修学旅行者数が著しく増加したのは1970年代といわれているが、それは山陽新幹線の延伸により東京、広島間の移動が容易になったことが大きいと桐谷は述べている。平和を学ぶといったスタイルの修学旅行を提唱したのは中学教師であった江口保である。江口は長崎で中学教師をし、自ら被爆経験、それによるいじめや差別を経験したからこそ体験者の証言を聞き、学ぶというスタイルにこだわったのだと推測できた。江口の働きかけにより語りを始めた切明千枝子氏は当初依頼を断っている（詳しくは後述）。だが恩師の語りに聞き手として参加するという形から始まり、一人で被爆体験の証言をするに至ったという。病気や家事と仕事と語り手の両立などといった様々な問題を抱えながらではあったが、娘に背中を押されたこともあり、病気の影響で証言から身を引く

¹ ダークツーリズムや広島の復興、広島観光に関する先行研究としては、井出明（『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』、幻冬舎新書、2018年）、桐谷多恵子（「広島の観光における被爆者証言活動の意味：切明千枝子さんの就学旅行者へ対応経験を中心に」『多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要』、第15号、2023年）、桐谷多恵子「誰の視点から復興を描くのか—被爆者が語る—筆者たちの復興—から広島の「復興」を捉え返す試み—」『日本災害復興学会論文集』NO.15（Special Issue）2020年）、福島在行（「平和博物館は何を目指してきたか」、蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか』みずき書林、2021年、248～267頁）などの論考が挙げられる。

こともあったが活動を再開し、今も証言者として数少ない被爆体験者の立場から証言を続けている。

桐谷は広島観光におけるホスピタリティ（歓待、柔らかく言うとおもてなしの意味を持ちホテルやホスピタルの語源となっている。大元は病人や旅人を受け入れる他者への配慮、要求に合わせ受け入れるというものが根源となっている）について、切明氏への聞き取りの分析から、切明氏の行為は苦しさを抱えながら拒絶ではなく求めに応じる、希望を受け入れ語るという行為に、変則的ではあるがホスピタリティととらえることもできる、としている。広島修学旅行自体も特殊ではあるが観光におけるホスピタリティの在り方を理解できるといえる。一般の観光論から見ると、旅行者に対し快く受け入れるといったおもてなしとも理解できるが、単にそれだけでない超越したホスピタリティが見えてくるように思える。

続いて、平和博物館の研究について確認した。平和博物館と観光との関係は近年注目されるようになってきている。平和博物館研究者である福島在行もこの点に配慮をして研究動向の分析を行っている。なお、福島は重視すべき点として、平和博物館のアーカイブ機能自体が再生産され続ける点を主張している。更に見学者との関係でいえば、平和博物館に足を踏み入れた非戦争体験者自身が平和博物館に来ることによって見学者も自覚的に重視すべき点という点を重要視している。

なお、現在の広島の平和観光については、先行研究を見つけられなかった。このため、この課題については第3章において具体的に資料を用いて検討する。

第3節 本論文の課題

本論文では、主にZ世代を中心に、広島を旅行で訪れたことのない層や、今後、広島を訪ねたいと考えている層に向けて、筆者たち自らが広島を旅することで、原爆、戦争、平和を考える、新しい旅を組み立てて、インターゼミサービス・エンターテインメント班として、社会に発信することができないかと考えた。

その前提として、先行研究では、ダークツーリズムにおける観光の概念と、平和博物館の位置付けと社会的な役割、広島市が過去に取り組んできた平和への取組みの基本的な枠組み、戦後の平和都市としての復興の歴史と、現在の広島修学旅行の歴史の成り立ちを調査してきた。

それらを踏まえて、筆者たちが注目したいと考えているのは、令和の時代に生きる若い世代の考える旅行の概念と、この先78年の新しい時代の到来に向けて、平和な世界を構築していくための平和教育の概念とを組み合わせた、新しい旅行のあるべき姿を探求することで、人類にとっての普遍的な価値とは何かを考え、社会に発信したいというのが本研究における最大の課題認識であることを改めて提起しておきたい。

つまり、生まれたときから平和が当たり前の時代に生きている世代であるZ世代が、旅行先に広島を訪ねる場合、従来の修学旅行における平和教育的な側面から、戦争や原爆の非人道性を訴える情報発信を行っても、受け取る側にそれを許容する受け皿がないと、真の意味

での教育的な効果を果たすことができるとは言い難いと思われる。それは県外に住む若者と、県内に住む若者にとっても同様である。

また、戦後 78 年の時が経過している現状を踏まえ、国内の若者だけでなく、国外の若者においても、戦争や原爆に対する認識が、Z 世代以上の世代の想像する姿からは変貌している可能性があるとの仮説に基づいての考察である。では、そもそも「平和」とは何かについて考察したい。

『人はなぜ戦争をするのか』は、精神分析の創始者で、オーストリアの精神病理学者であるジークムント・フロイトが、物理学者のアルバート・アインシュタインの呼びかけに応えて交わした往復書簡である。そこで、アインシュタインは、手紙を通じて、フロイトにこう問いかけたのである。

〈人間を戦争というくびきから解き放つことはできるのか？〉

すべての国家が一致協力して、一つの機関を創り上げればよいのです。この機関に国家間の問題についての立法と司法の権限を与え、国際的な紛争が生じたときには、この機関に解決を委ねるのです。個々の国に対しては、この機関の定めた法を守るように義務づけるのです。もし国と国のあいだに紛争が起きたときには、どんな争いであっても、必ずこの機関に解決を任せ、その決定に全面的にしたがうようにするのです。そして、この決定を実行に移すのに必要な措置を講ずるようにするのです。（アルバート・アインシュタイン/ジークムント・フロイト著、浅見昇吾訳『人はなぜ戦争をするのか』講談社学術文庫、2016 年）

つまり、戦争の問題を解決するためには、国際的な司法機関を設立することが必要だと訴えたのである。それに対し、フロイトは、心理学的視点で、以下のように応えている。

はるかなる昔から、文化が人類の中に発達し、広まってきました。人間の内にある最善のものは、すべて文化の発展があったからこそ、身につけることのできたものなのです。（中略）それに対して、文化の発展が人間の心のあり方に変化を引き起こすことは明らかで、誰もがすぐに気づくところです。ではどのような変化が起きたのでしょうか。ストレートな本能的な欲望に導かれることが少なくなり、本能的な欲望の度合いが弱まってきました。私たちの祖先なら強く興奮を覚えたもの、心地よかったものも、今の時代の人間には興味をひかないもの、耐え難いものになってしまいました。このように、私たちが追い求めるもの——例えば、道徳や美意識にまつわるもの——が変化してきたわけですが、この変化を引き起こしたものは究極的には心と体の全体の変化なのです。心理学的な側面から眺めてみた場合、文化が生み出すもっとも顕著な現象は二つです。一つは、知性を強めること。力が増した知性は欲動をコン

トロールしはじめます。二つ目は、攻撃本能を内に向けること。好都合な面も危険な面も含め、攻撃欲動が内にむかっていくのです。

文化の発展が人間に押し付けたこうした心のあり方——これほど、戦争というものと対立するものはほかにありません。だからこそ、私たちは戦争に憤りを覚え、戦争に我慢がならないのではないのでしょうか。戦争への拒絶は、単なる知性レベルでの拒否、単なる感情レベルでの拒否ではないと思われるのです。少なくとも、平和主義者なら、拒絶反応は体と心の奥底からわき上がってくるはずなのです。戦争への拒絶、それは平和主義者の体と心の奥底にあるものが激しい形で外にあらわれたものなのです。（同前）

ここからは、筆者たちの問題提起に対して、二つの示唆を得ている。一つは、戦争や原爆に対する認識が、時代と共にその形相に変化を及ぼし、世代間に大きな認識齟齬が生じている可能性があるという点。もう一つは、文化の発展を促せば、戦争の終焉に向けた一つのきっかけになり得るという点である。

先行研究で得られた視点とは異なるアプローチ法として、平和を考えるきっかけに、グローバルな社会課題を抱える時代を生きる筆者たち若者世代が、人間の根源的な価値とは何かを追求するために、旅行という非日常を味わう手段を通じて若者間で考えるきっかけを与える方法を模索したいと考えている。

また、数多くの外国人観光客が、日本を旅行先に選んでいる現状から、日本が持ち得る、世界に誇れる歴史的、文化的な資源と観光を組み合わせることで、戦争や原爆を考える新しい旅のプランを組み立て、グローバルな視点で発信することで、戦争と平和という、人類の歴史において切り離すことが困難であったテーマに関して、人間の暴力とはどこからくるものなのか、または、どのようにコントロールすることが出来得るのか、または、そもそも人間とは何なのか、といった普遍的なテーマを考えるきっかけを旅行者に提供する可能性を探求心に掲げ、本研究に臨みたいと考えた。

第4節 本論文の構成

第1章では、第二次世界大戦における広島・長崎への原爆投下は、いかにしてなされ、その後の世界にどのような影響を及ぼしたのか、また、戦後、現在の平和都市を標榜する広島市がどのような軌跡をたどって復興したのかの歴史的な背景と、課題点を深掘りし、筆者たちの考える独自の視点として、それらの問題点を読み解いていく。

第2章では、次世代の広島観光を検討するための基礎的な情報として、国際情勢における核兵器に対する認識と広島の世界遺産としての歴史認識、世界に存在する核兵器の現状と課題、世界の博物館の調査から、日本側からの視点だけでなく、世界各国の側から見た視点から、「なぜ戦争体験を継承するのか」の問いに対する解決策を考察する。

第3章では、筆者たちが、広島を実際に旅する前に、必要最低限知っておかなければなら

ない予備知識として、まずは、原爆投下以前の広島における観光の位置付けと、戦後から現在に続く広島観光の一つの特徴として、とりわけ、県外からの旅行者が、被爆者から被爆体験を聞くという、現在の修学旅行のスタイルがどのように成立してきたのかのプロセスを調査する。同時に、旅行者を受け容れる側の広島県、ならびに広島市の行政側の視点から見た観光振興のあるべき姿と現状の課題を広島県や広島市、広島市教育委員会の担当者へヒアリング調査を行い、今後の観光の可能性を提言するにあたっての解決策を考察する。また、海外からの日本へのインバウンド観光客が増加しているなかで、広島への外国人観光客の年代別推移や、平和記念資料館を訪ねた外国人観光客が、原爆被害の実相を知ることにより世界の恒久的な平和の実現にどのような意識変容を及ぼしているのかの実態を調査する。そのうえで、今後、次世代の広島旅行を構成するための潜在的な可能性を考察する。

第4章では、筆者たちが、令和5(2023)年9月10日から9月12日におこなった広島現地調査の結果から、とりわけ、被爆者である切明千枝子氏による、昭和20(1945)年の広島での原爆による被爆体験の講話から、筆者たちが何を思い、何を感じたのか、または、今後、世界に恒久的な平和を訴えることと、核兵器という非人道的な戦争兵器を、世界で廃絶に向かわせるために、若者世代として何ができるのかについて分析する。そのためには、核兵器廃絶への道のりに向けた世界的な歩みの変遷と課題から、核廃絶を実現させるには、1地域や1国だけの問題には決して留まらないことを理解した上での総括を行う。また、補論として、多摩大学の大学生、附属高校生、大学院生、一般に対して行ったアンケートの結果についても本章で紹介する。

そのうえで、最終章では、筆者たち大学生世代が、今後の世界の恒久的な平和の実現を行うために、この先78年の時代の到来に向けて、新しい広島ピースツーリズムを計画するにあたって、何ができるのかの具体的な提言までを行う形で、本論文を締め括りたい。

第1章 広島観光を検討するための基礎的情報(1) 原爆被害と復興

第1節 原爆投下前の広島

第1項 原爆投下前の広島市

原爆投下前の広島の歴史を国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会(構成主体:広島県、広島市)がまとめた「広島の復興の歩み」²をもとに振り返ってみたい。

広島は、16世紀末までは太田川の河口に浮かぶ小島からなる寒村だったが、戦国の武将・毛利輝元が天正17(1589)年に城を築いたことをきっかけに「廣島」と命名された。のちに、江戸時代前期の大名であった浅野長晟が藩主になり、それ以降、広島は江戸時代を通じ

² 国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会(構成主体:広島県、広島市)『広島の復興の歩み』、2021年3月。24ページ <https://hiroshimaforpeace.com/en/wp-content/uploads/sites/2/2019/09/343364.pdf> (閲覧日:2023年5月6日)

て浅野家を藩主とする広島藩 43 万石の城下町となって大都市として栄えたとされる。明治 4 (1871) 年に広島県、明治 22 (1899) 年には広島市が誕生し、県庁および中央官庁の出入機関の所在地となった広島市は西日本の政治経済の中心都市となった。それにともない宇品築港や鉄道が整備されるなど、物流や交通の要衝となったほか、紡績業も発達し、広島高等師範学校などに代表される教育機関の集まる「学都」としても発展し、戦前の広島は中四国の拠点都市となった。

一方、広島は軍都としても発展した。明治時代初期に第 5 軍管広島鎮台が置かれ、広島城周辺に歩兵第 11 聯隊などの部隊や練兵場などが設置された。とりわけ明治 27 (1894) 年に勃発した日清戦争時、宇品港が兵員輸送の玄関口となり、同年 9 月には戦争指揮のため明治天皇が大本営を東京から広島に移し、帝国議会も広島で開かれるなど、広島は臨時首都の様相を呈した。それ以降、「軍都」としての広島には陸軍の様々な部隊や施設が配置され、太平洋戦争末期には本土決戦に備えるため、西日本の部隊を統括する第 2 総軍司令部が設置され、西日本の最後の砦とされるなど、広島は明治初期から太平洋戦争が終結するまで日本の重要な軍事拠点の一つになったのである。

第 2 項 「十五年戦争」とアジア諸国、とくに「大東亜共栄圏」

昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日に広島に落とされた原爆は広島市に壊滅的な被害をもたらした。戦後、原爆の被害を語る際に、しばしば広島市の歴史だけに焦点を当てられることがある。しかし、前述したように明治期の広島の「軍都」として果たした役割や、いわゆる日本の「十五年戦争」³の歴史、すなわち大日本帝国がアジア諸国を侵略・占領しようとした戦争の歴史も十分に踏まえながら認識する必要がある。本項では、日本とアジア諸国、そして「大東亜共栄圏」⁴の概略を示しておきたい。

大東亜共栄圏とは、日本の対アジア諸国の基本的政策構想であった。欧州各国との植民地争奪戦争でもあった。植民地支配は、明治 28 (1895) 年の台湾統治、明治 43 (1910) 年の日韓併合、そして中国東北部を植民地とした昭和 7 (1932) 年の満州国建国などが挙げられる。昭和 12 (1937) 年の日中戦争の勃発と拡大するにつれ、対外的なアピールとして中国侵略を「東亜新秩序」のためとした。一方、日本の軍事力増大に脅威を感じ始めた東南アジア諸国やインドなどの宗主国であった欧米諸国は、日本への軍需物資の輸出を停止したため、日本は鉄鉱石や石油、ゴムなどの軍需物資を確保するために生産地であった東南アジア各地を植民地化し、欧米に対抗しようという、「大東亜共栄圏」構想が生まれた。この構想は、欧米の植民地支配に代わって日本を中心とした東亜の諸民族による共存共栄を樹立

³ 昭和 6 (1931) 年 9 月 18 日の柳条湖事件勃発から昭和 20 (1945) 年のポツダム宣言受諾までの足掛け 15 年 (実質 13 年 11 カ月) にわたる日本の対外戦争、満洲事変、日中戦争、太平洋戦争の全期間を一括する呼称である。

⁴ 「大東亜共栄圏」とは、太平洋戦争開戦直前の昭和 14 (1940) 年 8 月に当時の外務大臣の松岡洋右が最初に使った言葉だといわれるが、日本を盟主に東アジアに共存共栄の広域経済圏をつくりあげるといふ発想は古くからあった。日清、日露戦争直後から、主として日本軍部、とくに日本海軍が強く主張していたとされる。

することを掲げ、日本のアジア支配を正当化しようとしたものであった⁵。

この構想のもと、日本はフランス領インドシナ(現ベトナム)、イギリス領香港・シンガポールなどを次々と占領し、東南アジアを欧米列強の植民地支配から「独立」させたのである。大東亜共栄圏構想が具体化したのが昭和 18 (1943) 年 11 月 5 日に東京で開催された大東亜会議である。同会議では「共存共栄」「独立親和」「文化昂揚」「経済発展」「世界進運貢献」の五原則からなる「大東亜共同宣言」が採択され、満州、中国、東南アジア、インドにおいて、大日本帝国を核心とする道義に基づく共存共栄の秩序を確立する方針が示された⁶。ところが、日本は共栄圏内において日本語による教育や宮城遥拝の強制、神社造営、資源の収奪等をおこなったこともあり、実質的な独立を与えないまま昭和 20 (1945) 年の敗戦を迎えたのである。

このため、広島を語る際に、原爆の被害や戦争の悲惨さを後世に伝えることは大切であり必要不可欠であることは言うまでもないが、同時にかつての日本が構想し具体化していった「大東亜共栄圏」の実態を踏まえることも重要であろう。本論文の第 4 章第 3 節で触れた被爆者、切明千枝子氏は、「広島がただ単なる被害を受けた被爆地であるだけでなく、軍都広島であったこと、加害の地であったこと、そのことをこの建物が私は物語っていると思うんですよ」と、我々のヒアリング調査で語ったことは非常に示唆的であろう。

第 3 項 原爆投下にいたる経緯

(1) 原爆投下目標の選定

アメリカは昭和 17 (1942) 年から「マンハッタン計画」という原子爆弾開発に着手した。当初はドイツに投下される予定であったが昭和 20 (1945) 年 5 月にドイツが降伏し、日本がポツダム宣言を黙殺したために、原爆投下は日本が標的となった。そして、昭和 20 (1945) 年 8 月 6 日広島に投下、同年 8 月 9 日長崎に投下された。

では、なぜ「広島」が原爆投下目標となったのか。

日本の中枢部壊滅と戦争降伏が第一の場合、東京に対して空襲、爆撃、原爆投下を行うのが効率的であるが、アメリカ内では天皇制の中核への攻撃はさけ、貧しい庶民生活地域への攻撃を優先した。住民修復能力が弱く混乱が起きることから、戦意喪失が目的であった。皇居付近、重要なビル、軍の司令部は攻撃を受けなかった。戦後の日本をコントロールするためにあえて、攻撃の対象から外していたと考えられる。その中で、原爆投下に適した都市として挙げられた条件として以下の三つが挙げられていた。

- ・ 直径 5km 以上で軍事的に重要な都市

⁵ 副田護「大日本帝国が夢みた“大東亜共栄圏”とは一体何だったのか？ 太平洋戦争と東アジア情勢から見る功罪」『歴史人』、2023 年 8 月 4 日 <https://www.rekishijin.com/29614> (閲覧日：2023 年 9 月 3 日)

⁶ 藤 誠志「人種平等の世界の為に日本は戦った」、Apple Town Vol. 375、2023 年 12 月号

- ・爆風で効果的に破壊できる都市
- ・8月まで空襲を受けない都市

はじめは17都市が検討され新潟、横浜、京都、広島、小倉が該当し投下の対象となった。京都が候補から外されたのは、町全体の持つ文化的価値が高いため、日本人に思い入れが高く原爆によって全てを破壊すると終戦後に日本国民から強い反感を買う恐れがあったためである。その後、通常空襲の対象となった横浜が外れ、長崎が新しい投下候補として挙げられた。造船所、製鋼所、兵器を作る工場が集まっていたことから長崎が追加で選ばれることとなった⁷。このような経過を経て広島は原爆投下の第一目標となったのである。

(2) 原爆投下をめぐるアメリカ内部の認識

原爆投下における一般的な解釈とは、「原爆投下は、戦争の終結を早め、予定されていた日本への上陸を無用にし、結果として多くの米兵の命を救ったゆえに正当であった」⁸ とするものであるだろう。この原爆投下を早期終戦と結びつける説は日本にも広まっている。

「必要悪」⁹の考えを補強するための論拠として藤岡は「連合軍は7月26日にポツダム宣言を発して、日本に降伏を勧告したのだが、当時の鈴木貫太郎内閣は、ポツダム宣言を「黙殺」として、事実上の「拒否」回答をおこなった。この理不尽な日本政府の回答にたいする「報復」として、原爆を投下したのだから是認できる。投下先については、軍事都市として有名な広島と長崎の軍事施設を主要なターゲットに選んで、米軍は原爆を投下したのであるから、日本の継戦能力を破壊するための措置として、是認できる」¹⁰ と述べている。

だが、投下の直前まで日本への投下に対して反対する人々もいた。当時の威力でこれまでに見たこともない爆弾を使用して民間人を巻き込んだ大量殺戮を行ったとみなされ終戦後、政界の主導権を握れなくなる可能性があったためである。太平洋における戦いで日本軍に勝ち続け、沖縄まで侵入していたため、わざわざ原爆まで使用する必要はなく、日本に投下するときは事前に警告をして民間人の避難を促すべきであると考えていた。それでも、アメリカが日本に投下することを辞めることはなかった。日本兵のしぶとい抵抗から、日本軍がすぐに戦争をやめることは無いという認識があったためである。戦いを続けた場合、日本、アメリカに対して重大な被害が出続けることを予測していた。

加えて、ソ連の存在も大きく関係していると考えられる。当時、日本とソ連の間では「日ソ中立条約」（昭和16（1941）年4月13日締結）があり中立な関係を保っていたが、昭和20（1945）年8月8日夜にソ連が一方的に中立条約を破棄し対日参戦したのである。満州の日本軍は強大なソ連軍の攻撃により敗走し疲弊して総崩れとなった。このまま、ソ連による

⁷ 原爆投下目標として広島が検討された際、連合軍の捕虜収容所が無いという点も考慮された。

⁸ 中沢志保（2007年）52ページ

⁹ 原爆投下による被害者は日本人だけでなく、アメリカ軍捕虜も含まれていた。2016年バラク・オバマ大統領の広島訪問時の演説にて言及されたことにより、アメリカ政府は公的に10人以上の被害者が存在したことを認めた。

¹⁰ 藤岡惇「なぜ米軍は2発の原爆を日本に投下したのか—投下70周年の時点での再考—」、『立命館経済学』第64巻 第4号 2016年2月16日、520ページ

日本への侵攻が続いた場合、考えの異なるソ連に日本の主導権を握られてしまうため、アメリカは危機感を感じていた。「アメリカはたんに日本から降伏を勝ちとることを目的とするばかりではなく、ソ連の対日参戦前の段階においての戦争終結をはかって原爆を投下し、それによってアジア・太平洋におけるソ連の膨張を阻止し、またその「核の脅威」を背景にヨーロッパにおいても戦後のソ連を、アメリカにとって制御しやすい関係にした」¹¹ と小室は考察している。アメリカは、実験データではなく実際の被害による原爆投下の世界へのアピールと日本侵攻を行うソ連へのけん制のためには予告なしでの原爆投下が必要であったと考えられよう。

第2節 原爆被害の概要

昭和20(1945)年8月6日午前8時15分に投下された原子爆弾により、昭和20(1945)年末までに14万人±1万人が死亡したと広島市は推計している。爆心地から1.2kmでは、その日のうちに半数が亡くなったと推定され、それよりも爆心地に近い地域では80~100%が亡くなった。また、即死を免れたとしても、近距離で被爆し、傷害の重い人ほどその後の死亡率が高いとされている。

原子力爆弾から放出されるエネルギーの特徴は大きくは、爆風、熱線、放射線の三つに分類される。また、その後、都市を襲った火災も大きな被害を出した。それぞれの被害の概略は次のとおりである。

(1) 爆風

広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会の報告書によると、「爆発と共に爆発点に数十万気圧という超高気圧が周囲の空気を急激に膨張させ、超音速で大気中を伝播することで、衝撃波が発生した。衝撃波は爆発2秒後に1キロメートル地点に、30秒後には11キロメートルの距離に到達」¹²したとあり、原爆による衝撃波は凄まじい状況にあった。爆発直後は外向きの風が強く吹いたが、爆風が収まると中心部の空気が希薄になったため、爆発地点に向けて吹き戻しが起こった。爆発地点ではそれらが上昇気流となってキノコ雲を形成した。

爆心地から2kmまでの地域では、衝撃波と爆風によって木造家屋はほぼ全壊、鉄筋コンクリート造の建物でも多くが崩壊し、崩壊を免れた場合でも内部崩壊、焼失によって壊滅的な被害をもたらした。

(2) 熱線

広島平和資料館の展示物の説明文によれば、原爆の被害は想像を絶するものである。「原爆のさく裂後に発生した火球の表面温度は、約0.2秒後にはセ氏7,700度に達し、放出された熱線は、さく裂後0.2秒から3秒までの間に、地上に強い影響を与えた。爆心地周

¹¹ 小室憲義（「原爆投下理由」の再検証—スミソニアン原爆展論争から—）『異文化コミュニケーション研究』第1号、愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻・言語文学研究所、1998年）172ページ

¹² 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『原爆災害』、岩波現代文庫、2005年

辺の地表面の温度はセ氏 3,000 から 4,000 度にも達し、爆心地から半径 3.5 キロメートルまでの地域にいた人も火傷を負った。特に、約 1.2 キロメートル以内で、さえぎるものがないまま熱線の直射を受けた人は体の内部組織にまで大きな障害を受けた¹³ とされており、被爆したほとんどの人は即死、または数日のうちに死亡するなど甚大な被害を被ったのである。

(3) 放射線（黒い雨）

原子爆弾が他の爆弾の異なる点に「放射線」の放出が挙げられる。放射線の中には物質や人体を透過する力があり、細胞や遺伝子に異常を起こすとされる。

放射線による被害状況については、広島市役所の公式ウェブサイトでは以下のように述べている。

「爆心地からの距離やさえぎる物の有無によって、その程度が大きく異なる。爆発後 1 分以内に放射された初期放射線によって、爆心地から約 1 キロメートル以内にいた人は、致命的な影響を受け、その多くは数日のうちに死亡した。損傷の程度は被爆量によって異なるが、爆心地から 1 キロメートル以内で被爆した人のうち、無傷であっても大多数の人が死亡している。被爆直後の急性障害（発熱、はきけ、下痢など）だけでなく、その後も長期にわたってさまざまな障害を引き起こし、被爆者の健康を現在もなお脅かし続けている¹⁴」。

昭和 21（1946）年以降、火傷が治ったあとが盛り上がる、いわゆるケロイド症状が発現。被害は一時的な物ではなく、白血病、甲状腺がん、乳がん、大腸がんを引き起こした。胎内被爆児は死産や流産が多く、無事出産できても小頭症などの症状がみられることもあった。目立った外傷がなくても、被爆後の広島では多くの人が亡くなっており、それは放射線による白血球異常などによるものであった。放射線による免疫低下による既存の病原菌への感染により、多くの人々が死亡していった。

また、放射性物質を含んだ黒い雨は強い放射性を帯び、爆発時の泥、埃、すす（煤）を含み広島市の主に北西部を中心に激しく降り注いだ。熱線や爆風を逃れた地域にも降り、放射能汚染を拡大させた。直接雨を浴びた人だけでなく、火傷や怪我による喉の渇きを癒そうとする人、家庭用の飲み水を飲んだ人、畑で育てていた野菜を口にしたり、川魚を口にしたりした人等、二次的な内部被爆のもと、脱毛、出血、血便、急性白血病を引き起こした。原爆によって心身に与えた心の傷は、のちに至っても人びとの心を苦しませた。

(4) 火災による被害

以上の被害に加えて原子爆弾の被害は大火災によるものも大きかった。原子爆弾の炸裂による強烈な熱線が市内中心部を焼き尽くした。直接熱線を浴びなかった場合でも、周囲の火災に巻き込まれ、亡くなるケースも多数存在した。「午前 10 時頃から午後 2～3 時頃を頂

¹³ 広島平和資料館、東館 3 階・5 核兵器の危険性・5-2 原子爆弾の脅威・5-2-3 熱線（2023 年 9 月 10 日現在の展示物）

https://hpmmuseum.jp/modules/exhibition/index.php?action=ItemView&item_id=17&lang=jpn

¹⁴ 広島市役所公式ウェブサイト「放射線による被害」、2019 年 10 月 21 日更新

<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/48/9411.html>

点に、街は終日燃え続けた。爆心地から半径 2 キロメートル以内の地域はことごとく焼失し、倒壊した建物の下敷きになって、生きながら焼かれ、亡くなった人も数知れない¹⁵とされている。

第3節 復興の概要

第1項 広島市の復興

このような原爆被害を受けた広島は、次のように復興を遂げていく。戦後の広島復興を考察するとき、現在まで続く平和都市を標榜する広島へと進化していく過程の礎となったのが、昭和 24 (1949) 年に広島平和記念都市建設法が制定されてから以降が起点となる。原爆の被害を受けた広島市は人びとの努力により、水道や電気、電車などは比較的早く復旧することができた。都市全体としての広島市による復興計画は、資金難も含め難航していた。広島復興が進展する大きな契機は、昭和 24 (1949) 年の広島市平和記念都市建設法である。また、広島市ホームページによると以下のように定義されている。「この法律は、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設することを目的とする」つまり、戦後、他の戦災都市と同様に復興するだけでなく、世界の恒久平和を象徴する平和記念都市として建設していこうとする、というものである。

広島平和記念都市建設法制定までの経緯は次の表 1 のとおりである。

表 1 広島平和記念都市建設法の制定までの流れ

時期	内外の動き	国に対する援助の働きかけ
1945(昭和20)年8月6日	原子爆弾投下	
1945(昭和20)年11月1日	木原市長、特別援助を国に申請	国有財産の払下げ・特別補助の陳情
1946(昭和21)年1月1日	旧軍用地の無償払い下げ申請(木原市長)	
1946(昭和21)年10月1日	復興都市計画の決定	
1948(昭和23)年11月1日	「復興国営化請願書」を市議会が議決	復興の国営化の請願運動
1949(昭和24)年2月11日	同請願書を国会の関係議員などに配付	
1949(昭和24)年2月13日	請願運動の方針を衆議院議長公舎にて検討 寺光参議院議事部長より法律制定の提案	平和記念都市法制定の運動
1949(昭和24)年2月14日	寺光部長により法案(第1次)が起草	
1949(昭和24)年4月25日	長崎市が平和都市法へ共同参画の意思表示	
1949(昭和24)年5月4日	GHQが法案を承認	
1949(昭和24)年5月10日	衆議院で法案可決	
1949(昭和24)年5月11日	参議院で法案可決	
1949(昭和24)年7月7日	広島市で全国初の住民投票を実施(賛成多数)	
1949(昭和24)年8月6日	法の公布、施行	
1952(昭和27)年3月31日	広島平和記念都市建設計画の決定	

出典：広島県、広島市の公表資料などをもとに筆者作成

¹⁵国際平和拠点ひろしま「高圧火災による被害」、広島平和記念資料館 学習ハンドブック (2018.3)
<https://hiroshimaforpeace.com/nuclear-weapons-elimination-day-2020/q10/>

つまり、原子爆弾投下の翌年の昭和 21（1946）年の復興都市計画の決定以降から法の公布、施行まで4年の期間があることが見て取れる。では、果たしてこの空白の4年間には何があったのか。

桐谷多恵子の論文「戦後広島市の「復興」と被爆者の視点―「中国新聞」の記事を史料として―」によると、昭和 21（1946）年から昭和 23（1948）年までの時期は、被爆者への占領軍の対応は極めて厳しいもので、アメリカが投下した原爆の残忍な実相を外部に漏れないように被爆者の原爆被害に関する報道を一切検閲し、弾圧した事実がある、と述べている。つまり、敗戦国日本における占領軍から受ける情報統制によって、アメリカや原爆の被爆の実相を被爆者が自由に発言することが許されていなかったのであり、地元の中心的なメディアである中国新聞による情報発信も規制されていたと述べている。また、桐谷は、被爆者側の視点としての復興に対する違和感を、次のように紹介している。一部を引用する。

「（被爆1年後に）「復興祭」というもの自体が開かれていたことすら知らなかった。とにかく大変だったんですよ」

「1年後の（1946年の）中心地（広島市の爆心地の周辺）は（元の住民は）死に絶えていた」

「被爆の1、2年後は各町内会のいたるところで慰霊祭は行われていましたけど、『復興祭』なんて行われていたんですか？」

「一女（広島市立第一高等女学校）の慰霊祭など、それぞれの人が自分が当時通っていた学校ですとか、関係するところの慰霊祭に出ていましたよ」

「『復興祭』ですか？聞いたことありませんね。私の周りの人たちでは、誰も（復興祭へは）行っていなかったと思います。私は市内のものではなかったので、わざわざ（8月6日に市内へ）行こうとは思いませんでした」

以上のような被爆者の証言からは、被爆1年後などの広島では通常的生活自体が送れる状況ではなかったことが窺われる。被爆者の日常生活において「8・6」の「復興祭」などの諸行事に関する情報は浸透してはいなかったか、あるいは情報があっても記憶に留めるものでなかったのではないだろうか。多くの被爆者の行事が行われていることすら認知していなかったとすれば、当初の「復興祭」や「平和祭」は被爆者の意識に対応し、それをひきつけるものではなかったと言えるのではないか。

他方で、平和記念都市建設法の都市計画が練りだされるまでの4年間は、まず昭和20(1945)年に、国が戦災復興院をつくったところから始まる。戦災復興院とは、戦争で被害を受けた

町や住宅を再建するために作られた国の機関である。翌年、昭和 21 (1946) 年に、広島市が全国 115 の都市の戦災復興都市に指定され、同年 2 月に、広島市により、広島市復興審議会がつくられ、これからの広島市に必要と思われる主な道路、公園、土地区画整理事業を、広島復興都市計画として決定し、新しい広島都市づくりが始まった。その後、昭和 24 (1949) 年からの都市計画で、平和記念都市建設法の都市計画が練りだされ、平和記念資料館や平和記念公園が建設された。その後、広島のなかで復興というのが強く意識されて、昭和 33 (1958) 年には復興大博覧会が開催された。

第 2 項 敗戦後における占領広島 ―原爆報道の検閲と ABCC―

GHQ (連合国最高司令官総司令部) が昭和 20 (1945) 年 9 月 19 日に、プレス・コードを公表した¹⁶。このことにより占領政策における検閲が始まり、原爆の報道も検閲され、「新聞をはじめ出版、ラジオ放送、映画を検閲し、「占領軍に対して不信、又は怨恨を招く」内容を監視した」¹⁷。その結果、原爆の悲惨さを報じることは「反占領的」とされるため原爆の実態の部分ではなく、占領政策である広島復興に焦点が当てられ報道された。つまり、表に出ていない広島原爆の実態が存在する。

ここでは、プレス・コードの影響で広く知られることのなかった事例の一つとして、原爆傷害調査委員会 (ABCC、以下 ABCC) の活動についてふれる。

ABCC は、昭和 22 (1947) 年 3 月に広島市に開設され、原爆による傷害 (障がい) 調査のためにアメリカが設立した研究機関である¹⁸。ABCC は、調査目的を、平和・学術的・医科学的なものとしたが、調査結果は米国がソ連に対する核の防護のデータとして使用するなど軍事的に利用されるなど研究は軍事的性格を持ち、その活動内容も悲惨であった。調査を行う際の基本姿勢として、「被爆の影響を受けているのにも関わらず被爆者以外の人は扱わなかったこと」、「急性傷害を沢山ある症状の三つの症状に限定し、晩発的影響の主要な調査対象としたこと」「疾病にかかっている多くの被爆者に対して調査をしないで放射線の影響のものではないと断定をして調査対象外としたこと」があげられる。つまり、ABCC は、原爆放射線の影響についての事実を受け止めず「過小に評価」¹⁹をおこなった。

¹⁶ 「プレス・コード」とは、第 2 次大戦後の GHQ による新聞・出版検閲の基準の略称。正称は「日本ノ新聞準則ニ関スル覚書」。ウェブ辞書「コトバンク」

<https://kotobank.jp/word/%E3%83%97%E3%83%AC%E3%82%B9%E3%83%BB%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%89-127608> (閲覧日: 2024 年 1 月 9 日)

¹⁷ 『国際平和拠点ひろしま』より「Ⅱ原爆報道」の「5 情報管理」参照

<https://hiroshimaforpeace.com/fukkoheiwakenkyu/vol1/1-46/> (閲覧日: 2024 年 1 月 9 日)

¹⁸ 『公益財団法人 放射線影響研究所 日米共同研究機関』より「原爆傷害調査委員会 (ABCC)」

<https://www.rerf.or.jp/glossary/abcc/> (閲覧日: 2024 年 1 月 9 日)

¹⁹ 中川保雄 「放射線による晩発的影響の過小評価」130 ページ

ところが、これらの ABCC の活動は米国の人たちだけで行われたものではない。柿原氏は、「ABCC の中心人物となる人類遺伝学者のニールが初めて日本に来る前に「トップシークレットとされていた広島、長崎の人々や建物の被害、影響に関する文書」を含む関連文書を読みあさった、というエピソードをニールの自叙伝の記述を引用して述べ、この「トップシークレット」の文書とは日米合同調査団による原爆被害報告書のことであり、昭和 31 (1956) 年に『日本における原爆の医学的効果』という題名で出版された、としている」²⁰と述べている。

また、ABCC と独立で調査を行った広島大学原爆放射能医学研究所の被曝白血病の研究者たちは自らの研究と ABCC の白血病の調査との間に大きな違いはなく、互いに相補的な関係であると支持し、共同研究さえ行った。すでに昭和 20 (1945) 年から昭和 21 (1946) 年の間にアメリカ軍が始めていた調査に日本はアメリカ軍部の下で協力していたのだ。このことから、日本が ABCC の活動に参加したことは否定できない。

その後、ABCC の研究・活動によってモルモットの扱いをうけたことや軍事的研究に役立てようとする姿勢に批判が広まり、怒りの声が向けられた。その為、調査を受診する人数も、ある調査では半分に減っていった。しかし、ABCC の存続が危ぶまれた時、日本にフランス財団が派遣された。目的はアメリカの原子力開発推進策に伴うデータを広島・長崎の被爆者調査からなんとしても獲得することである。その為、立て直し策として日本側の協力を得る形に改めた。調査研究が日本との緊密化が追求され、死亡診断書にある程度の信頼を置く形に改められた。

実際に現在、これらの ABCC の対応に苦しんだ人は沢山いるにもかかわらず、ABCC の活動の事実・実態を知らない人は多いのではないだろうか。そこで、どのくらい ABCC の存在について知っているのか実際にアンケートをとった。

結果は、250 の母体数に対して、ABCC (広島傷害調査) について知っている人は、わずか 8 件、全体の 3.2% だった。他の知識に対しても、割合が低いことが読み取れる。

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhsj/26/163/26_129/_pdf (閲覧日：2024 年 1 月 9 日)

²⁰ 柿原秦「ABCC と原子爆弾影響研究所」、東京海洋大学『生物学史研究』 No. 95 (2017)、42 ページ

https://www.jstage.jst.go.jp/article/seibutsugakushi/95/0/95_37/_pdf/-char/en (閲覧日：2024 年 1 月 9 日)

広島について知っていることの中から当てはまるものを全て選んでください。
250件の回答

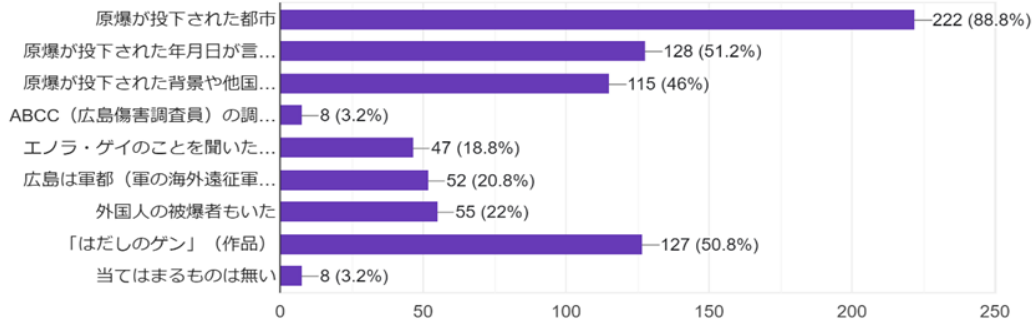


図1 広島について知っていることに関する調査結果

つまり、ABCCの対応に苦しんだ人は沢山いるにもかかわらず、このような事実・実態を知らない人は多い。たくさんの被爆者、非被爆者の方が犠牲になったにも関わらずABCCの活動や存在というものは日本から風化されてしまっており、私たちの記憶には残っていないのだ。

しかし、同じような活動を今後も繰り返さないようにするためにも日本でも一部では協力体制をとっていたことも含めABCCの活動・存在について忘れてはいけない。原爆投下時にこのような悲惨な研究・活動があり、罪なき人々が苦しんだことを被爆国として、そして全世界の一人として知っておくべきだ。その為に私たちができることは、一人一人の意識の中から忘れないようにするため、このような事実があったことを発信することであると考える。

第2章 広島観光を検討するための基礎的情報(2) 核兵器と核兵器に関する認識

第1節 核兵器の現状

第1項 世界における核兵器の現状

令和5(2023)年現在、地球上に存在する核弾頭の総数は推定12,500発である。核弾頭の総数は、冷戦後一貫して減少傾向にあるため、前年比、200発の減少している。だが、「現役核弾頭」の数は推定9,500発存在している。「現役核弾頭」は整備され、いつでも使用可能な状態のものを指す。平成30(2018)年2月以降、明らかな増加傾向にある。保有国には、ロシア、アメリカ、中国、フランス、イギリス、パキスタン、インド、イスラエル、北朝鮮の9か国が存在する。

では、令和5(2023)年現在、「核戦争」が起きた場合、どうなってしまうのか、国際プロジェクトによる3月の報告には想定される核兵器使用には以下の5パターンが存在するとされている。

1. アメリカ⇄北朝鮮・中国（18 発）
2. ロシア⇄アメリカ（8 発）
3. 東京（テロ）（1 発）
4. 北朝鮮⇄アメリカ（3 発）
5. 中国⇄アメリカ（24 発）

上記の中で一番核兵器使用の確率が高いと言われているのが 4. 北朝鮮⇄アメリカである。北朝鮮による先制使用に対してアメリカが反撃を行う。経済制裁等によって窮地に追い込まれた北朝鮮が、アメリカ、韓国を交渉のテーブルに着かせるために射程距離の短い「戦術核」で広島型よりも低威力である 10kt 相当のものが使用されると想定されている。合計 3 発の使用により、犠牲者が 4 万人にも上るとされている。その中で、放射線物質の拡散が問題として挙げられる。比較的威力の低い戦術核でも強い西風が吹く場合、日本にまで到達する恐れがある。

また、史上最悪の被害が出ると想定されているのが、「台湾をめぐる、中国とアメリカ」が対立するケースである。台湾で独立を目指す政権が誕生したことをきっかけに、中国による軍事侵攻がアメリカとの闘いの引き金となる。劣勢を強いられた中国が先制使用を繰り返すことにより、グアム、各種アメリカ軍基地に対して使用。エスカレートする戦いの中で合計 24 発が使用され、260 万人の死亡、被爆による長期的な影響で亡くなる人は 9 万 6,000 人から 83 万人に上るとされている。

また、今回のシミュレーションによって核兵器使用による新たな脅威が発見された。燃えやすいものが多い市街地が攻撃された際、「火災嵐」が発生すると判明した。核爆発の後、空気が火災によって熱せられ、強い上昇気流が発生する。中心に引き寄せられるように強い風が吹き込むため、町全体を飲み込む巨大な炎の嵐が逃げる人々の行く手を阻むとされている。200kt の核兵器が使用された場合、人々が市に至る「火災嵐」の範囲は直径 10km にまで拡大される。

「令和 4（2022）年 9 月北朝鮮の金正恩総書記が「アメリカへのけん制のために、核の放棄をすることはできない」と最高人民会議にて語っている。経済状況の悪化による国民の不満が限界まで高まりきった時、核兵器の使用により国民の目を現実からそらす。このような事態を警戒し、北朝鮮の国内状況の悪化に注目しなければならない」²¹とブルース・ベネットは語る。シミュレーションによって現代における核兵器使用の恐ろしさが判明したが、判明しただけでは核廃絶にはつながらない。「核抑止」ではなく、「核廃絶」のために、核兵器に頼らなくてもすべての国の安全確保がどのようにしたら保たれるのかを考えなければならない。

²¹ NHK「クローズアップ現代」2023 年 8 月 21 日（月）放送分「もしも今核兵器が使われたら 初のシミュレーションが示す脅威」<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4812/>

第2項 アンケート結果から見る非戦争体験者の認識

本項では、インターゼミ・エンターテインメント班が行ったアンケート結果から非戦争体験者の核兵器の認識についてまとめる（詳細は論文末の付録参照）。

日本は唯一の戦争被爆国である。
250件の回答

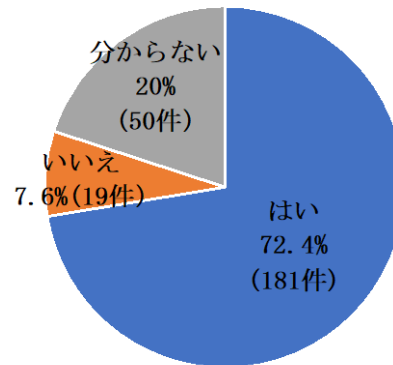


図2 日本が唯一の戦争被爆国であることに対する認識の調査結果

この設問において、いいえ、わからない、の回答が30パーセント近くになっているのは、混沌としている世界情勢、過去の対戦において、戦争以外での核兵器使用の可能性のもとからだろう。年齢別に分析を行うと、10代20代の割合が90%以上を占めていた。

2023年6月時点、世界中にある核弾頭の数はおよそどのくらいあると思いますか。
250件の回答

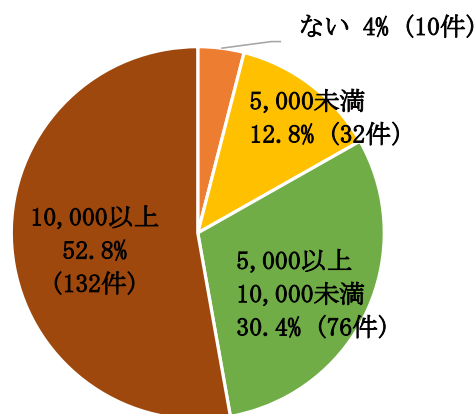


図3 世界の核弾頭数の認識の調査結果

割合としては、正解である 10,000 以上 52.8% (132 件)、5,000 以上 10,000 未満 30.4% (76 件)、5,000 未満 12.8% (32 件)、ない 4% (10 件) となった。年齢別にみると、「ない」を選択した 10 件全て 10 代 20 代であった。正解 (10,000 以上) を選択した 10 代 20 代の割合は 25% を下回っており、他の世代と比べて正答率は下がっている。

核保有国をすべて選択してください。

250 件の回答

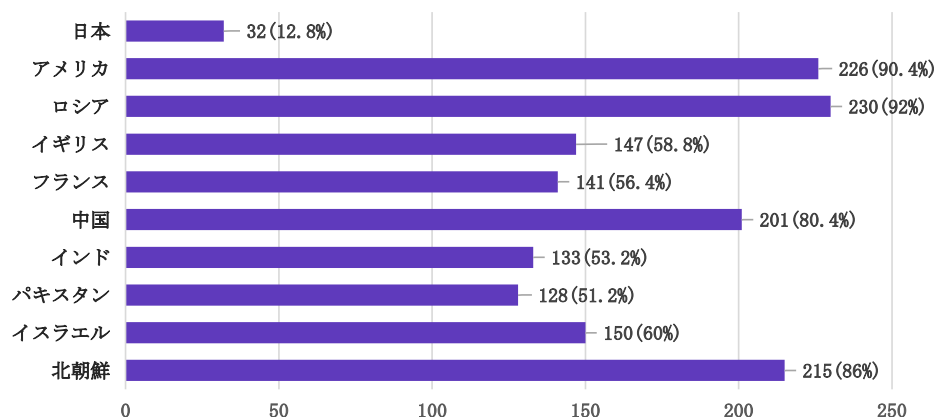


図 4 核保有国に関する認識の調査結果

核保有国を全て選択してもらった際には、日本を選択した 32 件すべてが 10 代 20 代の回答であった。上記の 2 設問と合わせて、特に若い世代の核兵器の認識率が低いことが浮き彫りとなった。日本が核兵器を保有していないこと、日本の近隣には核兵器を保有している国が多く、囲まれていることを理解してもらう必要があり、核兵器の存在、戦争は他人事ではないことを強調していくことが重要であるだろう。

第 2 節 海外のマスコミ・博物館展における核認識

第 1 項 韓国とアメリカのマスメディアを例に

韓国の場合、広島への原爆投下から 60 年後の韓国の事が書かれた新聞「東亜日報」では日本が被爆国という被害者であることを強調。日本は戦時中、韓国に対して行った侵略行為を直視せず、忘れようとしている事。昭和 20 (1945) 年 8 月の原爆投下当時、広島・長崎の市に十数万人程度の韓国人が暮らしていたが、広島と長崎合わせて約 7 万人が被害に遭い、2 万 3 千人が韓国に帰国した事。歴史的事実の評価も、受けてきた教育も、マスコミ報道の内容も違った。それにより、原爆に対する意識も違うため互いに事実を知り、考えていくことが重要である。

図 5 ではアメリカ人の認識について取り上げた。アメリカの最近の変化として分かった事が令和 2 (2020) 年に NHK 広島放送が「平和に関する意識調査」として 18 歳から 34 歳を対象にインターネットでアンケートを行ったもので、「原爆についてもっと知りたいと思う

か」と質問に対して、約 80.5%の人が知りたいと答えた。調査会社「YouGov」が令和 2 (2020) 年 8 月 6 日から 7 日に行った世論調査で、「原爆投下は正しい判断だったか」という質問では、正しかったと答える 55 歳以上の方は 52%いるのに対し、18 歳から 24 歳の若者は 27% 少ないという結果になった。これらのことから、「原爆投下によって戦争を終えることができた」という認識は、「自国が原爆を投下した結果、何が起きたのか、本当のことが知りたい」など原爆投下に対する認識の変化がみられ、米国の教科書は原爆の決定をめぐる賛成・反対の立場を学生に伝えようとしているということが分かった。

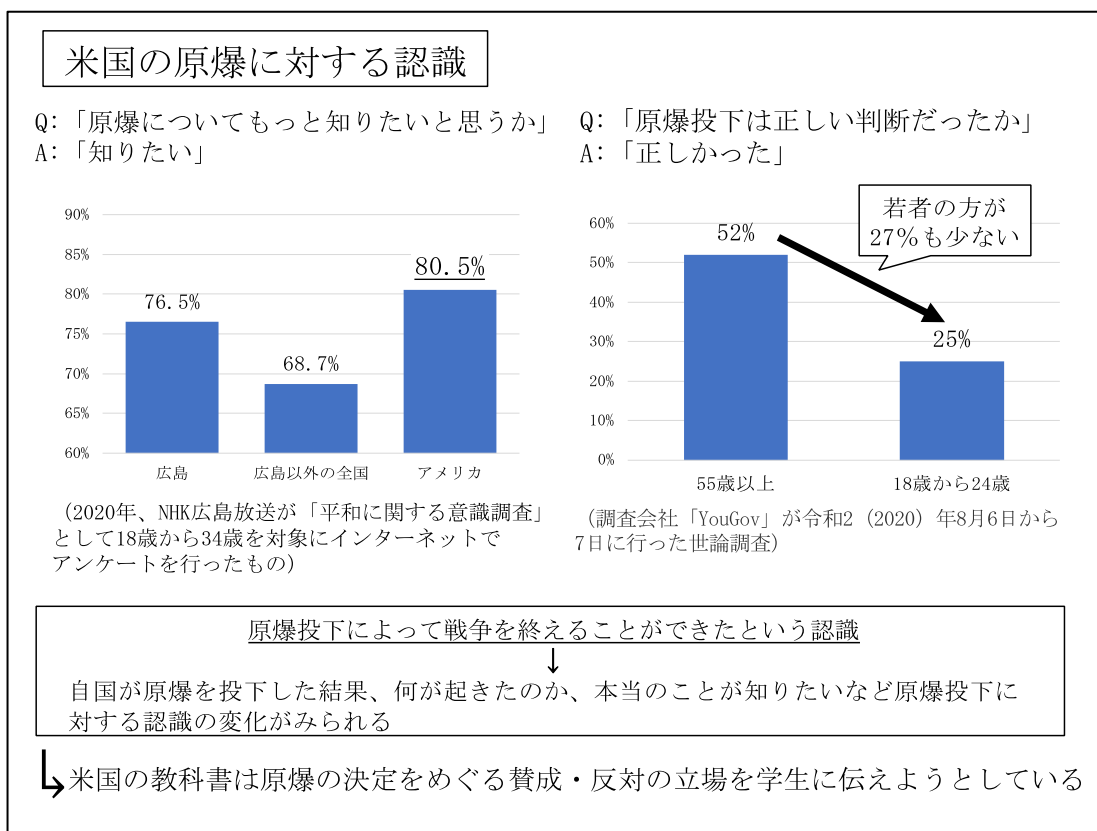


図 5 米国の原爆に対する認識調査結果と考察

出典：調査会社「YouGov」が 2020 年 8 月 6 日から 7 日に行った世論調査をもとに筆者作成

第 2 項 日本、ドイツ、アメリカの博物館の場合

日本と海外との比較として世界の戦争の記録を残している博物館の調査を日本・ドイツ・アメリカを対象に行った。調査から分かったことは、日本は戦争の話をする時には、自分達が考えている「平和」に対して共感をしてもらえるよう、言動などに人一倍気を付ける保守的な意思があり、核兵器の恐ろしさ・非人道性を訴えている。しかし、日本は他国に起こした加害・戦争に説明する総括が出来ていないことや国立としての戦争博物館がないことが課題点であると分かった。

ドイツは、戦争の話を美化して話そうとはせず、また、敗戦した記憶をタブーとして扱っていない。そして大きな特徴は、自国の博物館の展示には主にベルリンの歴史的な中心部に位置する内容が多いことである。博物館の教養目的として、哲学・倫理・歴史的な問題で議論するための力、歴史的判断の強化に専念している傾向があるという点である。逆に、ドイツは他国との関係性を示す展示品・素量が少ない。

アメリカの博物館は、戦争について話す内容として多かったのが、軍事力の誇示と愛国心の育成を目的としている内容が多いことが分かった。また、博物館の教養目的として多かったのが、自由の代償によって失ったものを理解してもらう内容が多い傾向があると分かった。しかしながら、その一方で、アメリカは世界に対し、核の非人道性・恐怖心を教えようという意思が薄いということが分かった。

価値観で日本は戦争によって命を失いたくない。国家の意思が保守的意思。世界中に「平和」の共感を持ちたいと考えている。ドイツでは、国家・戦争を美化せず、軍事をタブーとして扱わず敗戦の記憶を残している。アメリカでは軍事力の誇示と愛国心の育成、世界紛争の教訓を受け入れる様に設計している。

展示内容として、日本は、焼け焦げた衣服や弁当箱、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真・資料。ドイツは、ドイツが実際使っていた武器や戦車、ナポレオンに対する諸国民戦争やドイツ統一戦争の資料。アメリカは、軍用車両、ノルマンディー上陸作戦の写真、戦没者の遺品。勝利に導いた製造業の歩みなどを紹介している。また、これらを展示する事によって伝える目的として、日本は世界に核兵器の恐ろしさ・非人道性を訴える。「平和」についてよく知り、考えてもらうという考え方を持っている。ドイツは包括的な哲学的、倫理的、歴史的な問題が議論される、歴史的判断の強化を計っている。アメリカはあらゆる世代が自由の代償を理解し、そこからインスピレーションを得る力の強化を計っている。

課題として、日本は加害・戦争について説明するための総括ができていない。国立の戦争博物館がない。ドイツは他国との関係性を示す展示品・資料が少ない。ベルリンの歴史的な中心部に位置する内容が多い。アメリカは世界に対して核兵器に対する非人道性・恐怖心を教えようという意思が薄いという事が分かった。

なお、米国立航空宇宙博物館のエノラゲイについての説明文（平成 27(2015)年当時）では被害状況（死傷者）について一切触れていない。だが、国立航空宇宙博物館は、令和 7(2025)年に原爆投下後の広島と長崎の街の写真のほか、被爆者の遺品などを展示する計画を立てている。また、科学者による原爆投下への反対など、当時のアメリカ国内の原爆をめぐる議論についても紹介するとみられると、日テレ NEWS2023²²で報じられている。

²²日テレ NEWS2023 公式 YouTube サイト、2023 年 6 月 26 日放送

<https://www.youtube.com/watch?v=efUOyEjPZa0>（視聴日：2023 年 7 月 1 日）

表2 日本・ドイツ・アメリカの戦争の記録を残している博物館

	日本	ドイツ	アメリカ
価値観	<ul style="list-style-type: none"> 戦争によって命を失いたくない 国家の意思が保守的意思 世界中で「平和」の共感を持ちたい 	<ul style="list-style-type: none"> 国家・戦争を美化しない 軍事をタブーとして扱わず敗戦の記憶を残している 	<ul style="list-style-type: none"> 軍事力の誇示と愛国心の育成 世界紛争の教訓を受け入れるように設計
展示	焼けこげた衣服や弁当箱など被爆者の遺品や被曝の惨状を示す写真・資料	ドイツが実際に使っていた武器や戦車、ナポレオンに対する諸国民戦争やドイツ統一戦争の資料	軍用車両、ノルマンディー上陸作戦の写真、戦没者の遺品や勝利に導いた製造業の歩み
目的	<ul style="list-style-type: none"> 世界に核兵器の恐ろしさ・非人道性を訴える 「平和」についてよく知り、考えてもらう 	包括的な哲学的、論理的、歴史的問題が議論される、歴史的な判断の強化	あらゆる世代が自由の代償を理解し、そこからインスピレーションを得る力を強化
課題	<ul style="list-style-type: none"> 加害・戦争について説明するための総括ができていない 国立の戦争博物館がない 	<ul style="list-style-type: none"> 他国との関係性を示す展示品・資料が少ない ベルリンの歴史的な中心部に位置する内容が多い 	世界に対して 核兵器に対する非人道性・恐怖心を教えようという意思が薄い

出典：各国の博物館関連資料をもとに筆者作成

第3章 広島観光を検討するための基礎的情報 (3) 広島観光の過去と現在

第1節 戦前の広島観光

第1項 日本の戦前の観光政策

内田によると、第一次世界大戦後の昭和5（1930）年、政府の国策として、貿易収支改善に向けた外客誘致を掲げ、鉄道局の外局として、国際観光局が創設されたと説明している²³。つまり、日本は、西欧の観光先進国が戦後の経済の立て直しを再建するために観光事業に乗り出したのと同様に、「観光立国」を目指し始めたのである。

また、その後、世界恐慌が起こり、世界の観光に対する情勢は悪化していったが、昭和9年から同11年までの間に、昭和8（1933）年より、アメリカのルーズベルト大統領のニューディール政策が始められたことにより、アメリカとヨーロッパでは経済が回復したことで、海外からの訪日観光客の消費額が1億円を突破するほど、観光産業が成長した。当時の海外観光客の誘致先は、政府による国際観光政策によって建設されたリゾートホテルの建設地である避暑地やリゾート地が中心だった、と説明している（内田 2018、163-180）。

年代別に建設された主な外国人向けの宿泊施設は以下の通りである。

昭和8（1933）年 上高地ホテル（長野県）

昭和9（1934）年 蒲郡ホテル（愛知県）、ホテルニューグランド（横浜市）、琵琶湖ホテル（滋賀県）

昭和10（1935）年 新大阪ホテル（大阪市）、雲仙観光ホテル（長崎県）

昭和11（1936）年 唐津シーサイドホテル（唐津市）、富士ビューホテル（山梨県）、川奈ホテル（静岡県）、名古屋観光ホテル（名古屋市）

²³ 内田宋治著、『外国人が見た日本 「誤解」と「再発見」の観光150年始』、中公新書、2018年、163-180 ページ

昭和 12 (1937) 年 志賀高原温泉ホテル (長野県)、赤倉観光ホテル (新潟県)
昭和 14 (1939) 年 阿蘇観光ホテル (熊本県)、ニューパークホテル (宮城県)
昭和 15 (1940) 年 日光観光ホテル (栃木県)

上記には、広島市は存在していないものの、当時から、多くの外国人観光客の誘致を目的とした政府による観光政策がなされていたことは、広島の新たな観光を考えるうえで、事実として捉えておきたい。

第 2 項 原爆投下前の広島市の観光

広島市は昭和 8 (1933) 年 7 月に広島観光協会を広島市役所に発足させた。昭和 10 (1935) 年 8 月には広島県が広島県観光協会を広島県庁に設置した。昭和 11 (1936) 年に広島観光協会が刊行した観光パンフレット『ひろしま』では「聖跡大本営跡」と「聖跡旧御便殿」が大々的に掲載されている。日清戦争後、天皇関連の史跡が「聖跡」として保存され、観光地となった。先の観光冊子では、「西日本第一の雄都こそ、実に我が広島市である」、「陸の軍都」であることや「軍都」であることが、戦前の広島市の観光においての目玉となっていた²⁴。

第 2 節 戦後の広島観光—とくに「広島修学旅行」

平和伝承活動の最大の問題点として、戦争体験者の減少と高齢化が挙げられる。デジタル化が進む現代において情報を容易に獲得することが可能であり、オンライン上で会話が可能であるが、人間の思いを伝える手段として最も有効とされるのは、同じ空間で対話することであるだろう。だが、証言者の減少と平均 84 歳を超える高齢化により、将来世代に向けた伝承活動を行うことが困難になり始めている。

本節では、戦争体験伝承のために活動を行っている方々の歴史と、証言活動の将来性についてまとめる。

戦後、原爆被害者はラジオ、テレビ、新聞を通して、被爆体験の証言や手記を残す活動を始めた。広島県原爆被害協議会や広島原爆被爆教職員の会などは証言活動を展開し、被爆者団体による手記集なども発行された。また、広島平和文化センターは、「ボランティア語り部」として証言活動を開始した。1970 年代中盤から増加する中学生、高校生による修学旅行の中で、被爆体験の伝承活動は大きな反響を呼んだ。「広島修学旅行」と呼ばれる教育旅行で広島を訪れた生徒が被爆者の話を聞くスタイルを、中学教師、江口保が発案した。

江口の取り組みの特徴として、学生を各グループに分割し、平和記念公園内の原爆死亡者慰霊碑前で被爆者の証言を聞くスタイルを確立した。江口は、学生に講話をしてくれる被爆者を直接現地で探した。江口の働きかけによって非戦争体験者である 10 代の若者に対する

²⁴ 桐谷多恵子「広島の観光における被爆者証言活動の意味：切明千枝子さんの修学旅行者への対応経験を中心に」、多摩大学グローバルスタディーズ学部、紀要 15 号、2023 年、22 ページ。

平和伝承活動の一環としての「広島修学旅行」が始まった。

第3節 広島市による観光振興の現状

第1項 広島市ピースツーリズムの現状

広島市は観光振興を行っている。また、広島ピースツーリズムの現状を三つに分けることが出来る。まず、その一つとして広島市の基本方針を立て、目標、取り組み、課題、解決策を分けてピースツーリズムを推進していることだ。広島市の平和への取り組みとして四つを行った。

一つは広島市を復興させようと広島平和記念都市建設法の施行があった。これは「恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴とし、広島市を平和記念都市として建設することを目的とする」(第1条)と明記されており、本法律の施行後に、広島市の都市づくりの方向性(平和記念都市としての役割)が決定した。

二つ目は核兵器廃絶を目指した取り組みだ。この取り組みとして、国内外の世論の醸成、平和主張会議の充実強化や平和宣言の作成・発信等に取り組んだ。

三つ目は平和意識の醸成だ。こども平和の集い、中・高校生ピースクラブ、若者による平和の誓いの集い、折り紙再生紙によるピースメッセージ事業、平和文化月間におけるイベントの開催等を行った。

四つ目は被爆体験の継承・伝承だ。被爆建物等の保存・継承の推進、広島平和記念資料館収蔵資料の保存措置の強化、被爆資料の収集、平和学習講座、ユースピースボランティア事業、修学旅行生への被爆体験講話、被爆体験伝承者による伝承講話、国際平和拠点ひろしま構想の推進等が行われた。

また、広島県商工労働局観光課は、それぞれ四つの目標、取組、課題、今後の解決策を明確にした。

一つ目として地域を生かした魅力ある観光地づくりによる新たな経済成長を目指した。これを成し遂げるための取り組みとして広島県内周遊のモデルコース(原爆ドーム・宮島〜呉、瀬戸内広島全域)への誘客推進や、民間事業者との連携による事業推進に取り組むことに決めた。また、その課題として二つの世界遺産に続く集客力の高い観光資源が育っていないこと、都市型観光の比率が高いことが挙げられた。このことから考えられる今後の解決策は、広島ならではの歴史・文化・自然を「テーマ」にした観光の推進、また「ひろしま」「瀬戸内」の二つのブランド資源を生かした観光振興による県内経済の成長であると決めた。

二つ目は観光客数の増加・観光消費単価の上昇の目標だ。これらを成し遂げるための取組として県内周遊・広域周遊が挙げられる。また、課題は民間事業者が中心となった観光プロダクトの取組が不十分であること、今後の解決策としては国内観光客の認知度を向上させるためのブランディング、民間企業のプロダクト開発支援が挙げられた。

三つ目は国内外観光客の受け入れ対応の整備という目標だ。この取組として道の駅・海の駅の整備、観光案内の多言語対応、県内おもてなし人材の育成が挙げられる。また、国内観

光客の伸び悩み、国外観光客の県内での宿泊、周遊滞在につながっていないという課題があり、年間を通じた誘客につなげるための観光プロダクトの開発、観光人材の育成が今後の解決策である。

四つ目は国際観光の推進という目標だ。その取り組みとして海外に向けた情報発信、外国人を魅了する観光地づくりをし、また課題として欧米に比べアジアからの来訪者が少ないこと、多様なニーズに応えるためのマーケティング力不足という課題がある。今後の解決策としては特定国（欧米・アジア）をターゲットとしたプロモーションの実施、外国人観光客がもつめる旅行商品の提供が挙げられる。

第2項 戦後の伝承活動と被爆者の「ホスピタリティ」

被爆体験伝承のために様々な取り組みが行われている中で桐谷は、被爆者の「ホスピタリティ」の問題を指摘している。一般的に用いられる「ホスピタリティ」には「歓待」や「おもてなし」を表し、求めに対して他者を受け入れる意味を示す。「ホスピタリティ」という言葉の意味に立ち返って考えたとき、江口の求めに応じて、苦しみを抱きつつも求めに応じて自身の体験や思いを語るという行為を、他者を「歓待」と捉えることで被爆体験を語り始めた被爆者の行為は「ホスピタリティ」に根差したものであると捉えることも可能であると桐谷は語る。

第3項 証言活動の将来

被爆体験を自ら話す被爆者の活動は今も継続しているが、厚生労働省が令和4（2022）年に発表した「被爆者健康手帳」保持者の平均年齢は84歳を超えており、今後語れるひとが減っていくのは必然となる。そんな中、被爆体験を伝える「被爆体験証言者」の体験、思いを引き継ぎ、それらを伝える「被爆体験継承者」の養成を平成24（2012）年から始めている。令和4（2022）年度からは、家族の被爆体験等を受け継ぎ、それらを伝える「家族継承者」の養成研修受講者を募集し、養成に取り組んでいる。2年間の研修を受けることで、広島平和文化センターの委嘱を受けて被爆体験継承者または家族継承者として活動を行う。令和5（2023）年5月1日現在、被爆体験継承者195人と家族継承者7人が活動中である。継承者は、学校等の依頼に応じ継承講話を行うだけでなく、広島平和記念資料館などで定時講話を行っている。

さらに、広島市は被爆体験の継承のために以下の取り組みを行っている。

(1) 平和学習講座

小中高等学校における平和学習を支持するために、講師を派遣し、平和学習講座を開講。広島平和記念資料館が養成した講師が独自の資料を使用し、被爆の実相や核兵器をめぐる世界情勢講話を実施している。講話内容には、被爆の前後で広島がどのように変化したか。原爆の威力。現在の核兵器の数。平和伝承活動の取り組みの説明等がある。

(2) ユースピースボランティア事業

次世代を担う広島府の青少年自らが、平和の大切さを学び、海外からの訪問者に対して、被爆の実相を英語で伝えるボランティアガイドの育成と活動の支援。

(3) ヒロシマ ピース ボランティア事業

市民参加による被爆体験の伝承を図るために、公募によるボランティアスタッフによる広島平和記念資料館の展示解説や平和記念公園内の慰霊碑解説活動。

(4) 広島平和記念資料館ボランティアスタッフ活動支援

広島平和記念資料館の来場者等に被爆の実相等を正確に効果的に伝承していくため、資料館に携わるボランティアスタッフを対象に継続的な研修を行っている。

(5) 海外へのオンライン被爆体験証言

海外の人々に被爆の実相を伝えるために、広島と海外とインターネット上のウェブ会議システムを用いて被爆体験の講話や原爆記録ビデオの上映を行う。

第4項 広島への修学旅行生の年代別推移と分析

この項では、広島県に関する事を掲載している公式サイト「Dive! Hiroshima」（一般社団法人広島県観光連盟と広島市の共同運営）・「広島市観光概況」から広島県の観光に関する統計データと筆者たちが令和4（2023）年9月10日から9月12日まで現地へ赴き、広島に関する情報収集を行った。それらのデータを活用し広島への修学旅行生の年代別推移と分析を行った。

まず、広島公式サイト「Dive! Hiroshima」から得たデータからは令和3（2021）年は、緊急事態宣言の発令による広島平和記念資料館の臨時休館により、春の修学旅行シーズンにおいて多くの学校で修学旅行が延期やキャンセルとなったが、10月～12月にかけては感染状況が落ち着き、秋の修学旅行シーズンでは修学旅行生等の数がコロナ禍前の水準まで回復したことから、通年では対前年比73.9%増の16万人となった（令和元（2019）年比では51.5%減）。

「広島市観光概況」から得たデータでは修学旅行生数は、平成3（1991）年までは50万人台で推移していたが、それ以降、児童・生徒数の減少や修学旅行の多様化などにより減少傾向にあったことから、平成16（2004）年度に、修学旅行誘致専任職員を配置し、全国の学校や旅行会社等に対する個別誘致活動を開始した。こうした取り組みの結果、全国の学生数が減少傾向を示しているのに対し、平成20（2008）年以降は、30万人以上を維持している。令和元（2019）年は、全国の学校や旅行会社に対する誘致活動に取り組んでいる中、平成26年度及び平成28（2016）年度に個別訪問を行った中部地方の中学校や近畿地方の小中学校などからの修学旅行生が増加した結果、対前年比1.2%増の33万人となり、12年連続で30万人台の水準を確保したという事が分かった。

また、広島市経済観光局観光政策部令和2（2020）年版の「広島市観光概況」にもよると広島平和記念資料館へ入館した修学旅行等団体の数としているが、令和元（2019）年は団体数では4,693校（対前年比1.9%増）、入館者数は33万6人（同1.2%増）で、団体数、

入館者数共に増加したという事が分かった。

表 3 来広修学旅行生の推移

年	小学生		中学生		高校生		全体	
	団体	個人	団体	個人	団体	個人	団体	個人
平成 15年	2,812	151,386	905	80,539	790	84,690	4,507	316,615
平成 16年	2,796	151,534	876	74,187	904	76,228	4,576	301,949
平成 17年	2,744	148,766	897	75,056	823	77,434	4,464	301,256
平成 18年	2,725	156,246	934	78,682	872	70,004	4,531	304,932
平成 19年	2,674	153,056	861	75,305	891	69,340	4,426	297,701
平成 20年	2,619	155,003	875	78,330	916	73,662	4,410	306,995
平成 21年	2,539	151,399	893	81,545	831	71,911	4,263	304,855
平成 22年	2,635	161,234	1,069	81,073	845	71,598	4,549	313,905
平成 23年	2,557	155,156	1,050	101,519	683	70,735	4,290	327,410
平成 24年	2,564	154,633	972	82,959	879	75,705	4,415	313,297
平成 25年	2,545	154,227	994	87,788	859	74,453	4,398	316,468
平成 26年	2,471	147,537	963	86,225	810	71,278	4,244	305,040
平成 27年	2,478	143,549	976	94,622	914	96,528	4,368	334,699
平成 28年	2,498	143,260	1,051	93,077	1,001	86,205	4,550	322,542
平成 29年	2,467	140,236	1,068	90,122	991	89,245	4,526	319,603
平成 30年	2,468	141,787	1,090	93,201	1,048	91,110	4,606	326,098
元年(平成31年)	2,557	146,516	1,109	95,428	1,027	88,062	4,693	330,006

出典：広島市経済観光局観光政策部 令和 2（2020）年版広島市観光概況 修学旅行生の動向 9 ページ

表 II-1 <https://www.city.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/137667.pdf>

第 5 項 広島県への外国人観光客をめぐる

(1) 年代別推移と分析

この項では、広島への外国人観光客数の年代別推移と分析について情報収集及び分析を行った。外国人観光客数は、平成 15(2003)年度から官民あげての外国人観光客誘致事業である国のビジット・ジャパン・キャンペーン (VJC) が開始され、平成 16 (2004) 年度には 20 万人を突破、その後も VJC 事業の推進により、連続して過去最高を更新し、平成 19(2007)年には初めて 30 万人を突破した。その後、平成 25 (2013) 年には 50 万人突破、平成 27 (2015) には 100 万人の大台を突破し、その後も順調に増加している。

令和元 (2019) 年は、「ラグビーワールドカップ 2019」が日本で開催された効果により、イギリス・オーストラリア・フランス・ニュージーランド等ラグビー人気の高い国からの観光客が増加した。また、「トリップアドバイザー」において、広島平和記念資料館や厳島神社に加え、前年にはランク外だった縮景園と宮島の大本山大聖院がそれぞれ 20 位圏内にランクインし、定番の観光スポット以外の人気も高まっている。その他、海外の誘客重点市場として 11 カ国、11 の地域に対し、広島県等と連携してプロモーション活動に取り組んでいることなどから、前年対比 3.6%増の 184 万 7 千人となった。

しかしながら、令和 2 (2020) 年、新型コロナウイルス感染症感染拡大により、防止対策として入国制限が行われ、年間を通して観光目的での入国ができない状況であったことから、全国の訪日外客数は対前年比が 94.0%減と落ち込み、本市への外国人観光客も対前年

比が 87.0%減の 2 万 7 千人となった（令和元（2019）年）比では 98.5%減）。令和 3（2021）年の外国人観光客数は 5.7 万人で、前年と比べて 34.5 万人減少した。令和 2（2020）年 3 月以降、新型コロナウイルス感染症の世界的拡大を受けて入国制限が実施され、感染症拡大前の令和元（2019）年と比較して 270 万人の減少となるなど、大幅に減少している。なお、外国人観光客数については、令和元（2019）年まで 8 年連続で過去最高を更新していたが、令和 2（2021）年は 9 年ぶりに減少に転じ、以降は新型インフルエンザが発生した平成 21（2009）年の 51.3 万人や、東日本大震災が発生した平成 23（2011）年の 48.7 万人などを下回る結果となっている。

市場別外国人観光客数をみると、令和 3（2021）年は、アメリカが最も多く 18 万 2 千人、次いで中国が 6 万 2 千人となった。各市場ともおおむね減少しているが、国内における労働者が比較的多いベトナムやフィリピンについては、大きく順位が上昇した。地域別に外国人観光客の割合をみると、令和 3（2022）年はアジア主要国からが全体の 36.2%、欧米豪主要国からは 36.8%、その他が 27.1%であった。感染症拡大前の令和元（2019）年は、欧米豪主要国が 47.6%を占めていたが、入国制限等の影響により、広島各地域の差が少なくなってきたことが分かった。

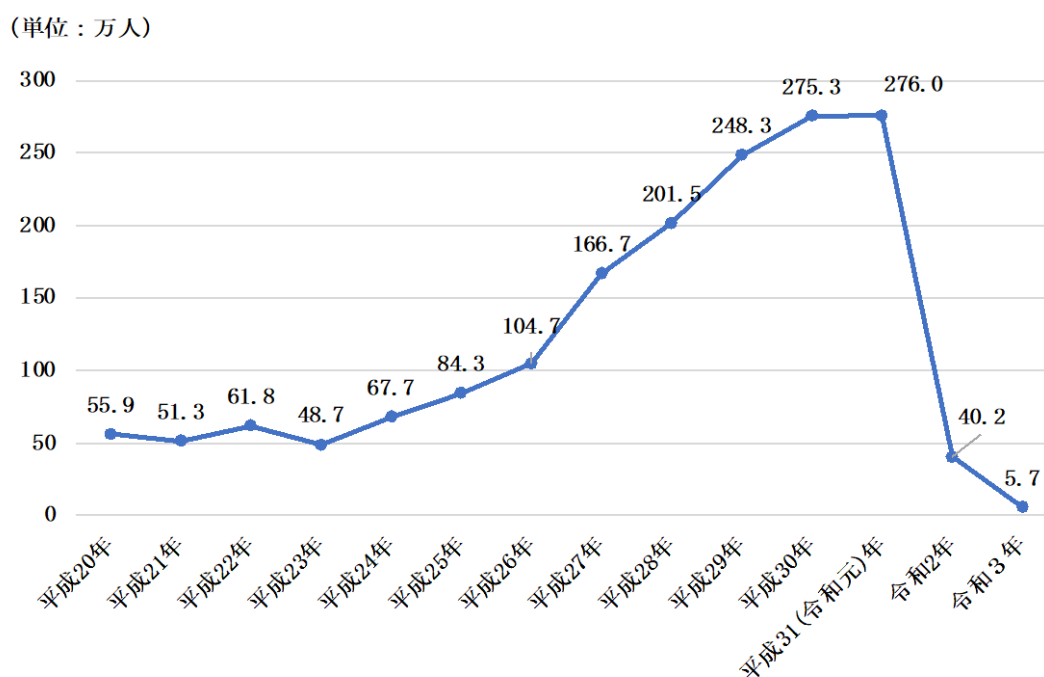


図6 令和3（2021）年 外国人観光客数の年代別推移

出典：Dive! Hiroshima 広島公式観光サイト

<https://dive-hiroshima.com/business/news/news-11473/>

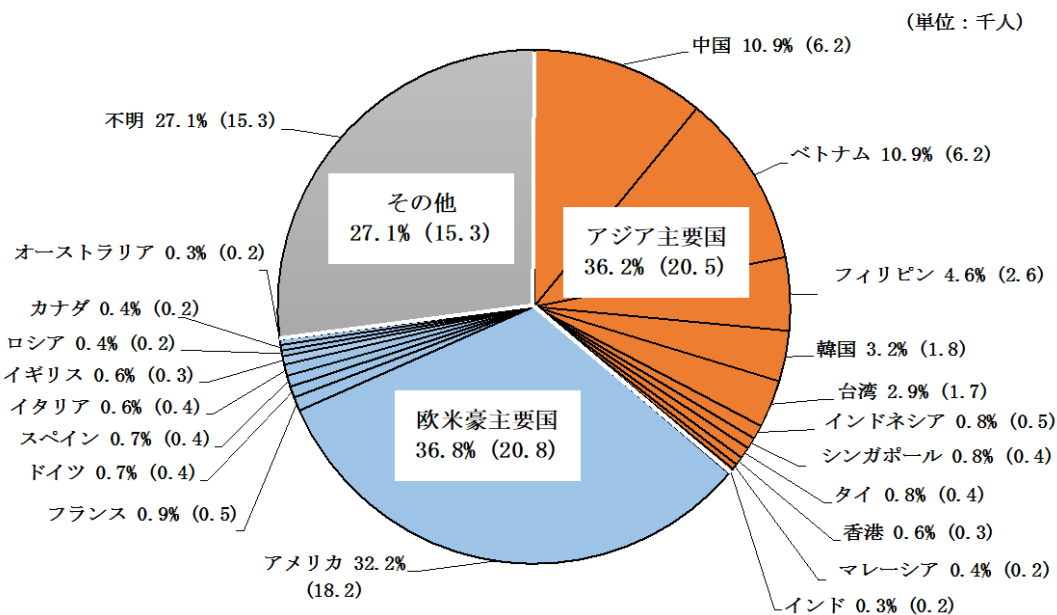


図7 令和3(2021)年広島県 市場別観光客数の割合

出典：Dive! Hiroshima 広島公式観光サイト

<https://dive-hiroshima.com/business/news/news-11473/>

(2) 外国人観光客の感想（広島平和記念資料館の対話ノートから）

広島平和記念資料館には「対話ノート」と名前が付けられた、見学者が感想を書き込めるノートが設置されており、その感想を読むことができる（ノートは本館に2冊、東館1階に2冊設置）。筆者は令和4(2022)年12月に書かれた対話ノートの内容を確認した。そこには日本語以外に、英語、中国語などの言語の他、筆者には判別できないような言語まで、多様な文字で感想が記入されていた。このことから様々な外国人が広島平和記念資料館に足を運んでいることがわかる。実際に筆者が広島平和記念資料館見学した際、外国人の数の多さ、国籍や民族の多様さを感じた。

対話ノートに書かれた外国人観光客の感想には、例えば、「もう二度と繰り返さない」といった内容や、「初めて自分とは関係ない異国の地で涙しました。未来が愛であふれるためには平和が必要不可欠だと再認識できた」、「何が起こったのか知らなかった人々にとっては、感情のジェットコースターのようなものだった。その傷跡はとてつもない。発表されたストーリーに感謝します」といった内容など、広島平和記念資料館を訪れ、感じたことや学んだことが多く書かれていた。また、「ひどいことばかりで本当に申し訳ない。我が国はこれまでそうしてきたし、今もそうしている。日本はどこよりも美しく、強い」と自分の国のしたことに対して謝罪するアメリカ人の文章も残されていた。慣れないであろう日本語で書いている外国人の感想もあった。翻訳に関しては著者自身が Google 翻訳と weblio 英語翻訳で英語の翻訳を行い、英語以外の言語は Google 翻訳のカメラ機能を用いて翻訳した。

参考までに、外国人以外の感想にも少し触れておくと、修学旅行で訪れた学生からの声が多く、平和を願う言葉や受け止めきれない苦しみやトラウマになった内容などが書かれていたりもした。ロシアとウクライナのことについて触れた意見もあり、単に平和を学ぶだけでなく、その背景を独自に学んだうえで広島平和記念資料館に訪れた人もいるのだと推測することができた。

対話ノートに文章を書き込むためには、自分の感じたことを振り返り、思考する必要がある。これは苦しさを伴う作業であろう。しかし、対話ノートに書かれた感想の多さや内容の多様さを考えると、このノートが平和を語り継ぐうえで重要な役割を果たしていることが強く推測される。

第6項 広島県と広島市の観光政策の関係

広島県は「地域の特徴を生かした魅力ある観光地づくりによる新たな経済成長を実現したい」を戦後の広島観光の目標として掲げた。そのためには、自立的、継続的な観光資源の確立や多彩な観光プロダクトの開発、観光需要の回復を踏まえた人材確保や育成の推進などが必要不可欠だ。しかし、課題も多く、目標を達成するために次の三つのことが問題視される。一つ目は原爆ドーム、厳島神社の二つの世界遺産、尾道市、福山市に続く観光資源が育っていないことである。

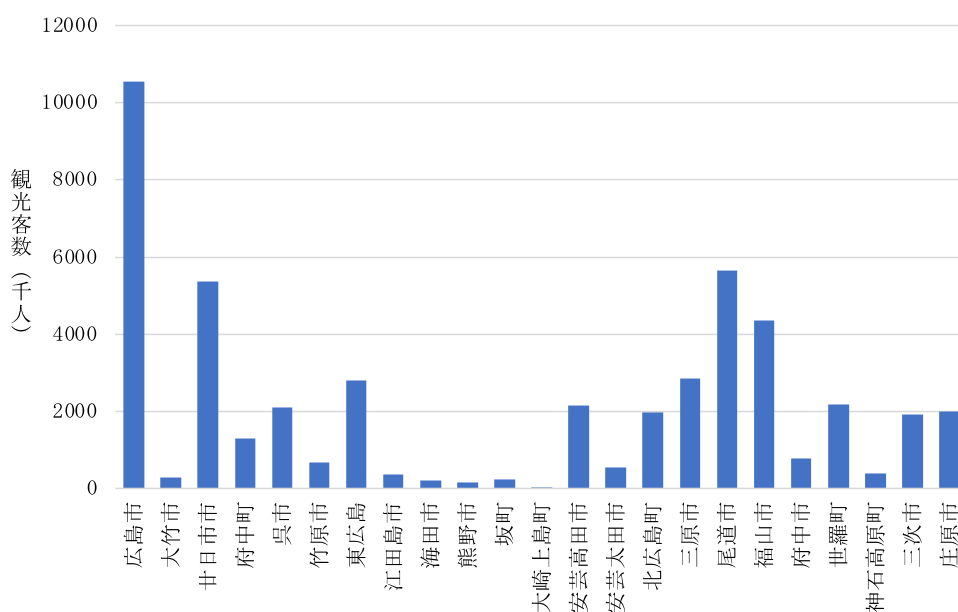


図8 令和4(2022年)広島県市・町別観光客数

出典：『令和4年広島県観光客数の動向-III-観光客統計表』「第1章総観光客数の推移」

<https://image.dive-hiroshima.com/wp->

<content/uploads/2023/07/%E4%BB%A4%E5%92%8C%EF%BC%94%E5%B9%B4%E5%BA%83%E5%B3%B6%E7%9C%8C%E8%A6%B3%E5%85%89%E5%AE%A2%E6%95%B0%E3%81%AE%E5%8B%95%E5%90%91%E2%85%A2%E8%A6%B3%E5%85%89%E5%AE%A2>

原爆ドームは広島市に、厳島神社は廿日市市にある。23の市・町のうち広島市は他のところと比べて飛びぬけて観光客数が多く、その次に廿日市市と尾道市、福山市が大差なく多い。尾道市には、向島や平山郁夫美術館があり、福山市にはレジャー施設や福山城などがある。このような世界遺産以外の観光地もあるが、そのほかの地域とは大きな差があり23の市・町のうち主に四つの市が観光地とされている。また、尾道市と福山市は隣接しているもののそれぞれの直線距離でいうと広島市から尾道市まで69 km²⁵、廿日市市から尾道市まで80 km²⁶、広島市から廿日市市まで12 km²⁷で厳島神社に行くには海を渡らなければ行けないため、それぞれの観光地はすぐにいける距離ではない。したがって、これらの四つの主要な観光地周辺の地域において観光地化推進が必要だと考えられる。また、広島県の観光連盟としては瀬戸内の自然に触れることで平和を実感することにもつながるため、瀬戸内の観光の推進を行っている。

二つ目は広島市の政策と広島県の政策とが相乗効果を生み出せていないことである。広島市では、核兵器廃絶を目指した取り組みの推進、平和意識の醸成、被爆者体験の継承・伝承などを大きな柱組みとして取り組まれている。一方で、広島県の主な業務内容として、ひろしま構想・計画、賛同者の拡大と世界への働きかけ、持続可能な平和支援メカニズムの構築、核兵器廃絶に向けた新たな政策づくり、広島県の経験を生かした復興・平和の構築等としている。そのほかに県と市の相乗効果を狙ったHIT（県観光連盟）が発足した。組織の目指す姿として「県民にとっても世界に誇れる観光地」「成長を支える産業の柱の一つ」「県民一人ひとりが地域に誇りと愛着」を掲げている。事業内容は観光に関するマーケティングやコンサルティング、プロモーションの実施、プロセスダクト開発、おもてなし推進など、そのほかにも多くの活動を行っている。その中の事業での具体的な活動の一つとして、ビジョンムービーの作成や顧客視点のプロダクト造成、発信を目的としている「HIT 広島観光大使」という制度作りなどさまざまな企画や、イベントを実施している。以上のようなこれらの取り組みが、市と県のお互いにとっての相乗効果につながる事が重要であり、今後の課題としても捉えられている。

三つ目は広島平和記念資料館が、インバウンド観光客の急増に対応できる受け入れ体制が足りていないことである。

令和5（2023）年11月時点での外国人入館者数50万7327人であり、過去最高だった平成31（2019）年の入館者数52万2781人を上回ることが予想される。また外国人の割合が

²⁵ 『japan AB・日本の距離』 「尾道市から広島市までの距離」
<https://www.japanab.com/distance/11405524-11405514> (閲覧日：2024年1月9日)

²⁶ 『japan AB・日本の距離』 「廿日市市から尾道市までの距離」
<https://www.japanab.com/distance/11404798-11405524> (閲覧日：2024年1月9日)

²⁷ 『japan AB・日本の距離』 「広島市から廿日市市までの距離」
<https://www.japanab.com/distance/11405514-11404798> (閲覧日：2024年1月9日)

34.1%であり、令和元（2019）年度の29.7%を超えている。そのため、広島平和記念資料館では最大2時間待ちとなり、市によると、長蛇の列に驚いて見学を諦める人がいるだけでなく「長時間並ぶのが大変だった」、「館内が混雑していて十分に展示を見られなかった」などの声が寄せられている²⁸。このように、インバウンドの観光客急増の対応が遅れている。

これらの課題から今後の解決策として、広島市が取り組んできたこれまでの平和教育を伝承しつつ、県と市の双方が取り組む政策での相乗効果を一層生み出すことであると広島県の担当者へのヒアリングを通してわかった。

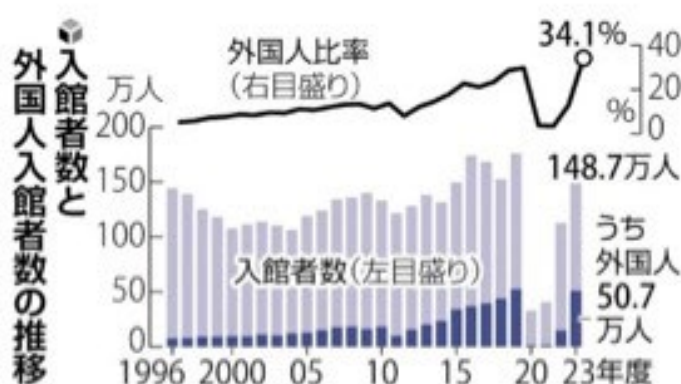


図9. 広島平和記念資料館入館者数と外国人入館者数の推移

出典：読売新聞オンライン「平和資料館 訪日客が急増」（2023年12月9日付）

補論 長崎との対比

本論文では、被爆都市広島を訪れる観光をテーマとしているが、被爆都市にはもう一つ、広島と同年の8月9日に原爆を投下された長崎が存在している。補論では、広島観光を考えるための補助として、対比的に長崎の被爆状況と継承活動、旅行者の受け止めを検討する。

長崎市は第二次世界大戦・太平洋戦争末、ファットマンという名前を付けられた原子爆弾を投下された。長崎の原爆は広島の前爆に比べ一回り大きく、威力は広島型原爆よりも大きかったが、投下の際の状況や地形の影響で、被爆範囲や死者数などは広島程ではなかった。それでも7万人以上が同年末までに死亡し、都市や社会もまた、広島と同様、甚大な被害を受けた。

長崎市も広島市と同様、原爆被害を伝えるためのさまざまな努力を行っている。爆心地近くには長崎原爆資料館や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館といった施設が建てられ、被

²⁸ 読売新聞オンライン「平和資料館 訪日客が急増」2023年12月9日05:00配信
<https://www.yomiuri.co.jp/local/hiroshima/news/20231209-OYTNT50003/>（閲覧日：2024年1月9日）

爆者・被爆体験者による講話や、ガイドによる平和公園や資料館の案内もある²⁹。

しかし、このような努力がなされているにもかかわらず、長崎市の観光においては、キリスト教の受容や江戸時代の出島の活動などの出来事が高い比重で取り上げられ、その結果、原爆や平和学習の比重が相対的に低くなってしまっているように感じられる³⁰。また、長崎原爆資料館も、広島平和記念資料館に比べてやや規模が小さい。

これは筆者の個人的経験としてのみでなく、インターゼミサービス・エンターテインメント班によって行われたアンケート調査からもわかる。長崎観光に行った人の印象は、広島のように戦争の悲惨さを感じられる観光地よりはハウステンボスやキリスト関連の歴史的建造物や中華街などの観光地の方がより強く印象に残っている。

なお交通の利便性を比較すると、そもそも広島市は長崎市よりも交通の便が良く、さらに被爆地域も都市中心部のため、市内での移動も簡便である。広島の方が旅行者の多いのは、このことも反映されていると考えられる。

このように長崎は、観光資源においては広島と異なるものを有しており、一般の観光としては広島と差異化を図ることが可能であろう。それは、広島は広島の、長崎は長崎の、それぞれの独自性を発揮することで観光客を呼び込むことにもつながりうる。

一方で、本論文第4章以降で示すように、現地の人とのつながりを重視し、事前の学習や事後の振り返り（例えば本論文執筆作業のような）を行うことで、より深い平和の学びを得ることは、広島観光に限定されるものではなく、長崎観光にも当てはめうるものと考えられる。

第4章 広島ツーリズムの事例 —広島現地調査の結果

第1節 広島調査のスケジュール

筆者たちは、令和5（2023）年9月10日から9月12日の2泊3日の日程で、広島を訪れ調査を行った。広島調査の日程と実施内容を表4「広島調査のスケジュール」に示す。

第1日目は、広島平和記念資料館を見学した後、平和博物館研究者・福島在行氏との意見交換を実施した。第2日目は、被爆者の伝承活動を行っている仁木美恵氏による講話の後に、被爆者・切明千恵子氏へのヒアリング調査を行った。第3日目は、広島平和記念資料館にある対話ノートの調査や来館者へのインタビュー、旧広島陸軍被服支廠と宮島へ行った。

また、現地では筆者たちの研究活動について、NHK広島、広島テレビ、中国新聞の3社から取材をうけ、ニュースにも取り上げられた。

²⁹ 長崎の原爆被害や長崎市の活動については、長崎市「平和・原爆」のページ <https://www.city.nagasaki.lg.jp/heiwa/index.html> や長崎原爆資料館のページ <https://nabmuseum.jp/genbaku/> を参照。

³⁰ 補論分担者は2018年に中学の修学旅行として長崎を訪れた。

表4 広島調査のスケジュール

日付	時間	実施内容
9月10日	14:00	広島平和記念資料館に集合
	14:00～	資料館見学 見学後、広島市在住の平和博物館研究者・福島在行氏との意見交換
9月11日	9:00～11:00	自由行動
	11:00～12:00	被爆伝承者・仁木美恵氏による講話 @平和記念資料館
	14:00～16:00	被爆者・切明千枝子氏に対するヒアリング
9月12日	午前	チームに分かれて、フィールドワーク ・平和記念資料館内の対話ノート調査 ・平和記念資料館来館者へのインタビュー ・旧広島陸軍被服支廠、宮島など
	17:00	現地解散

第2節 特徴的広島旅行 (1) 広島平和記念資料館の見学

第1項 広島平和記念資料館の説明

広島平和記念資料館は昭和 30 (1955) 年に開館した。設計を行ったのは広島で戦前を過ごし、戦後の広島の調査や復興都市計画の提案などを行った丹下健三である。

本館は、戦後建築物として初めて国の重要文化財に指定されている。平成 29 (2017) 年に東館を、平成 31 (2019) 年に本館をリニューアルオープンした。本館には「被爆の実相」を「8月6日の惨状」、「被爆者」の二つのゾーンに分けて展示されており、東館にはシュモークハウス「導入展示」、「核兵器の危険性」、「広島のみち」の三つのゾーンに分けて展示がされている。

第2項 実際に訪れての考察

今を生きる筆者にとって「歴史的に大きな瞬間に何が起こったのか」「核はどのように作られ、使われたのか」「第二次世界大戦、特に原爆投下で何が起こり、そしてそれが実際に街と住む人々にどんな影響を与えたのか」が疑問だった。そこで、事前学習として理解するため動画サイトの閲覧、各種論考調査を行うことで、当時のこと、広島のことの事前学習を行った。

しかし、実際に平和記念資料館訪問や講話を聞くことを通して、事前学習ではわからない重く暗い雰囲気を感じ、「自身はまだ、何も知らないこと」を痛感した。そしてそれは、想像をはるかに超える、悲惨な出来事であり悲しいものであり命の尊さが胸に刻まれた。特に印象的だったのは、笑顔の写真とともに置かれていた小さい子どもたちが身に着けていた、洋服やカバンの展示品、使っていた三輪車だ。こんな未来ある幼い多くの子どもたちも、年齢関係なく無差別に犠牲になってしまったということを説明の文字とともに実感し、本当に悲惨なものだと改めて考えた。また、実際に被爆当時に身につけていたものが自身の目の前にあるということから、今までで一番原爆を実際に身近に感じた。原爆によって笑顔を一

瞬で恐怖に変え、当たり前にあった日常を失ってしまうほど原爆は非常に多くの人を殺す破壊的な力を持っている。広島を訪れたことによりこのような実態を知ることができたことに伴い、広島に実際に行くことの必要性和重要性が考えられた。事実を受け止めたときに、「平和」を疎かに考えてしまっていたが、平和は生活そのものであるため、平和に向き合い守っていかななくてはならないと考えた。

一方で、今回のこのような研究に携わらなかったらこのような実態を知る機会がなく、意識が大きく変化することもなかった。これらの経験を通して、戦争を体験したことがない人が増えて行く中で、今回学んだ戦争の悲惨さというものをもっと発信して戦争を知らない世代に伝えていくべきだ。実際、学校で教えられる原爆投下についての出来事は、原爆が落とされて日本が降伏したという事実を教えることがほとんどで、そのほかの実際に被爆者がどのような悲惨な経験したのかということや生活はどのように変化してしまったのかを知る機会がない。

SNS とデジタル化が進む現在では、当時のことについて知識を得ることが容易になっているが、「人々の想い」については伝わらない。そのような実態こそ戦争は恐ろしい、悲惨だと感じる部分であるのにも関わらず、それを学び知る機会がないことが課題だと考えられる。平和伝承において最も重要なことは、当時の被害状況や復興について学習するのではなく、戦争体験者の想いを伝承していくことである。

中国人留学生の K 氏は、平和記念資料館を訪れ中国語ガイドの感情豊かな解説と感動的な演出を感じた。外国語としての日本語とは違って、中国人にしかわからないネイティブならではの震えが全身に届き、館内での中国語の説明が不十分な上に非常に大事な補足であった。もし機会があれば是非来館の中国人にすすめたい。外国の方にとって、翻訳ガイドは、戦争・原爆を深く知る上で非常に有意である。

人の命は永遠ではないが、「想い」は伝え方によっては形を変えながら永遠に語り続けることができると考えられる。非戦争体験者の危機感をこれ以上なくしてはいけない。事実を受け止めたときに、「平和」を疎かに考えてしまっていたが、平和は生活そのものであるため、平和に向き合い守っていかななくてはならない。そこで、世界で唯一の戦争被爆国にいる私たちがすべきことは、今回の研究を形にして、戦争の悲惨さを一人でも多くの人に発信することである。

その際に、平和博物館研究者である福島氏から学んだ次の三つのことが重要になる。「継承をしていく中で、そのままの事実を伝え自分の立場で物事を考え、今につなげて考えること」「自発性の点を踏まえて聞き手側にも十分な準備と関係性の構築すること」「見ている方は自分から近いと感じ取り吸収するから、どこの誰にどのように事実、実態を印象強く発信したいのかをしっかりと明確にすること」である。戦争・原爆・平和は自分ごとであり、現在に繋がっているということ、平和はすべての人が平等に持つべきものだという戦争に対しての意識をかえることを忘れてはいけない。

第3項 音声ガイドについての若干の提案

第2項で、中国人留学生が音声ガイドを有意義に感じたことを紹介した。関連して、音声ガイドについての若干の提案を行う。

広島平和記念資料館は、館内で11言語の音声ガイドが提供されている。見学中、筆者は中国語の音声ガイドを体験した。感情豊かな解説に深く感動し、外国人である筆者の展示内容に対する理解が一層深まった。より多くの資料館を訪れる外国人にこの音声ガイドを体験してもらいたいと考えている。しかし、館内では外国語音声ガイドに対する宣伝手段が不足しており、レンタル料金も使用のハードルを高めている。新型コロナウイルスの感染防止を考慮して、一時的に使用が停止されていた時期もあった³¹。

これについて、筆者は中国の南京大虐殺記念館（正式名称：「侵華日軍南京大屠殺遇難同胞記念館」）が提供しているガイドアプリ³²を参考にすることを提案する。このアプリの中では、デジタルマップにすべての音声解説がアップされており、観覧者のスマホで再生することができる。（次の画像を参照）



画像 南京大虐殺記念館ガイドアプリの音声再生画面

広島平和記念資料館が2022年3月に導入した「デジタルガイドマップ」³³の基盤を活用し、多言語の音声と説明を加えることで、現地で参観する外国人だけでなく、世界中の外国

³¹ 広島平和記念資料館「新しく6言語を追加し、音声ガイドの貸出しを再開します」
https://hpmuseum.jp/modules/news/index.php?action=PageView&page_id=231（閲覧日：2024年1月20日）

³² 南京大虐殺記念館「ガイドサービス」
<https://www.19371213.com.cn/guide/maps/>（閲覧日：2024年1月20日）

³³ 広島平和記念資料館「広島平和記念資料館のデジタルガイドマップの導入について」
https://hpmuseum.jp/modules/news/index.php?action=PageView&page_id=320
広島平和記念資料館デジタルガイドマップ「導入展示～被爆の実相（本館）」
<https://my.matterport.com/show/?m=Rk7f1xWNNg5&nozoom=1&help=1>
広島平和記念資料館デジタルガイドマップ「核兵器の危険性～広島のみ（東館）」
<https://my.matterport.com/show/?m=oEZOYpQnhAK&nozoom=1&help=1>（閲覧日：2024年1月20日）

人がオンラインで資料館を自由に訪れることが可能になる。これによって、この記憶はより広く世界に伝えられ、後世に継承されるだろう。

この提案は、資料館の多言語対応とデジタル化をさらに推進するものであり、多文化間の理解促進に貢献すると考えられる。また、デジタルガイドマップの導入により、資料館の展示内容をより広い観衆に届けることが可能となり、資料館の社会的役割を強化することが期待される。

第3節 特徴的広島旅行 (2) 被爆者の体験を聞く：切明千枝子氏の証言

第1項 切明千枝子氏の個人史概略

切明千枝子氏は、昭和4（1929）年、世界恐慌により不景気になり仕事もない時代に生まれた。2歳の時に満州事変が起こり、小学2年生の時に日中戦争、小学6年生の時に太平洋戦争、昭和20（1945）年8月に原爆が落とされた。原爆投下の時、彼女は広島県立第二高等女学校の生徒で、15歳だった。

切明氏は証言活動の中で、「広島は、8月6日原爆が落ちるまでは、加害の都市であり、戦争で大きくなったら街である」と語った。明治になって日清戦争が始まって一気に活気づいた、宇品港から兵隊を戦争に送り出され、広島城の周辺に巨大な陸軍工場ができ、軍都広島と呼ばれるようになった。戦争が始まると、若い人が兵隊になって戦争に送られる、現代の中学生や高校生と同じ年齢の生徒たちが動員され工場で働かせられる。切明氏も軍需工場に学徒動員させられた。

切明氏の記憶では、戦争が本格化していき、広島の宇品港から多くの兵隊が戦争に送られており、切明氏たち子どもは日本国旗を振りながら見送ったという。毎日、先生に連れられて、岸壁までいき日の丸の旗を持って「バンザーイバンザーイ」と見送った。人や馬が沢山運ばれ、馬は、ヒヒーンと悲しそうに鳴いて（泣いて）いたため、動物が大好きだった幼い切明氏は可哀想に思い涙を流した。

太平洋戦争に突入したあとも、切明氏は「神様の国だから、神風が吹いて、日本は勝つ！お国のために頑張る」と信じていた。学生・生徒たちは勉強をさせてもらえず、毎日毎日工場で働いたという。

以下は切明氏の原爆体験の証言である。

8月6日の朝は、タバコ工場で働いていた。毎日朝から晩まで立って働いていたから、足を痛めた。その工場の医務室の内科の先生に、関節炎だから外科に行けと言われた。京橋川の比治山橋を渡った先に病院があったため病院を目指し川沿いを歩いていた。暑くて汗びっしょりだったため、倉庫の軒下の影に入って休んだ。その瞬間、ピカって光った。ものすごい閃光で目が眩んだ。お日様が落ちたと思った。爆風で地面に叩きつけられて気を失った。しばらくたって気が戻って立ち上がった。倉庫の下敷きになっていた。建物のお陰で火傷をせずに済んだ。

学校の下級生は建物の疎開に行っていてほぼ全滅し、沢山の友達がなくなって、生き残っ

たのが嬉しくない。友達にケガしているって言われて背中にみっちりガラスの破片が刺さっていることに気が付いた。気が張っていたから痛いとも思わなかった。

タバコ工場には火が回ってくるため、ケガした友達を引きずりながらボロボロの県立第二高等女学校に戻った。校舎が壊れているから掃除をしていると、1人また1人と下級生が帰ってくる。帰ってきた下級生は全身火傷、ものすごい熱線も放射線を浴びて、全身水腫れ、着ているもの焼けて裸同然だった。顔は腫れ上がる、誰が誰だかわからない。髪の毛はチリチリでアフロみたいになっており、指先から真っ黒いワカメやコンブのようなものをぶらさげていた。帰ってきた下級生を、薬も無ければ、医者もないから手当できない。教員の指示で、理科室にあった天ぷら油の使い残しを塗って治療することにした。最初は廊下で寝ていたが、理科室の机のガラスとかをどかして、机に置いていく。ガラスが刺さってるのは、怪我にはならない。しかし、次々と下級生は息を引き取り亡くなっていった。切明氏たちは下級生を学校の校庭で焼いて茶毘にふした。

切明氏が高等女学校の1年生（15歳）の時に戦争は終わった。

戦後、切明氏は広島県教育委員会社会教育課に勤めた。同時期に切明悟氏と結婚。その後、出産と育児を機に退職した。その後は、夫の悟氏が立ち上げた教育関係の出版社「東方出版」で働いた。昭和50（1975）年に東京の中学校教員の江口保氏に頼まれて、修学旅行生に対してのみ証言活動を開始した。令和元（2019）年には広島市が委託する被爆体験講話の講師となり、広島市の被爆体験伝承者制度の教え手も引き受けている³⁴。

第2項 切明千枝子氏の被爆体験継承活動

今回、我々のヒアリング調査に応じてくれた切明千恵子氏（以下、切明氏）の継承活動をまとめる。切明氏が江口保と出会ったのは、被爆から30年たってから昭和50（1975）年ごろのことである。

「広島修学旅行」準備のために広島を訪れていた江口が、人づてにたどって切明氏の元までやってきたのが始まりであり、修学旅行生に自身の体験を語ることを江口からお願いされた。被爆体験を思い出すと恐ろしく、苦しい気持ちになってしまうことから何度も断り続けたが、恩師・有田智恵子の「お付き」として証言活動には関わっていた。最初は生徒に向かって話す恩師の証言を泣きながら聞くということが切明氏の参加の方法であった。

しかしながら、恩師・有田智恵子が高齢のため直接証言活動を行うことが難しくなり、修学旅行生に説明するためのカセットテープを受け取った。そのカセットテープには有田の肉声で証言が語られていた。修学旅行生に対してそのテープを聞かせても、賑わいのある道路では、音声十分に通らず、十分な証言活動の代わりにはならなかった。そのことから、江口が再度切明氏の元を訪ね、証言活動の依頼をした。何度も頭を下げて哀願する江口の姿を見た切明氏は、同窓生との相談を行うことにした。生き残りの同窓生と相談をしても押し

³⁴ 桐谷多恵子「切明千枝子さんの思想とその個人史的背景—講演をより深く読み込むために—」長崎総合科学大学『平和文化研究』第42集、2022年。

付け合いになってしまったので、3人でチームを作り、話す内容を分担することでリレー形式での証言活動を始めた。切明氏は被爆当時のことを話すことが多かった。下級生のひどいけがの姿や悲惨な最後の様子などを伝えるため、その活動自体が切明氏にとって相当につらい体験であったが、自身の被爆体験そのものよりも、無残な死に方をした後輩たちのために語ることが心身の原点にあった。

切明氏は江口の要請に応じ、被爆証言活動を始めたが、①家事と仕事の両立からなる時間の問題 ②病気による体調の問題、から回数をこなすことができず、一時は証言活動から身を引いていた。だが、江口の他界後、2010年代に入ってから再び証言活動を開始する。広島市が募集している「被爆体験証言者」に募集し、平成26(2014)年度から広島平和記念資料館から委託された「被爆体験証言者」として「被爆体験証言講話」を開始した。「広島修学旅行」の時とは異なり、一年間に複数の団体に対して活動をしている。その中で、「2度と誰にも同じ思いをさせてはいけない」という思いで証言を語る。実際、我々がヒアリング調査を行った際も、「戦争が他人事ではないこと、平和をつかみ取って逃がさないようにすることが重要である」と強く協調していた。

第3項 切明千枝子氏とのやり取りを通じて

「何があっても平和は自然と降ってくるものではない、自ら掴み取るものである」

令和5(2023)年9月、広島で、筆者たちが切明千枝子氏の被爆体験の証言を聞いたとき、淡々とした口調ではあるものの、最も心のこもった言葉と感じたものであり、示唆に富んだ証言であった。筆者がそう感じた理由は、戦争を知らない世代が増えており、思いを語り続けることにより、次世代を生きる日本人が主体的に動くことへの希望と、国際的な平和の実現と、世界の現状とのギャップを憂う思いを感じ取ったからである。

では、まずは、なぜ、どのように、広島の被爆が語られるようになったのかから考察してみたい。

切明氏が筆者たちに語り掛けてくださった内容で印象的であったのは、そうした被害の事実を語るのに加えて、加害の歴史を踏まえたうえで、日本が侵略的な行為をおこなったことをも含めた、悲惨な経験の再来を阻む点を示唆くださった点である。

被爆者・切明千枝子氏の証言を聞いて感じた事は旧広島陸軍被服支廠の赤レンガ倉庫に人が多く、においが充満し逃げ出したくなるような状況だった事や戦後の治安を守っていたのがヤクザであるという広島平和記念資料館では知る事が出来ない事を教えて頂きました。現在生活をしていく上で当たり前にいる・あると思える今の筆者達の生活は幸せであると同時にその幸せを壊される今の時代の危機的な状況に広島に落とされた原爆による心の傷や差別、後遺症、世界で起こった事を若者に伝える論文制作を行っていきたいと考えている。また、再度起きてはいけない過去を忘れずに待たず、自分の手で平和をつかみ、絶対に逃さないようにしなければならないと考えた。

現地調査を行う中で、非戦争体験者の危機感をこれ以上なくしてはならないと感じた。現

地調査を行うにあたり、動画サイトの閲覧、各種論考調査を行うことで、当時のこと、広島のことの事前学習を行っていた。実際に平和記念資料館を訪問、講話を聞くと、現地でしか味わうことのできない「重く暗い雰囲気」を感じ、広島のことを少しは理解していたつもりであった筆者は「自身はまだ、何も知らないこと」を痛感した。SNS 上で見ることのできるものと自身が現地で感じるものは異なり、1 人でも多くの非戦争体験者が広島を訪れ平和伝承を受けるために何ができるのか、1 人の非戦争体験者である筆者の意識が大きく変化した。

「戦争を知らない若者が戦争に巻き込まれてしまったら、どうになってしまうのだろう」

「伝えなければ忘れ去られ、なかったことになってしまう」

切明氏の言葉を受け、自身が平和ボケしていることに気が付いた。平和な時代に生まれ育った今を生きる非戦争体験者が当時の状況を「過去のもの」とせず、混沌の世界情勢の中で自分の立場において考え、自分の意見を持つことが重要であると感じた。平和伝承において最も重要なことは、当時の被害状況や復興について学習するのではなく、戦争体験者の想いを伝承していくことであると考えた。人の命は永遠ではないが、「想い」は伝え方によっては形を変えながら永遠に語り続けることができると思う。風化させないように奮闘する人々の存在、平和記念資料館での講話、ビデオやプロジェクションマッピングを見て推察した。SNS とデジタル化が進む中で、当時のことについて知識を得ることが容易になっているが、「人々の想い」については伝わらないと思う。一人でも多くの非戦争体験者に広島で「想い」感じてもらうために自分ができることは、今回の研究をまずは形にすることであると現地調査を行うことで新たに感じた。

第 4 節 特徴的広島旅行 (3) 被爆体験伝承者の講話を聞く：仁木美恵氏の講話

この節では切明千枝子氏の伝承者である仁木美恵氏の下に訪問し、講話・伝承の内容をまとめ分析を行う。

第 1 項 仁木氏はどういうふうにして伝承者になったのか

仁木美恵氏は広島出身者ではなく、岡山県の出身者である。広島には仕事で訪れ原爆についての見聞を深めた。仁木氏は最初、核についてのことを自分事として考えていなかったが、被爆者の話を聞き教えてもらう内に、今の問題であると感じた。また被爆体験について語るまで 30 年もかかり、85 歳から核の伝承を行っていた切明千枝子氏の気持ちに感動し、伝承者となった。仁木氏は切明氏が話した内容を基に地元の高校生達が一年間を掛けて書いた絵や平和記念資料館に展示されている被爆者が書き上げた絵を用いて伝承の話を行っている。

また伝承者になるためには専門知識を扱うため訓練を行う。その為、伝承者になる人の数

が限られることが課題である。

第2項 今回聞いた仁木氏の講話の概略

筆者たちが聴講した仁木氏の被爆体験伝承講話の内容は次のとおりである。これには切明氏の個人史概略と重なる内容もあるが、より詳しく伝えられている。筆者たちの学びの内容を読者に伝えるため、やや長文になるが、仁木氏の講話内容をなるべく詳細に収録する。

(1) 誕生から戦争の時代へ

切明千枝子氏は昭和4(1929)年、広島市皆実町で生まれた。世界大恐慌で世界中が不景気、日本でも会社が倒産したり、仕事をなくしたりして生活に苦しむ人たちが増えている時代だった。この時の日本は中国に勢力を伸ばし、景気を回復しなければならぬと躍起になって資源を手に入れる事ばかりを考えていた。昭和6(1931)年、満州事変が起き、その後、中国との全面的な戦争に突入していった。この時、切明氏は小学校2年生。広島は今では平和都市と言われているが、当時は軍隊で栄えた町、軍都と呼ばれている事に誇りを持っていた。日本軍が中国の町を占領したら、「バンザーイ、バンザーイ」と言ったり、旗を振って、軍服を着て短剣を腰に下げて鉄砲を担いで宇品の港まで市内を通って行進していく兵隊達の見送りをするなど、純粋に日本の勝利を喜んでいた。多くの日本人達は、アジアの人々と栄えるための正しい戦争だと信じていたため、中国の兵隊が何人殺されたか、日本兵がどれだけ命を落としたかは、いっさい話題に挙げなかった。

先生に連れられて宇品の港に兵隊を送りに行った時、切明氏は、兵隊だけでなく馬も運ばれていった事にも目を向けていた。当時は、車ではなく馬が物を運ぶ重要な役割をしていた。馬は、小さな舟に乗せられ、大きな船まで運ばれて行き、大きな船からクレーンを下ろして背中バンドに引っかけて馬を釣り上げ、乗せられた。馬が危険な場所に連れて行かれるのを知っているかのように「ヒヒーン、ヒヒーン」と哀れで悲しい声で鳴き叫んでいるのを、動物好きの切明氏は可哀想であると感じ、動物の中で特に好きな馬のために涙を流した。また馬だけでなく犬や伝書鳩もたくさん戦場に運ばれて行き、戦争が終わった後、あれだけたくさん戦場に送られた馬も犬も伝書鳩も1匹も帰ってこなかったそうである。

当時の日本は戦争に送られる兵隊が足りなくなると、その度に町の役場は召集令状＝赤紙を持ってやってきて、命令に従わなければ逮捕されてしまうため、たくさんの若い男の人たちが兵隊になっていった。あまりに命が軽く扱われるので、召集令状は一銭一厘のハガキと喩えられ、一銭一厘が人の命の価値と言われた。人の命も生き物の命も、本当に軽く消耗品として扱われ、お国のため、天皇陛下のためであれば命を差し出すことをためらってはいけないとの教えをたたき込まれたため、多くの日本人達は、それが当たり前だと思っていた。

やがて日本は、石油などの資源をめぐる外国と激しく対立するようになり、昭和16(1941)年にマレー半島のイギリス軍、ハワイのアメリカ軍を攻撃した。そして多くの国々と東南アジアや太平洋を戦場にして戦う太平洋戦争に突入した。切明氏が国民学校(今の小

学校) 6年生の時だった(小学校は、以前の尋常小学校という名前から国民学校という名前にかえさせられた)。幼くても子供ではない、一人の国民なのだから、お国のために命を捧げなさいと教え込まれたため、当時の切明氏は、それを「お国のために死ぬ」と理解し、当然のことだと受け止めたそうである。

アメリカの軍事力は、日本とは比べ物にならないほど大きく、勝てるはずのない戦争だった。日本が海外で負け続けるようになって、新聞もラジオも真実を伝えなかった。だんだん食べ物も足らなくなり、人々は十分な食事をすることもできなくなった。日本の上空にアメリカの飛行機が来て町を焼き尽くす焼夷弾という爆弾を落とすようになって、たくさんの町が焼かれ、人々が死んで行った。だが、日本の政府は戦争をやめようとはしなかった。

(2) 原爆投下と被爆

その頃、アメリカでは世界で初の原子爆弾が完成しようとしていた。広島は、都市の大きさ、地形の条件等で原爆の第一投下目標になった。昭和20(1945)年8月6日午前8時15分、アメリカのB29爆撃機は、広島市の中心にあるTの形をした相生橋を目標に原爆を投下した。相生橋から南東に300m離れた島病院の上空600mの高さで炸裂した。地上から600mというのはスカイツリーに近い高さで、広島市を最も効果的に破壊するのに申し分なかった。

原爆は、これまでの爆弾とは比べ物にならない桁外れの破壊力を持つ。原爆は空中で爆発した瞬間、小さな太陽を思わせる直径400mの火の玉が現れ、強烈な熱線と放射線と爆風が共に広島市を襲いました。鉄が溶ける温度は1,000度に対し、爆心地近くの地表面では温度が3,000~4,000度になったと言われている。この熱線で人の皮膚は焼けただれ、剥がれ落ちた。爆心地から半径1.2km以内の屋外で熱線を浴びた人は、体の内部まで焼けただれ、即死か数日のうちに亡くなった。また、爆発の瞬間、すごい圧力の爆風で人は吹き飛ばされ地面に叩きつけられ、建物は押しつぶされ、粉々になったガラスが人々を襲い体中に突き刺さり、人々が倒れた建物の下敷きになり、助けを求め、市内のいろいろな場所から同時起こった火事が大火災になって町を覆った。半径2kmは燃えるものは全て焼き尽くされた。倒れた建物の下敷きになって生きながら焼かれた人が多くいる地獄のような状況と化した。

原爆が落とされた時、切明氏は高等女学校4年生の15歳で、両親と2歳下の妹、8歳年下の双子の妹、おばあさんと皆実町に住んでいた。8月6日、妹は広島駅北の東練兵場へ、母は被服支廠へ、父は宇品の造船所へ働きに行っていた。双子の妹2人は学童集団疎開をして広島から10km離れた沼田の寺にいて、祖母は実家にいた。学徒動員は労働力不足を補うために学生が大人の代わりに働かせられる事。国民学校(小学校)3~6年までの子供は、空襲を避けるためと火を消す際の足手まといにならないように、田舎の寺に先生と一緒に預けられた。

その日、切明氏は学徒動員で働いていたタバコ工場を休んで、痛めた足の治療のため外科の病院に行くことになっていた。8時過ぎに工場に行き、許可をもらい、比治山橋に向かっ

て歩いていた。よく晴れた夏の日だった。汗びっしょりで、日陰で汗を拭おうと比治山橋の袂の小さな木造の小屋の軒下に入った。その時アメリカの爆撃機が原爆を乗せて広島の上空にさしかかっていたが、空襲警報のサイレンが鳴らされる事がなかったため、切明氏は気づかなかった。

被爆の瞬間、切明氏は、太陽が落ちてきたかと思うほどの光を浴び、気を失った。気がついたら体の上に何か重いものがのしかかって起き上がれず、自分のすぐ横に爆弾が落ちたと思った。「誰か助けてください」と叫んでも辺りは嫌な程静かだった。必死で木材を押し上げ、はって進んだ。さっきまでのカンカン照りから、真っ暗になっていて何も見えなかった。しばらく立ちすくんでいると明るくなり、来た道を振り返ると家は全て地震があったように跡形もなく潰れていた。今渡ろうとした比治山橋の先には真っ赤な炎が上がり、真っ黒な煙が上がっており、切明氏は自分のそばに爆弾が落ちただけではないと気づいた。橋の向こう側から多くの人たちが、断末魔を上げながら着ている服が燃えているのに消そうとしないで逃げてくるが見えた。熱さに耐えかねて、橋の欄干から川へ飛び込む人もいた。

(3) 避難、救護、火葬

人々は泣きながら、燃えながらまだ火事になっていない南の方に逃げていった。たくさんの中学生の男の子も燃える制服を着ながら逃げ去って行った。切明氏は「どうしよう、どうしよう」と戸惑ったが、先生やクラスメイトのいるタバコ工場に帰ろうと考えついた。潰れた家の屋根を乗り越え、乗り越え、やっとたどり着いたタバコ工場には、額から血を吹き出している友人が一人取り残されているだけだった。肩にかけている救急鞆から三角巾を取り出して友人の頭を縛った。そしたら友人に「あんたも怪我してる」と言われて、初めて自分の頭にガラスの破片がいっぱい刺さっていることに気がついた。友人の那須氏がガラスの破片を抜くと血が出たため、残ったガラスはそのままにしておいた。切明氏と那須氏は助け合いながら、爆撃された時にそれぞれの学校は場所が決めていたため避難場所に決められた黄金山に向かった。黄金山からは広島の町が燃え上がっているのが見えた。その光景を「どうして、どうして」と言いながら眺め続けた。この黄金山の光景の記憶が、ごく最近(去年)まで記憶から完全に消え落ちていた。77年経ってはっと思い出したのだという。あまりにつらく恐ろしい経験だったので、頭の中から消してしまったのかもしれない。切明氏は、その後、那須氏と黄金山で出会った大西氏と一緒に、切明氏の自宅に向かった。家は壊れていたけどなくなっていなかった。怪我をしたおばあさんは被服支廠で治療を受けていて、母も無事だった。

自宅に帰るという友人達を見送った後、切明氏は消息がわからない妹のことを母に頼まれて学校まで行った。学校に着くと先生が「あ、無事だった。よかったね」と喜んでくれたが、下級生と連絡がつかないと心配していた。3年生とは連絡が取れたが1年生と2年生はどうなったかわからなかったからである。妹は同じ学校の2年東組だった。しばらくすると爆心地から1kmの雑魚場町で作業をしていた2年西組の下級生たちが帰ってき始めた。小

さな学校であるため下級生の顔はみんな知っていたが、帰ってくる下級生は誰が誰だかわからない程みんな顔は腫れ上がり、髪はチリチリに焼けて逆立っていた。服は焼けてほとんど裸で、みんな幽霊のように手を前にやって、手の先にも足にも真っ黒な昆布のようなものをずるずる引き摺っていた。よく見るとそれは焼けただけの皮膚だった。それを先生が手でちぎって捨て、みんなは「先生ありがとう、これでちゃんと歩けるようになりました」と腫れ上がってうまく話せない口で言った。自分で自分の皮膚を引き摺りながら、自分の皮膚を踏んで滑って転びそうになりながら学校まで帰ってきた。先生が、理科室の机がちょうどいい大きさだから片付けてこいと言い、切明氏は慌てて理科室に行き、散らかったビーカーや試験管を掃き出し、机をベッドがわりにして下級生を一人一人寝かせていき、古い食用油を家庭科室から持ってきて火傷に塗っていった。部屋がいっぱいになると廊下にゴザを敷いて寝かせた。下級生達は「水をちょうだい、水をちょうだい」と言った。水をあげたかったが、大火傷を負った人に水を飲ませると死んでしまうと言われていたので、「飲んだら死ぬんだって、我慢して、死んじゃだめよ」と言うと、「死んでもいいから水をちょうだい」と言った。この時、切明氏は「どんなに水を飲みたかったのだろうか。一口でも水を飲ませてあげればよかった。今でも思った」と発言していた。とうとう一滴の水を飲ませてあげないまま、1人、また1人と下級生たちは死んでいき「お母ちゃん、痛いよ、熱いよ」とうめきながら、泣きながら、死んでいった。息を引き取る前でさえ「私も立派な兵士だよ、お国のために死ぬんだよ」、この話をする時、切明さんはいつも「もう地獄でございました」というふうに発言していた。この夏の暑い時期で、(死体が)腐蝕していくため、先生の指導で校庭に浅い穴を掘り、壊れた校舎の破片をしき下級生の遺体を上にのせ、その上に薪がわりの板などを乗せて、その上に軍隊からもらった油をかけて火をつけて遺体を焼いた。皆その時は、食べるものがなかったので痩せ細った小さな小さな体であり、火が回るとまるで生きているかのように遺体は手が上がったり、足がぎゅっと上がったりした。切明氏は「先生まだ生きているじゃありませんか」と言うと、先生は「生きているんじゃない。見るな」と言った。見ないようにしたくても金縛りにあったように体が動かず、ガタガタ震えながら、最後まで見てしまった。焼け落ちてしまっただけで現れた白骨は、綺麗な小さな骨格の標本のようで、桜の花びらのように淡いピンク色をしていた。この時になって初めて金縛りが解けて、涙がボロボロ出てきた。それまでは涙も出なかったからである。泣きながら遺骨を拾い、「私は、この手で下級生の遺体を焼いたのです」という被爆証言をする切明氏の声は、いつも今にも泣きそうな声であった。広島市全体で約7万柱といわれる誰の引き取り手もない遺骨は、平和記念公園にある原爆供養塔の中に納められており、(切明氏らが焼いた)その時の遺骨もそこに納められている。広島で亡くなった人は、昭和20(1945)年末までで約14万人と言われているが、正確な人数は今でも分かっていない。個人の尊厳もなければ、命の尊厳もない、どこの誰ともわからないまま火葬されたのが広島での原爆だった。

切明氏の学校では、2年西組39名のうち38名が亡くなった。みんな13歳か14歳の少女で、学校まで辿り着けず亡くなった生徒や、中には遺体も見つからなかった生徒もいる。1

年生と2年東組は爆心地から2.5kmの広島駅の北の東練兵場にいたので、爆心地から少し離れていた。大火傷した生徒はいたが、亡くなった人はいなかった。東組だった切明氏の妹も無事だった。一方、ほとんど全滅だった2年西組の少女たちは、8月6日に市内の中心部に空襲による火災が広がるのを防ぐために、強制的に建物を移動して空き地を作る建物疎開作業に出ている。

日本は戦争に負け続け、多くの大人の男の人や大学生は戦場に送られた。女学校や中学校の3年生、4年生は勉強を辞めて工場などに働きに行かされていた。1、2年生も勉強をしないで戦争のために働かされるように規則を変えられていった。そして大規模な建物疎開作業が8月の初めに行われることになった時、広島市内のほとんどの女学校、中学校の1、2年生が軍隊の強い要請でかりだされることになり、8月6日に建物疎開作業に出ている広島市内の各学生は8,200人以上と言われその内、およそ6,300人が原爆で亡くなった。1人1人に名前があり、大切に思う家族がいて、これからの人生があったはずの、今なら義務教育を受けている年頃の少年少女たちだった。広島平和記念資料館には、建物疎開で亡くなった生徒の遺品がたくさん展示されている。建物疎開で亡くなった生徒の倒れた様子を表している展示もある。焼けこげた制服は、その時の幼い生徒たちが身につけていたもので制服がボロボロに焼けこげた、その中の生徒たちの体はどうなっていったか。想像すると切明氏はいつも胸が苦しくなった。しかし、制服が残されている生徒は家族に何かしら見つけてもらえたという事に少し嬉しかった。それは遺体も遺品も情報も何もないまま、どこで、どのように亡くなったかわからない生徒の方が多かったためである。

(4) 放射線被爆について

昭和20(1945)年9月初めから切明氏の体に異変が起きていた。高熱が出て、髪の毛が突然抜け始め、歯茎から出血し、血便が出て体に紫色の斑点が出るという放射線の症状が出てきたためである。当時はまだ、これが放射線のせいだとは分からなかった。しかし、このような症状が出た後、亡くなる方がたくさんいたのでこうなると助からないと言われていた。切明氏は、引っ張った髪の毛が抜けたとき、ほっとした、「あーこれでみんなと同じように死ぬことができる」と思った。切明氏のように原爆で生き残った人の多くは、生き残ってしまった苦しみを抱えている。生きていて良かったとはとても思えず、たくさんの方が亡くなったのに、自分だけがすまないと思っていた。そのため、下級生の父親や母親の目が、「うちの子は死んだのに、なんであなたは生きているの」と言っているように思い、生きることがつらく、生きていく気力を失った。でも母が、「あんたは死んではいかん」と言って、必死に看病してくれ、自分の着物を売って妻を買いに行き粥を作ってくれた。ドクダミがいいと聞けば、郊外まで行って煎じて飲ませてくれ、「生きよ、生きよ」と必死に看病してくれた。看病や他の条件で、切明氏の容態はだんだん良くなり母が何かと持ってきてくれて飲ませてくれた薬はドクター・ジュノーが薬のない広島に15t、たくさん薬を運んで市民を助けてくれた。その時の薬がこれではないかと最近の切明氏は言っている。

切明氏は次の年の春までは寝たり起きたりしていたが、回復していった。しかし、生き残ってしまったとの気持ちは消えることはなかった。

切明さんは50歳前に子宮がんになり、子宮の手術を受けた。60歳になって甲状腺異常が発見され、がんにならないようにホルモンの治療を今でも続けており、子供への放射線の影響を心配して悩み、子供を産まないと考えたこともあったそうである。今、切明氏は2人の子供がいるが、かつて近所の内科の先生に「お前たちはなぜ子供を産まないのか」と質問された。「障がい者が生まれるのが怖くて産まないのなら、お前たちは障がい者差別をしているのではないか」と言われた時、切明氏は自分と夫の差別性に気づき、「どんな子供が生まれても受け止める」との気持ちで出産した。現在は放射線の影響について研究は進んでいるが、まだわからないことが多く、被爆者の抱える苦しみは生涯、原爆から虐待を受けているようなものだとされている。これが、核兵器が被人道的兵器だと言われる理由の一つでもある。

(5) 現在の戦争と平和

今の世界には1万2,500発の核弾頭があり、広島で使われたものよりはるかに威力を増している。核兵器は、ひとたび使われたら人類の生存さえ危なくなる。切明氏は、「核兵器を持っている限り、使いたくなるのが人間だ。核兵器の存在こそが人類の脅威だ」と考えている。そのため、切明氏は、核兵器禁止条約の成立を喜んでいる。核兵器禁止条約は、核兵器を開発すること、核実験をすること、作ること、持ち続けること、核兵器を使って脅すことなどを禁じるなどして、核兵器を完全に無くすことを目的にしており被爆者や平和を守ろうとしようとする世界中の人たち、特に若者の努力でこの条約ができた。令和4(2022)年6月にこの条約に参加した国が集まる初めての会議がウィーンで開催された。日本が国として参加していないことは残念なことであるが、この条約が本当に力を発揮して、核兵器がなくなるよう注目していかなければならないと考えていると発言した。

また切明氏は、広島最大級の被爆建物・旧陸軍被服支廠が取り壊されるかもしれないと知った時、建物を取り壊して無くしてしまうと過去の出来事が忘れ去られ、無かったことになってしまうと保存を訴える声を上げた。陸軍被服支廠は、赤いレンガづくりの壮大な建物で軍隊の衣服を作ったり、修理したり、納めたりする軍隊と戦争を支える建物の一つだ。頑丈に作られ、被爆したときにも倒れずに立っていた。原爆の時、切明氏のおばあさんが一番に運び込まれたが、その後大火傷した被爆者が逃げてきたり、運ばれてきたりした。レンガの倉庫は被爆者でいっぱいだった。毎日たくさんの方が亡くなり、近くで火葬された。切明氏は新聞やテレビの取材にも応じ、何度も被服支廠の前で話をした。「被服支廠は、戦争や核兵器の愚かさ、悲惨さを語り、被爆者をいっぱい収容し、戦後の広島を見届けた、広島の歴史そのものです。「戦争はいけん」と訴える、物言わぬ証人としてこれからも生き続けます。だからなんとしても残して欲しい」と訴える切明氏の言葉は人の心に届いた。切明氏や大勢の人々の活動のおかげで、2022年に被服支廠が保存されることに決まった。これからは、

この建物が語るメッセージをどのように伝えていくのかを私たちがしっかり考えていかなければならないと発言していた。

切明氏は、渡辺白泉という人の「戦争が廊下の奥に立っていた」という俳句のことをよく話していると仁木氏は発言した。ハッと気がつくと戦争が廊下の暗がり立っていた。今まで気が付かなかった。いつの間にかこんな近くにきたのだろう。これは太平洋戦争に近づいていく時代のことを敏感に感じて詠んだものであるが、白泉は戦争に反対したとして逮捕されてしまった。切明氏は、白泉の頃のように、今戦争が近づいてきてはいないかと心配している。そして「若い人たちが戦争なんかで死なせてなるものか。せつかくこの世に生まれてきた命なのだから」と語る。「平和とは、戦争がないことだけを言うのではない、いじめや無視、差別が身の回りにある限り平和とは言えない。戦争は人の心の中で行われるのです」とも話している。

切明氏がお話の最後に必ず呼びかける言葉がある、と仁木氏は言う。「平和というのは、座っていればやってくるものではありません。手練り寄せて、掴み取り、しっかりと力を合わせて守らないと、どこかに逃げてしまいます。今、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻により、世界に核戦争の不安が立ち込めています。戦争が始まれば、安心して生きることも、人の権利を守ることも、家族や友人との優しい語らいも奪われてしまうのだと毎日のニュースが届けています。もし、ウクライナで核兵器が使われたらどうなるのか。決して使われてはならない」と切明さんが全力で伝えようとしてくださっていると感じていると仁木氏は発言した。「この講話が戦争や核兵器についてみなさんが考えるきっかけになったり、切明さんが言うように平和を手練り掴み取り、守るために自分にできることを考えるきっかけになったとしたらとても嬉しいです。私は自分にできることとして、切明さんの思いをたくさんの人に伝えることを続け、被爆者の話が記憶され、そのメッセージがこれからも受け継がれていくよう努力したいと思います。それは誰かが語り続ける限り、被爆者の話が歴史から消されることはないと思うからです。そして戦争や核兵器のない平和な未来のために、まだまだこれからできることを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています」と仁木氏の講話が終わった。

第3項 仁木氏の講話を聴いて：伝承の意義

切明氏の経験談を聞いていて印象に残ったのが被爆後に避難した旧広島陸軍被服支廠の赤レンガ倉庫には被爆者が多く、においが充満し逃げ出したくなるような状況だったことや戦後の治安を守っていたのが裏社会の人達であったという事が印象に残った。また切明氏、亡くなった被爆者の言霊のように感じられたのが、「戦争の恐ろしさがわからなかったら、その防ぎ方もわからない」という発言。「平和な暮らしをしていることは幸せなことだが、本当の戦争を知らないことは危ういことだと思う。平和というのは、掴み取って逃がさないようにしなくてははいけない。」という言葉は実体験をしなければ思いつかないような宣誓を掲げている事に尊敬の意を感じるようになった。また被爆者から直接話を聞いた伝承者も

高齢となったため風化させる事はなく、伝承を行っていく難しさがあるという事、切明氏が話す内容を如何に多くの訪れた人に理解してもらうかの工夫などをこの講話を聞き感じる事ができたと考えている。

質疑応答の時間では切明氏と初めてお会いした際の印象、何をお話されたかについてお聞きしたところ、切明氏の証言の仕方が最初に加害側の視点から見た内容をお話されていること、その内容を伝えている時にはまだ伝承者ではなかったことに対して、仁木氏は良かったら私に伝承者の役割をさせて欲しいと頼み込んだということが分かった。

切明氏から聞いた日本に原爆を落としたアメリカに当時の人達はどんな印象を持っていたのかという質問を行った。その質問に対して仁木氏は、戦後アメリカに憎しみを持っている日本人達は多くいたが、アメリカ人は紳士的で丁寧に接してってくれたことやアメリカが介入したことで女性に投票権が与えられたりなど、当時の日本の悪かったところを改善していったりなどをしたため、徐々に憎しみを持っている日本人達は減っていった。だが、それでもアメリカの事を憎んでいる人達はいるということが分かった。

また、仁木氏は人間とは同じ過ちを繰り返し、そして時間が経つとその過ちが起きた事を知らないという領域まで行きついてしまうという恐ろしさを持ち合わせているためそれを防ぎたいという熱意を持ち合わせていた。そして仁木氏は、行く機会があれば爆心地に訪れる事、広島市南区にある陸軍兵士の軍服・軍靴等の製造・貯蔵を担う施設であった旧広島陸軍被服支廠は切明氏と深い関わりがあるため行ってみたいと発言をしていた。旧広島陸軍被服支廠は被爆直後に被爆者の臨時救護所として使用され、多くの方が亡くなり、戦後には学校の教室や運送会社の倉庫として活用された。平成6(1994)年には広島市が被爆建物として登録して、現在は活用されないままとなっている。そのため県では、利活用の検討や安全対策の実施設設計などを行っており。現存する4棟のうち1棟を国、3棟を県が所有しているという事。切明千枝子氏は母と共に学徒動員していた旧広島陸軍被服支廠に対して「広島の「負の遺産」でもある被服支廠を消し去ってはいけない」と話した理由が現場を訪れると当時の状況が深く読み取れるものだと感じ取れ、どんなネガティブで悲慘的なモノでも完全に消し去ってはいけないと仁木氏の講話を聞き深く考えさせられた。

第5節 その他の観光名所

本節では、現地調査にて訪れたその他の観光名所について記載する。

(1) 旧広島陸軍被服支廠

大正3(1914)年に竣工し、陸軍兵士の軍服・軍靴等の製造・貯蔵を担う施設であった。取り扱っていた品目には、水筒、小刀、石鹼等の日用品も含まれており、戦線が拡大すると、武器や戦備の多様化に対応して防寒服・防暑服、航空隊用、落下傘部隊用・挺身隊用被服あるいは防毒用被服なども取り扱うようになり、受発注、品質管理、貯蔵、配給の業務を主として行っていた。被爆直後は、被爆者の臨時救護所として使用され、多くの方が亡くなった。戦後は学校の教室や運送会社の倉庫として活用され、平成6(1994)年に広島市が被爆建物

として登録している。現在は、活用されないままとなっており、利活用の検討や安全対策の実施設計などを行っている。鉄筋コンクリート造とレンガ造を複合する国内でも希少な建造物となっており、爆風の痕跡が残っている。

現在は、全4棟の内うち3棟を広島県が、1棟を国が管理している。建物の老朽化が進む中で、広島県が保有している3棟のうち、1棟を改修。他の2棟については取り壊しが検討されている。それに対して、被爆者団体等が「全棟保存」を望み、オンライン署名を始めとした各種 SNS で声をあげている。「旧広島陸軍被服支廠の活用について、多様な活用方法を検討するため、県民の方々や有識者の方々と意見交換等を行い、令和4（2022）年度末までに、実現可能性のあるアイデアを「活用の方向性」として、複数案取りまとめることを目的として設置されています。」と県のホームページに懇親会の結果が公開されている。



写真1 旧広島陸軍被服支廠（筆者撮影）



写真2 同所の爆風の痕跡（筆者撮影）

(2) 宮島

瀬戸内海に浮かぶ小島である宮島には、国内外問わず多くの観光客が訪れている。

島内へのアクセスはフェリーのみとなるが運行ルートに違いが存在する。世界遺産の厳島神社（平成8（1996）年に世界遺産に登録されており、25年以上が経過している）は筆者が訪れた際には潮が引いており、高さ16mを超える大鳥居の元まで歩くことができた。多くのパワースポットが存在しており、景観だけでなく、水族館や島内グルメ（牡蠣、あなごめし、ビール、もみじ饅頭）も人気を集めている大きな理由になっているだろう。



写真3 宮島 厳島神社 (筆者撮影)



写真4 宮島大鳥居 (筆者撮影)

(3) 広島護國神社

広島護国神社は、「大東亜戦争」に至るまでの幾多の「事変」・戦争において戦没した「英霊」およそ9万2千余柱（勤労奉仕中に原爆の犠牲となった動員学徒、女子挺身隊等約1万柱を含む）の霊を祀っている。



写真5 広島護國神社(筆者撮影)

(4) 平和記念公園

原爆死没者の慰霊と世界恒久平和を祈念して開設された都市公園である。

この場所は、江戸時代から昭和初期に至るまで広島市の中心的な繁華街だが、昭和20(1945)年8月6日に人類史上初めて落とされた一発の原子爆弾により、一瞬のうちに破壊された。被爆後、昭和24(1949)年8月6日に公布された「広島平和記念都市建設法」に基づき、爆心地周辺を恒久平和の象徴の地として整備するため、昭和25(1950)年から

平和記念公園及び施設の建設が進められ、昭和 30（1955）年に完成した。



写真 6 平和記念公園（筆者撮影）

(5) 広島城

明治 4（1871）年 7 月 14 日、廃藩置県により、広島県が成立すると県庁が広島城本丸に設置された。12 月には、軍隊の施設（鎮西台第一分営）が本丸に設置されたため、県庁は三の丸へ移転した。その後、師団司令部が置かれるといったことや明治天皇と共に大本営がおかれ臨時帝国議会が召集される等、軍事施設の増設が進んだ。

大正 15（1926）年 10 月に大本営跡が史跡定され、昭和 6（1931）年 11 月には、美簡が国宝に指定された。しかし、昭和 20（1945）年 8 月 6 日の原子爆弾の投下で、広島城の天守閣は倒壊し、門や櫓は焼失した。戦後、石垣や堀を残すのみだった広島城だが、昭和 26（1951）年に開かれた広島県での第 6 回国民体育大会に先立って開催された体育文化博覧会の一環で、模擬天守が建てられた。模擬天守は木造の簡易な建物で、国体終了後に解体されたが、天守閣再建を求める市民の声を高める契機となった。

昭和 28（1953）年には、城跡が国の史跡指定を受けるなど、天守閣再建の機運は高まり、広島復興を内外に伝えるために開催される広島復興大博覧会の一環として鉄筋コンクリート製の天守閣を外観復元することが決まった。

なお敷地内には、爆心地から 740m で被爆し、生き残ったユーカリがある。



写真7 広島城 (筆者撮影)



写真8 被爆樹木ユーカリ (筆者撮影)

(6) 縮景園

この庭園は、元和6(1620)年、広島藩主浅野家の家老上田宗箇により藩主の別邸として設けられた。戦前は市民に「泉邸」の名称で親しまれていたが、人類史上最初の原爆投下により、無残な姿となった。被爆直後、数多くの被災者がここに避難してきたが、治療もほとんど受けることができないまま息絶え、その遺体は園内に埋葬された。



写真9 縮景園 (筆者撮影)

第5章 広島ツーリズム体験の分析とZ世代ツーリストへの提言

第1節 被爆体験を継承するとはどういうことかー広島調査をふまえて

藤原帰一氏は、広島がいつ、どのように、日本人として語り伝えなければならない悲惨な経験になったかに関して、以下のように述べている。

広島は、日本の戦争経験のなかでも、国民的経験として広く語られる数少ない事例である。それは次の三つの要素に支えられていた。

第1には、被害者意識である。先にも述べたように、日本の戦争経験の中核として認識されたのは、何よりも非戦闘員の大量の死であり、原爆投下はその極北にあった。無辜の民が被害者となるという経験が、国民を横に結びつけ、国民経験として戦争を語ることを可能にしたのである。

第2に、この経験は将来の戦争と直接に結びつけて考えられていた。広島をシンボルとした平和運動は、日本ばかりでなく海外でも、アメリカの核実験や核軍拡競争など、米ソ核戦争の懸念が高まるたびに高揚するという特徴を持っている。そこでは広島を悼むことと並び、あるいはそれ以上に、広島・長崎の再来を防ぐことが大きな目標として掲げられていた。広島・長崎は将来の戦争の原型になる可能性があるからこそ、カッサンドラのような、不吉な未来を告げる声として過去の回想が受け入れられたのである。

第3に、対米経験がある。アメリカとどのような関係を結ぶのかは、平和論において常に微妙な問題であった。戦争はもうたくさんだという観念が強い限り、憲法第九条には国民の支持が期待できる。しかし、アメリカとおかしくなったら商売に差し支えると考えるのも、日本に暮らす人間の当たり前の生活感覚だった。日米安保に逆らったり、アメリカの政策に反発したりすることは、リスクの大きな選択と考えられていた³⁵。

つまり、藤原氏は、かつては、戦争の被害の歴史として、二度と同様な悲惨な経験を繰り返してはならないという思いと同時に、アメリカの戦略への批判を含むことから、その後の市民運動となるに至る以前の歴史的な背景を指摘している。

第2節 広島ツーリズムを計画するにあたって

ここでは、これまで述べてきた広島調査を踏まえて、今後の広島ツーリズムを計画するにあたっての提言を述べたい。

第1項 〈現代と過去をつなげて未来を創造する〉ことを念頭に置いて

まず、筆者たち、サービス・エンターテインメント班を構成するメンバーは、8人のうち7人が大学生であり、1人が大学院生となっている。つまり、半数以上が、現時点での現役の大学生世代であり、その世代の考える、次世代に向けての広島ツーリズムの可能性の提言

³⁵ 藤原帰一『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』、講談社現代新書、2001年

であることを念頭に置いていただきたい。

そうした時に、筆者たちの共通の見解となるのは、生まれたときから平和が当たり前の時代に生まれた世代が、現地に行って、被爆者の声を聴き、今、この時点で、平和な世界を生きているという実感を、自分の肌で感じ取ること、広島を旅する前と後で、筆者たちの身に実際に起こった「態度変容」がもたらされた点が最も大きい。具体的には、今、まさに、世界各国で起こっている戦争や、紛争、広島市が過去に経験した、原子爆弾による被爆被害の実相など、平和の時代を過ごす毎日が当たり前な現代を生きる若者からは想像のつかない歴史認識、テレビやYouTubeなどのメディアを通じて知る戦争の形相と、戦争経験者から直接、話を聞くこととの事実を認識する受け入れ方の違い、事実を認識することで、自分たちが将来に向けて何ができるのかを、自分事として捉え、考え、次の行動に生かすきっかけとしての可能性である。

また、7人の大学生のうちの1人が、中国からの留学生という点で、母国で受けた歴史教育と比較した広島からの情報発信の情報の質の違いなどが克明となり、筆者たちならではの独自の発想が班の構成員全員に芽生えた点が大きい。以下に、特徴的な意見を抜粋する。

「自分たちは、広島で、昭和 20 (1945) 年に起こった事実と実際に向き合わないといけないということを実感した。過去の事実を知るには、ニュースではわからない。中学生・高校生の時には関心がなかったが、実際に行ってみて、戦争を経験している人の話を聞くことで、考え方が変わった」

「目の前に与えられている時間を大切にするようになった。切明氏の話を知ると、女性と子供が被爆された人が多かったという。つまり、その方々が、軍の手伝いのために、強制的に戦争に関与させられたことを想像すると、その人たちに与えられた当たり前の生活が奪われたということであり、自分たちは当たり前の生活を送れているのありがたいとわかった」

「軍用地として使われていた広島城が、今、実際にどのような形で残っているのかを自分の目で確かめたかった。そこには、原爆が落ちて、焼け焦げた石の残っていた。石が焼け焦げるほどの熱を人間が浴びたら、どのようなことが起こるのだろうという想像が膨らんだ」

「戦争があつたら、自由に旅行もできない。平和でないと観光ができない。つまり、観光とは、平和の時代を生きることにより享受できる概念であることがわかった。観光できる今の生活が普通でない時代があつたということと、過去に戦争があつたということは、忘れてはいけない」

「広島に行く前は、中学校の時に行った長崎のイメージがあった。その時の長崎には、一般の人はあまりいなかった。中華街に行ってもアジア系の人が多かった。他方で、広島は、いろんな国の人 coming いるのがわかった。その魅力が何なのかと、戦争とを関連づけることが大事だと感じた」

「現地で過去に起こったことを風化させないように時代と戦っている『人』がいるということが何よりも大事なことだとわかった。過去の歴史を展示物から知ることも大事だが、現地の『人』が、空間として、時代の移り変わりとともに、過去を風化させないようにしてくれていることそのものがとても大事であるとわかった」

「過去の過ちを繰り返さないために、自分たちは何ができるのかを考えながら、今を生きることを考えないといけないと思った。広島を訪ねる人が、歴史は詳しく知らないという人がいたとしても、違う民族のことを差別してはいけないと思う。平和記念資料館の展示物はネットで配信してくれると、海外の人は、もっと現地に行きたくなるのではないかと思う」

これらの声を踏まえて、次からは、新しい広島ツーリズムのコンセプトを提言する。

第2項 新しい広島ツーリズムのコンセプト—〈歴史の事実に触れ、自分の頭で考え、記憶することで、自分の言葉で物語る〉—

ここでは、筆者たちの考える、新たな広島観光のコンセプトを述べたい。未来への懸け橋として、今後の78年の時代に向けた、国境を越えた、発展性のある広島ツーリズムの可能性への提言である。

はじめに、筆者たちが、実際に広島旅行に行き行って感じたこととは何かを起点とした考察を述べたい。それは、広島が過去に経験した原爆による悲しい記憶や、戦争の歴史など、旅行の前段階として、過去の歴史的事実に触れる前の下準備が、旅行者が、そこから何を感じるかに大きく左右されると考える。実際に、県外の大学生を中心とした筆者たち若者世代が、広島を訪ね、自分たちの身に起こった心情の変化を根拠とした、今後の広島観光の可能性の提言である。

従来の平和教育は、初等・中等教育の段階における修学旅行先として広島を訪ねるなど、学校教育という、ある程度の強制力を伴った教育機会の枠組みのなかで、他者から与えられることが常態であった。一方、本研究に携わる筆者たちの若者世代の多くが、楽しむための旅行のなかで、なぜ、悲しい歴史に触れなければならないのかを疑問に感じており、平和教育を修学旅行で受けたことを忘れていたのである。つまり、平和教育とは、無理やり学ばされるのではなく、情報を受け取る側が、主観性をもって、主体的に歴史と向き合う姿勢が大事なのである。修学旅行に限らず、広島を旅行で初めて訪ねる層が、戦争や平和を考えるこ

とを観光の主目的としていない層に対して、日本が、先の戦争で経験した加害と被害の歴史の両面を被爆体験者の声を聞き、数々の戦争を記憶するアーカイブに触れ、平和を掴み続けるために、自分たちは何ができるのかを主体的に考えるきっかけの一つとして平和教育を位置づけることで、効果的に作用するのである。

次に、これから広島旅行をする人に何を伝えるのかについて考えてみたい。これまで述べてきたように、広島には、過去に経験した悲しい記憶がある。その悲しみを、筆者たちは、単なるダークツーリズムの観光資源の一つとして捉えることはしない点を、本論考では既に述べた。半藤一利は『歴史に「何を」学ぶのか』のなかで以下のように述べている。

そして昭和史の前半が戦争につぐ戦争の歴史とすれば、「平和国家」としての歩みが世界第二位といわれた国をつくりあげたその後半は経済発展の時代といえます。

ところが、それも昭和の年号が平成となったとたん、いっぺんに変容をとげます。

1月に昭和天皇が崩御した昭和64/平成元(1989)年は、思えば不思議なくらいに、世界が大転換した年となった。2月にはソ連軍がアフガニスタンでの敗北と撤退、6月の中国の天安門事件、11月のベルリンの壁崩壊、さらに11月から12月の東欧諸国の無血民主革命、ルーマニアの独裁政権崩壊。そのときに、なんと、日本経済は日経平均株価3万8,915円という市場最高値を記録して、わが世の春を謳歌していたのです。

しかも、2年後のソ連崩壊、冷戦終結とともに、この日本繁栄のバブルはアレヨという間に吹き飛んでいた。浮かれていた日本は世界秩序の大変貌に気付くのが遅すぎたのです。

戦後七十余年とはそうした波瀾の歴史でありました。そこには教訓は山ほどあるでしょうが、だれも学ぼうとはしなかった。いや、いまもしない。大事なことは、「過去」というものはそれで終わったものではなく、その「過去」を実はわたくしたちが向きあっている現在、そして明日の問題につながっているということ。なのに、なんとなく思考を停止し、単純で力強い言葉に愚かにもすがりつく、という風潮に今の日本はあります。その上に、平和が長くつづいてきたために、事実として、日本人は戦争をきちんと清算していないとのイメージを諸外国にもたれているマイナスを忘れてしまっているのです³⁶。

つまり、半藤は、日本が戦後、平和であり続けたことは素晴らしいことである一方で、平和であり続けたが故に、そこから何を学ぶかを、日本人が忘れてしまっていることを憂う姿が窺える。歴史から何を学び、自分の頭で「考える」ことは、過去を総括するだけでなく、今を生きるために必要なプロセスなのである。筆者たちは、広島で、平和記念資料館の展示

³⁶ 半藤一利『歴史に「何を」学ぶのか』、ちくまプリマー新書、2017年

品に触れ、被爆者の切明氏の話聞き、旧陸軍の被服支廠を訪ね、平和継承活動や原爆ドーム、平和記念資料館が、現在の時代にどのようなメッセージを発信し、今と繋がっているかを、自分たちなりの頭で考えた。次に、旅の当事者として、現地で肌身に感じた経験を、他者へ伝承するために「記憶する」ことが必要となる。それによって、第三者へ広島での経験を自分の言葉で「物語る」ことができるようになるのである。この「触れる」「考える」「記憶する」「物語る」の四つの活動循環を、広島旅行のコンテンツの初めか、終わりのどこかに仕組みとして埋め込むことによって、筆者たちが感じた体験と同じような経験を、今後、広島を訪ねる旅行者にも感じてもらうことができ得ると考える。また、平和国家を標榜する日本と広島市が、現代において、世界に、核兵器の非人道性を訴え、世界平和を実現するために何をすべきかを考える構想力のある人物を育成する可能性を秘めているのではないだろうか。

それらを踏まえ、新しい広島旅行の概念について、四つに整理して解説する。

(1) 五感で触れ、感じる

まず、広島の記憶を想起する場として機能する平和記念資料館を象徴とした、数々の歴史的な事実「触れる」。少なからず、筆者たち大学生世代は、生まれたときからデジタルネイティブと呼ばれ、地球の裏側にいる人とも瞬時につながる高度な情報化社会の環境のなかで育っている。また、最近では、チャットGPTなどの生成系AIの登場など、急速なITによる情報革新の進展もある。仮に、「原爆」をテーマとした数々の情報は、それらの情報技術を駆使すれば、歴史的な事実としてだけの一次情報は簡単に収集することができる。そのような時代背景であっても、広島に実際に訪ね、とりわけ、平和記念資料館の「人」に照準を定めた数々の展示物のなかから、78年前のあの日、きこの雲の下にいた、犠牲者一人ひとりの数々の苦しみを数々の展示物のなかから実際に触れることによって得られる感受性が育まれる。

志賀賢治は、『平和記念資料館は問いかける』で、2019年の平和記念資料館のリニューアル後に最も印象に残った展示物に関する中国新聞による入館者アンケートによる声を取り上げて紹介している³⁷。

「犠牲者や遺族など、その人の立場になって考えさせられる」(神奈川県相模原市の主婦)

「統計的に死を伝えるのではなく、名前のある個人に焦点を当てて被害をとらえる意味は大きい」(米国のジャーナリスト)

つまり、第一ステップとして、現地で実際に触れることで創発される一人称での感受性が

³⁷ 志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』、岩波新書、2020年

生まれ、感じ取ることがすべての起点となるのである。

(2) 考え、対話する

次に、自分との対話を通じて考えるフェーズへの移行である。梶谷真司は「知識」ではない体験としての哲学とは「考えること」そのものを指すと述べている。また、一人で考えるときは、自分に問いかけては答え、それを繰り返し、思考することを、自分や他者を含めた対話によって「考える」ことこそが哲学なのであり、それは、人が生まれた直後から始まり、まさに人が共に生きていくことそのものを指す人間らしい営みであると述べている³⁸。

マルティン・ブーバーは「我と汝」のなかで、このような、自己との対話によって育まれる相互主観性について以下のように述べている³⁹。

〈われ〉は、〈われ〉だけで存在し得ない。存在するのは、〈われ〉－〈なんじ〉における〈われ〉か、〈われ〉－〈それ〉における〈われ〉のみである。

野口啓祐は、上記ブーバーの哲学に関して、我々が他の人ないし、ものと結ぶ関係には、二つの根本的に相違した関係の仕方があると解説している。一つは、〈われ〉－〈なんじ〉における〈なんじ〉で、ここでは、〈われ〉が全身全霊を込めて相対しなければならないのに対し、もう一方が〈われ〉－〈それ〉における〈われ〉で、ここでは、甲なる主体が乙を対象として利用する場合としての、自分勝手に利用できるものとしての関係だと述べている。つまり、言い換えると、人間の世界には二つの根本的に相違した秩序が存在すると述べており、前者では真実の「対話」が行われるのに対して、後者では「独語」でしか行われないと解説している。また、ブーバーがそれらの二つの関係における自分との関係性のなかで、対話を重視している点を以下の、ブーバー自身の思想の遍歴を、高い尾根をつたわって進んでいく登山者になぞらえ、以下のように紹介している。

わたしは、絶対者について数々のたしかな説明をそなえた、「体系という平原」にいこったことはない。いや、わたしの行く手はいつも深い溪谷を左右に見下ろす、せまい岩だらけの尾根ばかりであった。こうした尾根にいるものは、絶対者についてはつきりとした説明をすることができない。いや、この尾根にいてたしかなのは、ただ、まだだれにもあらわにされないでいるなにかと出会うことだけである。

自分や他人との対話を通じて、独語（一人称）の世界から「出会い」（二人称）へ進化するプロセスとして、自分の頭で考えることによって、自分のなかに潜む他者との「対話」によって、考えを深めることが重要なのである。

³⁸ 梶谷真司『考えるとはどういうことか』、幻冬舎新書 2018年

³⁹ マルティン・ブーバー 野口啓祐訳『我と汝』、講談社学術文庫 2021年

(3) 記憶し、自らが伝承者となる

次に、広島を訪ねた人々が、数々の人やものに触れて、自己との対話を通し、自分自身の頭で考えることによって、自分にできることがないかを考える領域として「記憶する」フェーズへと移る。

福島在行は、「平和博物館は何を目指してきたか」で、日本の平和博物館の特徴について、三つある特徴と役割のうちの一つ目を、「記憶し想起する場」であると述べている⁴⁰。つまり、戦争死者の慰霊・追悼の場としてそれらが機能することや、それ以外にも、博物館の設立自体が人々の活動を記憶するための行為としても存在しているのである。

二つ目に、対抗的情報発信の場としての機能である。ここでの情報発信とは、世間で十分に認知されていないことがらや、積極的に消されようとしていることがらに対して、広く世に知らせようという行為を指している。

三つ目が、第三者に活用されることを前提とした痕跡的なマテリアルのアーカイブとしての場である。「戦争」や「平和」を継承することを目的とした活動を行う者が、博物館や図書館等の文書館が収集した諸資料を活用するために開かれた貴重な場として機能する場である。

広島を旅行した訪問客が、何らかのきっかけで平和記念博物館を訪ねた場合であっても、実際に筆者たちが現地で得た実感からは、それら三つの機能を十分に兼ね備えた施設が、広島平和記念博物館であることは間違いない。うち、最も肝要なのは、そのような場としての機能的な価値そのものに比べ、そこで実際に目で見、感じた事実と、自己の存在を揺さぶられながら自己と対話するといった体験を通し、自己を相対化し、今ある自分を捉えなおし、そこで得た体験を、今度は自らが他者に伝承していく存在になるための役割を果たすことができる。

(4) 物語り（ナラティブ）によって心を動かす

最後に、当事者となる旅行者が、自らの体験を物語るフェーズへと移行する。ここでの物語りとは、ナラティブを指す。

ナラティブ研究の第一人者の野口裕二によると、ナラティブには「語る行為」と「語られたもの」の両方の意味が含まれると説明している。また、様々な経験や事象を過去や現在、未来といった時間軸で並べ、意味づけをしたり、他者との関わりのなかで社会性を含んだりする表現によって物語る行為であると定義している⁴¹。

また、野口によると、ナラティブに必要な最低限の要素は「複数の出来事が時間軸上に並べられている」のに対し、これに筋立てが加えられたものがストーリーであると述べている。つまり、ストーリーとはナラティブのなかに含まれる要素であるという点で、その二つの違

⁴⁰ 蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴『なぜ戦争体験を継承するのか ポスト体験時代の歴史実践』福島在行「平和博物館は何を目指してきたか」みずき書林 2021年、247-263ページ

⁴¹ 大治朋子『人を動かすナラティブ』、毎日新聞出版、2023年、17-18ページ

いを示している。

イスラエルのヘブライ大学の歴史学者、ユヴァル・ノア・ハラリ教授は「21Lessons 21世紀の人類のための21の思考」のなかで、物語ることによって人々が受ける影響力を次のように述べている⁴²。

ホモ・サピエンスは物を語る動物であり、数やグラフではなく物語で考えるし、この世界そのものも、ヒーローと悪漢、争いと和解、クライマックスとハッピーエンドが揃った物語のように展開すると信じている。私たちは人生の意味を探し求めるときには、現実とはいったいどういうものかや、宇宙のドラマの中で自分がどんな役割を果たすのかを説明してくれる物語を欲しがると。その役割のおかげで、私は何か自分より大きいものの一部となり、自分の経験や選択のいっさいに意味が与えられる。

本研究の冒頭で、被爆者なき後の時代が近い将来に到来する時代において、新しい広島旅行の可能性を探ることをリサーチクエストに掲げ、これまで論考してきた。そこでは、必ずしも、戦争や平和をテーマとした旅行を旅の主目的とは考えていない旅の当事者が、広島が、都市として潜在的に持ち得る普遍的な価値を考えるきっかけを旅のコンテンツの一部から体得させる可能性を考察してきた。結論として、新しい広島コンセプトの、(1)触れる、(2)考える、(3)記憶する、(4)物語る、の4つの象限を旅の当事者が循環することで、戦争を知らない世代が、悲劇の歴史を風化させないために行動できる人を世界中に増やし、人々が平和を掴み取る可能性が見出せるのである。

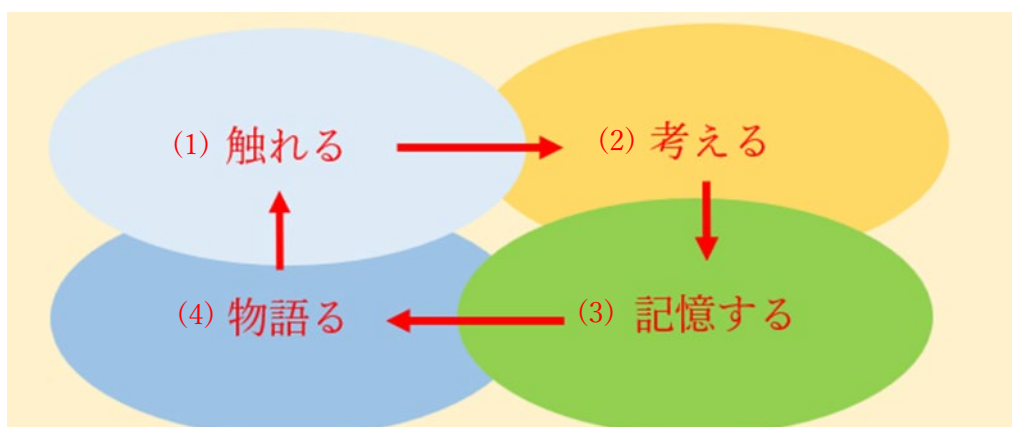


図 10. 新しい「広島観光」のコンセプト (筆者作成)

⁴² ユヴァル・ノア・ハラリ 柴田裕之訳 「21Lessons 21世紀の人類のための21の思考 (430)」、河出書房新社、2021年

おわりに

「おわりに」は、本来、すでに展開してきた内容をふまえ、最後のまとめを行うパートである。しかし、本論文のように、複数の学生が集まり、一年間かけて一つの論文を書き上げるために学び、その結果を論文にまとめるという研究においては、ゼミ参加者の学びの深化、意識の変化の様相を示すことも意味のあることである。そのため「おわりに」では、令和5（2023）年度多摩大学インターゼミ・サービスエンターテインメント班の活動を振り返ることにしたい。すでに示した本論文での議論と重複する内容もあるが、行論上、本論からは落とすことになった「生」の学生の声も多く拾っている。

(1) 調査を開始する（4月～7月）

令和5（2023）年4月より私たちインターゼミ・サービスエンターテインメント班は広島観光に関する各種文献調査を始め、関係者へのヒアリング、現地調査、アンケート調査を行ってきた。

当初、本研究のテーマに「新しい広島観光を考える」を設定した背景として、ロシアによるウクライナ侵略、米中対立、台湾有事、グローバル・サウスの動向、コロナ禍による移動と交流が阻害され、世界情勢が混沌としている中で、世界で唯一の被爆国日本としての役割とは何か。核の脅威と危険が迫る中、改めて平和の大切さを考えることの重要性、「平和都市」を標榜する広島市の取り組みと課題を踏まえ、去年のインターゼミサービスエンターテインメント班が行ったZ世代に関する研究のもと、今後の社会の担い手として期待されるZ世代の問題関心を中心に、被爆者なき後の広島観光の新しい形を模索していくことから研究が始まった。

参加している学生全てが歴史学習の理解度は学校教育程度しか持ち合わせておらず、ほぼ、事前知識等無しの状態であった。その中には、社会人大学院生、論文執筆、研究活動に初めて参加する者、海外からの留学生も参加している。顔を合わせて論議する時間は週に一回しかない中で各人が熱い気持ちを持ち研究活動に励んだ。

現地調査をすることは当初から計画されており、それによって個々に感じたことをメインに研究活動が進んでいく流れとなっていた。そのため、4月から7月までの期間は主に、前述の、文献調査、広島の観光振興策の分析等を個人が興味のある分野を選択し、全体で共有、論議することが中心であった。その中で筆者が大きく印象に残っている内容が以下である。

- ①Z世代「大学生」の視点から「観光地広島」を捉えると、他の観光地と比較した際、交通網、食べ物、現地で体験できること等の少なさから優先度が低くなってしまい、一番学習してほしい層への有効なアプローチができていないこと。
- ②海外からのニーズは非常に高いが、日本の場合、修学旅行地としてのニーズが高い。

自分たちの修学旅行を振り返った際に「歴史学習」の内容をほとんど覚えていないこと。

- ③教授、大学院生は「はだしのゲン」を当然のように読んでいたが、参加している大学生全員が名前だけを認識しており、ある一種のジェネレーションギャップが存在している。
- ④被爆者の数が年々減少しており、このままでは「fact」を後世に伝えていくことが困難になりつつあること。

(2) 専門家へのオンラインヒアリングを行って（7月）

7月に専門家へのヒアリング調査を実施した際、「現地で、誰に、何を学びたいのかを事前に抑えておく必要がある」とアドバイスを頂いた。それまでの我々に対して全く足りていない点であった。平和学習のシステム構築がすでにされているため、能動的な意識と行動が今の我々に必要であると当時感じた。そのため、これまでの活動を踏まえ、メインとなる現地調査に行く前にメンバー全員で再度、研究テーマ整理を行った。以下はその議論のメモである。

〈7月8日の議論のメモ〉

- ・当初は、「広島をZ世代に伝える観光」と考えていたが、国際情勢を考えると広島をピースツーリズム（ダークツーリズム）が世界に与えられるものを提案していくこともできるのではないかと考える。チーム内で少しずつ考えが異なっているかもしれない。自分たちが目指すものは何か、何をやりたいかチーム内で各自の考えを共有したい。
- ・Z世代への広島を歴史への関心を高める。その過程で日本の現状は触れる必要がある。その上で国際情勢を踏まえると広島を平和の発信としてつながるとは思うが、つながりを描くことがまだできていない。日本の若い世代が歴史を知らないのは問題、世界への発信にむけるにしても日本の若者の歴史教育を調査したうえで世界に発信する。
- ・日本のZ世代に対する歴史への関心を高めるための広島観光誘致なのか、海外も含むのか。取り組むテーマによって国際的な平和博物館の調査の必要性もかわる。
- ・研究発表で歴史認識、ダークツーリズム、広島を新しい観光、Z世代を対象とした広島観光など様々な視点からの意見をもらい迷う。しかし、歴史認識だと先行研究と多くある、オリジナリティを出すために、サービス・エンターテインメントに振り切ってもいいのではないのか。
- ・いま広島が世界に向けて発信できることは何かを研究したいし、Z世代に対する広島観光も研究したい。その両方を進めるプロセスがまだみえない。
- ・Z世代は海外を含むのか、日本のZ世代を対象とするのか。

- ・歴史と旅を考えるとピースツーリズムとは、史跡を訪ねて平和について考える旅。いまある広島ピースツーリズムを謎ときのようなゲーム要素を加え Z 世代むけに再構築してもよいのではないか。
- ・対象を Z 世代に制限せず「広島ピースツーリズム・ダークツーリズム」を深めてはどうか。
- ・「平和」とは何を意味するのかは、今後の研究の中で議論していきたい。

学内研究報告での各種コメント、専門家へのヒアリング調査から、班内の考えに多少の違いがこのタイミングで生まれてしまった。だが、全員がこれから迎える現地調査を念頭に置きながら、意見を正直に共有したことは、非常に有益であったことを覚えている。9月の現地調査に向け、インターゼミ サービス・エンターテインメント班らしい研究活動が行えるように問題意識を整理しなおした。重たいテーマを抱えているからこそ、自分たちの立ち位置、考え、展望を再認識し、さらなる団結感と向上心を得た。

(3) 広島の現地調査 (9月)

9月、今までの活動をもとに現地調査を行った。

以下は、各ヒアリング調査での班員の感想を一部抜粋している。

①広島平和記念資料館を見学しての感想

- ・最も印象に残ったものは被曝の実相。 暗い中で実相を学び、本館から東館へ移動する通路は、トンネルを歩きながら被爆者の気持ち、その状況を想像する時間となった。
- ・最も印象に残った展示は、小さい子供のボロボロの服、その子供たちが今生きていたらと考える。小さいのに、これからなのと思う。事前学習では感じる事ができなかった苦しみを感じた。
- ・本館、被爆者自身が被爆者を描いた絵、被爆し水槽に浸かる絵が印象に残った。
- ・平和記念資料館を通して、戦争による葛藤、孤独、痛み、苦しみ、悲しみ、絶望、愚かさといったことや、被爆後から現在の広島を築くまでの人々の心の強さや平和への想いを受け取った。そして、命の尊さが胸に刻まれ、平和に向き合い守っていくべきであると感じた。
- ・戦争体験者ではない人々が広島を訪れるきっかけとなる現在の修学旅行のあり方が、相手の関心所がわからないまま講話をすることは難しく、平和学習として十分機能しているか、自発性の点も踏まえ、聞き手側にも十分な準備と関係性の構築が重要であることを実感した。
- ・対話ノートに残したコメントのように世界中の人々がお互いに戦争の悲しみを知りながら、同じ過ちを繰り返さないように祈り続ける。

② 伝承者の講話を聞いた感想

- ・平和を自らの手でつかみ取り、はなさないように、戦争、核兵器を知らない世代に伝えるために、残していくために、戦争体験を伝承し続けていく重要性を学んだ。我々の問題意識の一つである、「被爆者なき後の広島旅行をどのように捉えるか」において、一人の学生として、「何かできることはないか、伝承できることは無いだろうか」まずは、研究を形として残すことから始めたい。
- ・戦争を知らない時代、世代だからこそ学校で習うような事実の部分だけではなく、人々が経験した悲惨な実態を知らなければならぬと強く感じた。
- ・ヒトからヒトへ言葉を伝えることが、ある時、とても大きな化学反応を起こし得ると感じた。想いを伝える手段は、活字や伝承など、あらゆる方法が存在するが、今回、私たちが取り組むテーマに対して、「論文」という言葉を使って、先の戦争の悲惨さと、それを知ることの大切さを想いとして伝えることで一人でも多くの人に提供したい。
- ・切明さんの仰っていた「伝えなければ忘れ去られ、なかったことになってしまう」という言葉が印象に残っている。そうした中で、被爆者の伝承者として活動されていることは、戦争をなかったことにしないための一つの素晴らしい方法だと考えた。人々の想いを、なんとかして形にできるようにしていきたい。

③ 被爆者の話を聞いた感想

- ・「戦争を知らない若者が戦争にまきこまれてしまったら、どうになってしまうのだろう」というお話の内容があった。ロシアによるウクライナ侵攻が行われている現代において、戦争を他人事と捉え、自身が平和ボケしていることに気が付いた。現在の平和を守るために歴史事実を学習し、個人の意見を持つことで、受けた被害を過去の物にしないことが最も重要であると実感した。
- ・最も印象的だったのが、「戦争の恐ろしさがわからなかったら、その防ぎ方もわからない」とお伝えいただいた点である。平和な日常が当たり前で、何が「戦争」なのかがわからないまま生まれ、今に至っている。そのような、「戦争」を知らない世代に対して、家族や親戚、友人、同僚、恋人など、身近な人を含めて、「戦争」の恐ろしさを伝えていくことが、二度と同じことが繰り返されないよう、一人でも多くの人が、平和を掴み続ける世の中を作っていくことに繋がると考えた。
- ・「平和な暮らしをしていることは幸せなことだが、本当の戦争を知らないことは危ういことだと思う。平和というのは、掴み取って逃がさないようにしなくてはいけない」このような言葉や切明さんの実体験を聞いた時に、平和というのは当たり前ではなく危うい存在だと感じた。切明さんとの意見交換会や平和記念公園で学んだことを胸に刻みながら研究を進めていくと同時に、私自身も学生だからこそ価値が生まれる活動をして体現していきたいと考えている。

このように、現地調査を通して、各個人に多様な感じ方がもたらされ、多くの内容に触れることで、知識と経験として心に刻まれた。上記にもあるように、感じ方、捉え方が全くことになっている。一人一人が提供された情報に対してオリジナリティあふれる感想を持つこと、これこそが最も重要であると感じる。半年前までは歴史認識などほとんど持ち合わせていなかったが、ここまでの活動を通して大きく成長して点であるといえるだろう。また、本論文内にも記載のある現地での取材を通して、自分たちの研究活動がもたらす影響が大きいものであることを認識した。

(4) 秋学期以降

研究活動が折り返しを迎える秋学期に入ると、新たに二人の学生がチームに加わった。半年前まで高校生であったことを全く感じさせず、研究に貢献しようと、熱い気持ちと向上心を持ち活動に参画した。彼らは、若者独自の視点で、これまでの体験の下、研究に大きく貢献してくれた。その後、アンケート調査に取り掛かった。自分たちが感じたことを中心に、非戦争体験者が核兵器、平和をどのように捉えているかを明らかにしようとした。分析の結果、特に若い世代の核兵器認識が低いことが浮き彫りになった。想定していたよりも数値が低く、若い世代に向けた提案と手段が必要であると感じていた。論文の執筆に差し掛かると、これまでの活動を整理し文章化することよりも、「新しい提案」の部分に苦勞した。短い期間において素人集団ができることには限りがあるからである。この時、全員がある思いを持っていた。それは、「自身が一種の伝承者としてできることは、この論文をまずは完成させること」である。この思いの下、これまで感じたことを文章化して共有することで、答えを見つけようとした。以下は、結論作成のために使用した設問3点に対して学生が回答、共有したものの一部である。

①自分が広島旅行に行って、感じたこと

- ・原爆の非人道性を感じ取ることができた。具体的には、切明千枝子さんのような、被爆体験者が、ご自身が思い出したくもない過去の体験や惨状を、次世代に伝え続けることの重要さにお気付きになり、80代を過ぎた頃から、修学旅行生を相手に語り続けてくださっているという事実と、そのお気持ち。ヒロシマピースボランティア（被爆体験伝承者）という形で、切明さんの被爆体験の伝承活動に共感し、後世に語ってくださっている仁木美恵さんの行動。平和記念資料館にご勤務の傍ら、戦争や原爆の惨状を、資料館という機能としての発信だけでなく、ご自身の理念によって、社会貢献活動を続けておられる、福島在行先生の3人のお話を聞き、核兵器という非人道性の高い兵器によって、多くの人々の人生を、後世にわたって、または人類史上において変えてしまったという事実と、世界で唯一の戦争被爆国としての被爆体験を、講話やアーカイブという形で、私たち日本人が、世界に向けて、訴え続けていくことの重要さを自分事として感じる事ができたからである。

- ・現地では外国人の多さに驚いた。G7 サミットをきっかけとしたインバウンドを中心に非常に外国人の方が多く、唯一の被爆国として日本そして広島に注目が高まっており、資料館では想像をうわまわる、原爆、戦争の悲惨さを感じた。特に印象的だったのは、笑顔の写真とともに置かれている子供たちの身につけていた洋服やカバン、使っていたお弁当箱や三輪車の展示品である。無差別に笑顔を一瞬で恐怖に変え、時を止めた原爆の恐ろしい実態に言葉がでなかった。

②これから広島旅行に行く人に、何を伝えるか

- ・平和記念資料館と平和記念公園の二つは、どこかで訪ねた方が良くと伝えると思う。旅行とは本来、非日常性を味わうためにある。旅行が非日常性であるのであれば、それが、「戦争」や「紛争」が、世界中では、ウクライナや、イスラエルなどで、現在もなお、なくなっていないものの、日本人である私たちが、日常的生活の中で、それらを当たり前のように感じ取ることの難しいものである。一方、過去の事実（加害の歴史と、被害の歴史）を、肌で感じ取りやすいコンテンツが、広島には、現在もなお、たくさん残っていると思うのがその理由である。とりわけ、原爆ドームや、平和記念資料館が、その象徴的な対象であると考ええる。
- ・遊ぶことが主目的でいいけれど、平和記念資料館はできれば訪れてほしい（二日目以降が最終日に）。原爆ドームや記念公園を訪れたとしても、今の観光客の多くは「訪問した記録作り」に熱心になるため、「人々の想いと願い」を十分にその場所から感じ取ってはくれないと思う。平和記念資料館に自身の足で訪れ、自分の目で展示物を見てほしい。SNS が普及し自宅からでも学習することができる時代だからこそである。今回行ったアンケート調査の内容の中で、宮島等の観光地よりも平和記念資料館等の歴史建造物の方が記憶に残っている結果が出ている。中に入ってしっかりと展示物を見て当時のことを学習することで記憶に残るような衝撃を受けたのだと思う。実際に自分自身も衝撃を受けた。高校生以下や観光目的の人達に無理やり、学習を促し感じ取ってもらうことは困難であると思うが、別にたくさんの人々でもなく、現地に来て学習したいと思う人が自分の感性のままに展示物を見て様々な感情を持ち、核廃絶に向けてまずは意見を持つことから始めてほしい。展示物の中には、歴史、被害、復興等複数のコンテンツがあり、平和な国に時代に生まれ育ったからこそその違和感を感じるために平和記念資料館は訪れてほしい。その中で、さらに興味を持った場合には、実際に活動をされている方々の話を聞いてほしい。被爆体験者を始めとし、自分の思っている以上に多くの特性を持つ人々が異なる境遇のなか必死に活動を続け、迎え入れてくれることを伝える。

③自分の大切な人（家族・友人・恋人・将来の子ども）と広島旅行に行く場合、今後、世界で何が起っても、これだけは一番大切だと感じたことを伝えるとしたら、それは何か

(伝え方や方法を含む)。

- ・旅行という非日常の体験を、「楽しさ」の側面だけで捉えるのではなく、「悲しさ」の側面の両面で捉えた場合、自分自身が当たり前のように享受している平和な日常とは、過去の、誰の、どのような努力や、行動によってもたらされているものなのかを、もう一度捉え直すという意味で、広島には一度は訪ねて欲しいと思うし、大切な人にも、自分の視点で感じ取ってもらいたいと思う。
- ・伝え方は色々あると思うが、まずは足を運んでみるのが先で、一度足を運んだら、現地には、数多くのアーカイブが機能として存在しているので、その機能を活用できそうな旅行プランを考えてみると思う。
- ・原爆ドームや資料館へ行くにしても行かないにしても、今、旅行に行けたり何不自由なく生活ができたりしていることは当たり前ではなく、戦争が起きたら、全ての当たり前や楽しみがなくなってしまうということを、今回感じたことや経験とともに自分の言葉で話したい。

結論に向けての論議の下、インターゼミサービス・エンターテインメント班が提唱する、新しい「広島観光」コンセプトが生まれた。

〈平和な日常とのギャップに触れ、自らの存在を揺さぶられながらも、今後、世界で何が起こっても人類にとって最も大切なものを考え、記憶し、物語り、また新たな知に触れる、それが筆者らの考える「広島ピースツーリズム」である。〉

研究活動においては、結論を導き出すことが最も重要視されるが、筆者らの活動はそれ以上に、「ここまで素人集団がたどり着いたこと」にフォーカスしてほしい。歴代のインターゼミの各班が行ってきたテーマの中でも群を抜いて重たく現実から目をそむけたくなる内容であった。だが、だれ一人として投げ出さず、最後まで真摯に向き合い、結論を導きだした。歴史、平和研究の側面に存在する学生の成長こそが本研究の醍醐味であったといえるだろう。

参考史料・文献

1. 寺島実郎『ひとはなぜ戦争をするのか』、岩波書店、2018年
2. 桐谷多恵子「広島観光における被爆者証言活動の意味：切明千枝子さんの就学旅行者へ対応経験を中心に」『多摩大学グローバルスタディーズ学部紀要』、第15号、2023年)
3. 桐谷多恵子「誰の視点から復興を描くのか—被爆者が語る〈筆者たちの復興〉から広島の「復興」を捉え返す試み—」『日本災害復興学会論文集』NO.15 (Special Issue) 2020年9月
4. 福島在行「平和博物館は何を目指してきたか」、蘭信三・小倉康嗣・今野日出晴編『なぜ戦争体験を継承するのか』みずき書林、2021年、248～267頁
5. 広島市経済観光局観光政策部「広島市観光概況」
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/137645.pdf> (閲覧日：2023年8月29日)
6. 広島市への海外からの賓客訪問実績 - 広島市公式ホームページ | 国際平和文化都市
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/soshiki/49/10543.html>
7. 広島平和記念資料館 | 資料館について | 入館者数について
https://hpmuseum.jp/modules/info/index.php?action=PageView&page_id=136
8. マイナビ、国内宿泊予約サイト『マイナビトラベル』「学生旅行白書」を発表、2018年6月20日、https://www.mynavi.jp/news/2018/06/post_17388.html (閲覧日：2023年5月30日)
9. 広島テレビの公式 YouTube チャンネル「原爆資料館～広島を遺す～」
<https://www.youtube.com/watch?v=m9h0YpgleKE> (閲覧日：2023年5月4日)
10. 公益財団法人 放射線影響研究所日米共同研究機関公式ウェブサイト
<https://www.rerf.or.jp/glossary/abcc/> (閲覧日：2023年5月7日)
11. NHK 政治マガジン「アメリカ人の8割以上『核兵器は必要ない』」、2020年8月3日
<https://www.nhk.or.jp/politics/articles/statement/42800.html> (閲覧日：2023年6月25日)
12. 中川保雄「放射線による晩発的影響の過小評価Ⅰ」、『科学史研究Ⅱ26』、1987年
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jhsj/26/163/26_129/_pdf (閲覧日：2023年6月6日)
13. 辛亨根「韓国人原爆被害者の研究の過程とその課題」『広島平和科学』34、2012年、161～187ページ、[file:///C:/Users/baata/Downloads/hps_34_161%20\(1\).pdf](file:///C:/Users/baata/Downloads/hps_34_161%20(1).pdf) (閲覧日：2023年6月3日)
14. ダニエル・スナイダー「分断された記憶：歴史教科書とアジア戦争」、NIPPON.com、2012年4月17日、<https://www.nippon.com/ja/in-depth/a00703/> (閲覧日：2023年5月29日)
15. 碓井真史「原爆に対する日米韓の意識：韓国『防弾少年団』原爆Tシャツの問題から」、

- YAHOO! JAPAN ニュース記事、2018 年 11 月 10 日
<https://news.yahoo.co.jp/byline/usuimafumi/20181110-00103609> (閲覧日:2023 年 5 月 20 日)
16. 日テレ NEWS 「広島・長崎「原爆投下」…アメリカの若者“意識”に変化が」、日テレ公式 YouTube チャンネル、<https://www.youtube.com/watch?v=efU0yEjPZa0> (閲覧日:2023 年 5 月 15 日)
 17. 米国ホロコースト記念博物館公式ウェブサイト：<https://www.ushmm.org/>
米国国立航空宇宙博物館公式ウェブサイト：<https://airandspace.si.edu/>
米国国立第二次世界大戦博物館公式ウェブサイト：
<https://www.nationalww2museum.org/> (閲覧日:2023 年 5 月 12 日)
 18. 広島公式観光サイト「Dive! Hiroshima 令和 3[2021]年 広島県観光客数の動向」
<https://dive-hiroshima.com/business/news/news-11473/>
 19. 帝国戦争博物館 ホームページ <https://www.iwm.org.uk/>
 20. NHK すくすく子育て ch 「戦争のこと 子どもにどう伝える？」2023 年 6 月 10 日放送
https://www.nhk.or.jp/sukusuku/articles/article_9206/ (閲覧日:2023 年 6 月 10 日)
 21. 古市憲寿「戦争博物館から戦争を考える」『季刊政策・経営研究』2014Vol. 4
https://www.murc.jp/assets/img/pdf/quarterly_201404/pdf_005.pdf
 22. 井出明『悲劇の世界遺産～ダークツーリズムから見た世界～』、文春新書、2021 年
 23. 「戦争の記憶——ヒロシマ／ナガサキの空白」『広島平和研究所 VOL. 9 、広島市立大学・広島平和研究所、2023 年 7 月
 24. NHK 「クローズアップ経済」2023 年 8 月 21 日 (月) 放送分「もしも今核兵器が使われたら 初のシミュレーションが示す脅威」
<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4812/>
 25. 中国新聞社 「広島原爆、何時何分に投下された？【イチからわかる】1945 年 8 月 6 日のこと」<https://www.chugoku-np.co.jp/articles/-/198400> (閲覧日:2023 年 6 月 10 日)
 26. 厚生労働省「原爆放射線について」
<https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/genbaku09/15e.html> (閲覧日:2023 年 6 月 10 日)
 27. 中沢志保「原爆投下決定における「公式解釈」の形成とヘンリー・スティムソン」、文化女子大学紀要『人文・社会科学研究』No. 15 P51-63, 2007 年 1 月
file:///C:/Users/baata/Downloads/001032115_04.pdf
 28. 藤岡惇「なぜ米国は 2 発の原爆を日本に投下したのか—投下 70 周年の時点での再考—」、『立命館経済学』第 64 巻 第 4 号 2016 年 2 月 16 日
 29. 小室憲義「原爆投下理由」の再検証—スミソニアン原爆展論争から—、『異文化コミュニケーション研究』第 1 号、愛知淑徳大学大学院コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻・言語文学研究所、1998 年 2 月

30. 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会（編集）『広島・長崎の原爆災害』、岩波現代文庫、2005年
31. 公益財団法人 広島平和文化センター公式ウェブサイト「No. 201 海外からの来訪者が発信するメッセージ」
<https://www.pcf.city.hiroshima.jp/hpcf/heiwabunka/pcj201/Japanese/10J.html>
 （閲覧日：2023年8月12日）
32. 中国新聞『『ヒロシマ』へ続々 平和公園に外国人戻る 原爆資料館 4月は前年の30倍』、2023年4月20日付電子版
<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=130883&fbclid=IwAR2dNjBAnviqZUDph11Dq1X5IMx85vXiFg40r0YBJHmj1Nk3VT0aGywddAk>（閲覧日：2023年7月20日）
33. 広島市役所公式ウェブサイト「原爆被害の概要」、2022年3月18日更新
<https://www.city.hiroshima.lg.jp/site/atomicbomb-peace/9399.html>（閲覧日：2023年9月10日）
34. 内田宋治『外国人が見た日本「誤解」と「再発見」の観光150年史』、中公新書、2018年
35. アルバート・アインシュタイン/ジグムント・フロイト著、浅見昇吾訳『人はなぜ戦争をするのか』、講談社学術文庫、2016年
36. 井出明『ダークツーリズム 悲しみの記憶を巡る旅』、幻冬舎新書、2018年
37. 藤原帰一『戦争を記憶する 広島・ホロコーストと現在』、講談社現代新書、2001年
38. 志賀賢治『広島平和記念資料館は問いかける』、岩波新書、2020年
39. 半藤一利『歴史に「何を」学ぶのか』、ちくまプリマー新書、2017年

付録

1. NHK 広島・広島 TV「戦争の記憶と平和の継承」～インターゼミの広島調査報告①

2023年度インターゼミ（社会工学研究会）サービス・エンターテインメント班は、9月10日～12日にかけて担当教員3名、学生6名の計9名で広島現地調査に行つて参りました。

現地では、広島平和公園内にある平和資料館をはじめ、被爆地の調査を行ったほか、現地の歴史専門家によるレクチャー、被爆者や被爆体験伝承者の方々に講義をしていただきました。

本ゼミは、春学期から『『広島観光』の可能性-原爆・戦争・平和を学ぶ旅をどう組み立てるのか』という研究テーマで、各種文献調査を実施してきました。「唯一の戦争被爆国である日本を今後担う次世代に、歴史を正しく伝承していくために、これからの日本が果たすべき役割とは何か、若い世代を中心に原爆・戦争・平和をテーマとした広島観光の可能性はあるのか」という問題意識をもとに、今回メンバー全員で実際広島観光を行い、その経験を分析することで、広島観光の可能性を探るために現地調査を実施しました。今後は、第二次世

界大戦や広島への原爆投下および戦後の広島復興の歴史をたどりながら、「平和都市」を標榜する広島の魅力や存在意義を明らかにするとともに、如何にしてダークな戦争や原爆のイメージを払拭しつつ、正しい歴史認識を、来訪者にお伝えする仕掛けを観光のコンテンツに盛り込めるのか、検討して参ります。

現地では、NHK 広島、広島テレビ、中国新聞社の3社から取材を受け、ニュース番組でも取り上げられました（下記ニュース記事・動画ご参照）。

◆NHK 広島「広島 NEWS WEB『被爆の実相をどう学ぶか』学生が被爆者から話聞く」

<https://www3.nhk.or.jp/hiroshima-news/20230911/4000023569.html>

◆広島テレビ「広テレ！News 戦争の記憶と平和の継承…東京の大学生がヒロシマを学ぶ」

<https://news.yahoo.co.jp/articles/72489e6267490cd454f9d946626de5d309fbacfe>

今回の広島現地調査を通じて、メンバー一同改めて広島の歴史やこれまでの広島の取り組みに関する様々な知見を得たほか、これまで抱えてきた問題意識を深めることができました。今回、ご協力していただいた関係者の方々に改めて深謝申し上げるとともに、現地での学びや気づきを今後の研究に活かしていきたいと思っております。



2023年度インターゼミサービス・エンターテインメント班についてはこちらから

https://www.tama.ac.jp/guide/inter_seminar/2023/service.html

2. 中国新聞「東京の大学生ら被爆地の旅探る」～インターゼミ広島調査報告②

本年9月10日から9月12日にかけて、インターゼミ・サービスエンターテインメント班が広島にてフィールドワーク調査を実施しました。

この度、同調査活動について取材していただいた中国新聞社の公式ウェブサイトにて「東京の大学生ら被爆地の旅探る 証言聞き取りも」（9月25日付朝刊）と題する記事が掲載されましたので、ご一読頂ければ幸いです。

詳細は以下の中国新聞社のウェブサイトをご参照ください。

<https://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=136612>

3. 大学プレスセンター「多摩大学（東京都多摩市：学長 寺島実郎）インターゼミの学生

と院生が『広島観光』の可能性について、被爆者から聞き取り調査を実施」2023.10.18

多摩大学 寺島実郎学長が主宰する、学部、大学院横断で研究を深める「インターゼミ（社会工学研究会）」の「サービス・エンターテインメント」班の学生と院生の6名が、『「広島観光」の可能性－原爆・戦争・平和を学ぶ旅をどう組み立てるのか』をテーマに、9月10日から3日間、広島でフィールドワークを行った。

担当教員の桐谷多恵子専任講師は、戦後広島・長崎の「復興」と被爆者についての研究者で、広島在住の被爆者の方との繋がりもあることから、今回のフィールドワークでは、15歳の時に被爆した切明千枝子さん(93歳)の聞き取り調査を行うことが出来た。

戦時中、原爆投下で火の海となった広島での悲惨な体験を、当事者として若い世代に伝えようとする切明さんの言葉は、時空を超えて、平和な時代に生きる学生、院生の心に深く響いた。

被爆者の高齢化が進む広島では被爆体験の聞き取りも難しい中、訪れた観光客が、平和であることが当たり前ではないことを真剣に考え、学ぶ機会を持つことが出来るのか、その可能性を模索する貴重な経験となった。

今回のフィールドワークでは、「ピースツーリズム」の観点から広島の魅力や存在意義を明らかにし、今後の研究では、広島観光の現状把握、課題と要因分析など、新たな観光プランの提案に向けて更に研究を深め、今年度の論文に反映していく。

「戦争の記憶と平和の継承」～インターゼミの広島調査報告

<https://www.tama.ac.jp/topics/news/2023/09/post-11110.html>

インターゼミ 2023年度 サービス・エンターテインメント班

https://www.tama.ac.jp/guide/inter_seminar/2023/service.html

4. アンケート結果

本論文執筆の参考として、令和5(2023)年11月6日から11月19日にかけてオンラインにてアンケートを行った。250人から回答いただいた(年齢別内訳は10代64.4%、20代16.8%、30代1.2%、40代10%、50代6%、60代1.2%)。付録として収録する。

【調査目的】

以下の内容をお読みいただき、ご同意いただける場合には、本ページ末尾の「次へ」ボタンよりアンケートページにお進みください。ご同意いただけない場合は、本ページを閉じてください。

この調査は、多摩大学社会工学研究会(寺島学長主宰インターゼミ)における研究の一環として、皆様の広島・長崎についての意識調査を行うことを目的としています。本調査は、年齢、性別を問わず幅広い層の方々への戦争観や平和に対する認識について調査するもので

あり、特定の個人や集団について調べるものではありません。調査から得られた情報には統計的な処理を施した上で分析されます。

1) 取得する情報の範囲

調査において、以下のような個人情報にご回答いただき、その結果を記録することとなります。

- ・回答者の性別
- ・回答者の年齢
- ・Google へのログイン状況によっては、回答者のメールアドレスも記録されます。ただし、統計的な処理の段階で、回答者のメールアドレスは切り離され、分析に用いられることはありません。

2) 所要時間は 10 分程となります。

3) 調査のために取得する情報は、研究以外の目的で使用するのではなく、第三者に提供することはありません。

本アンケートの内容や、個人情報の取り扱いに関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

多摩大学 経営情報学部 教授 巴特尔（バートル）

Email : baatar@tama.ac.jp

上記内容に同意します

初めの質問（セクション 2）

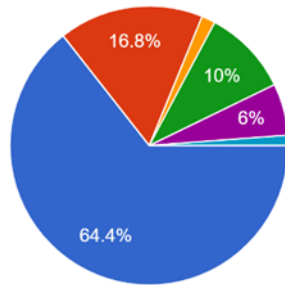
無題の質問
250 件の回答



● 上記内容に同意します

あなたの年代を教えてください。

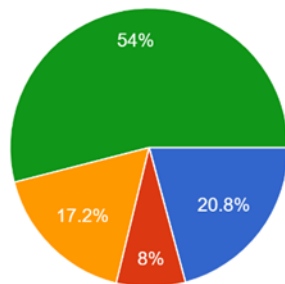
250 件の回答



- 10代
- 20代
- 30代
- 40代
- 50代
- 60代以上

広島・長崎のどちらかを訪れたことはありますか。

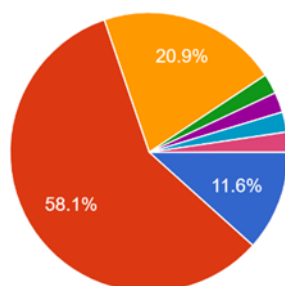
250 件の回答



- 広島
- 長崎
- 両方
- どちらも訪れたことない

広島を訪れた目的は何でしたか。

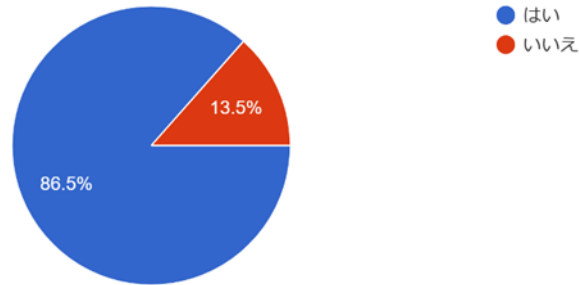
43 件の回答



- 修学旅行
- 観光
- 仕事（出張）
- 観光と仕事
- 仕事の出張もあれば、観光の旅行もあります。
- 祖母の家に帰省
- 行ってない

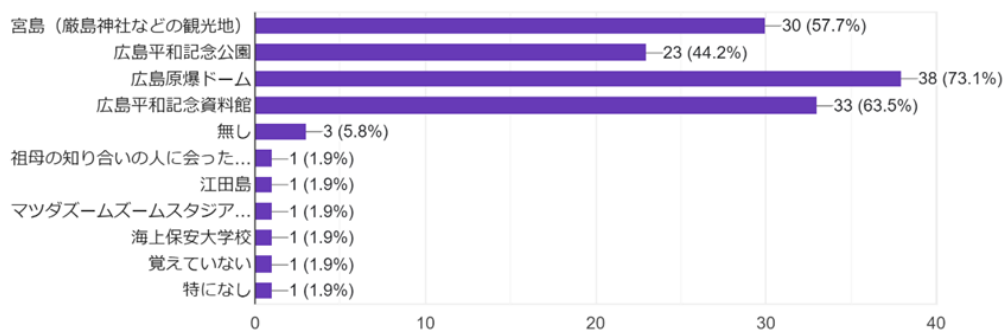
広島原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れたことはありますか。

52件の回答



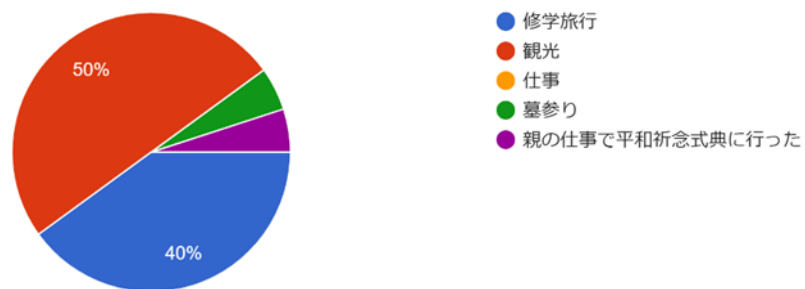
訪れた場所で印象に残っている場所はどこですか。...にない場合はその他に無しと記入してください

52件の回答

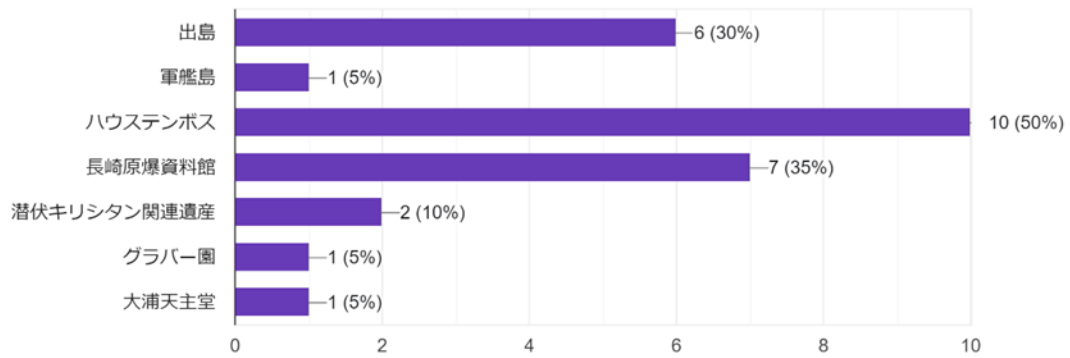


長崎を訪れた目的は何でしたか。

20件の回答



訪れた場所で印象に残っている場所はどこですか。...にない場合はその他に無しと記入してください)
20件の回答



広島を訪れた目的は何でしたか。
43件の回答



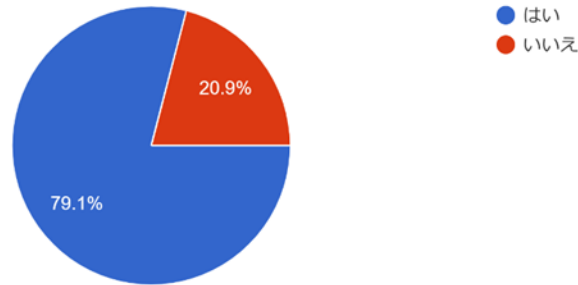
長崎を訪れた目的は何でしたか。

43件の回答



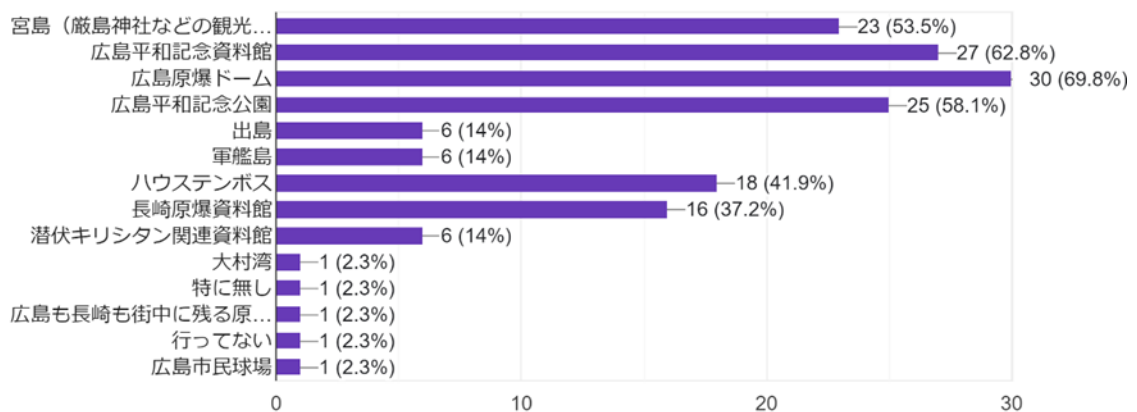
広島原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れたことはありますか。

43件の回答



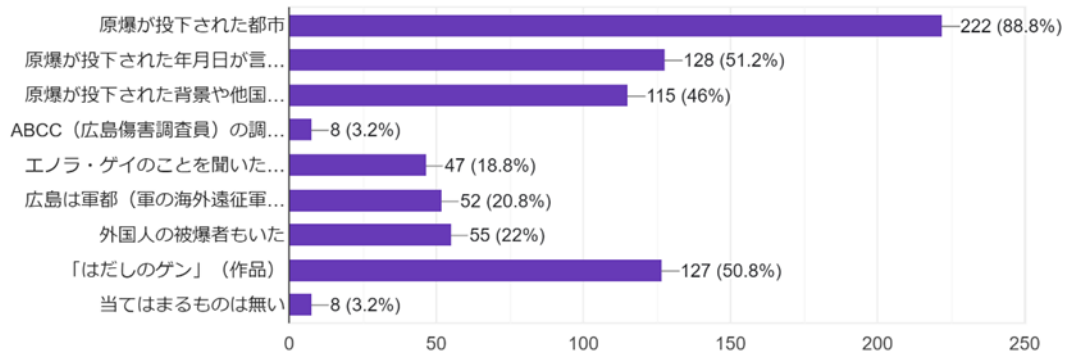
訪れた場所で印象に残っている場所はどこですか。...(にない場合はその他に無しと記入してください)

43件の回答



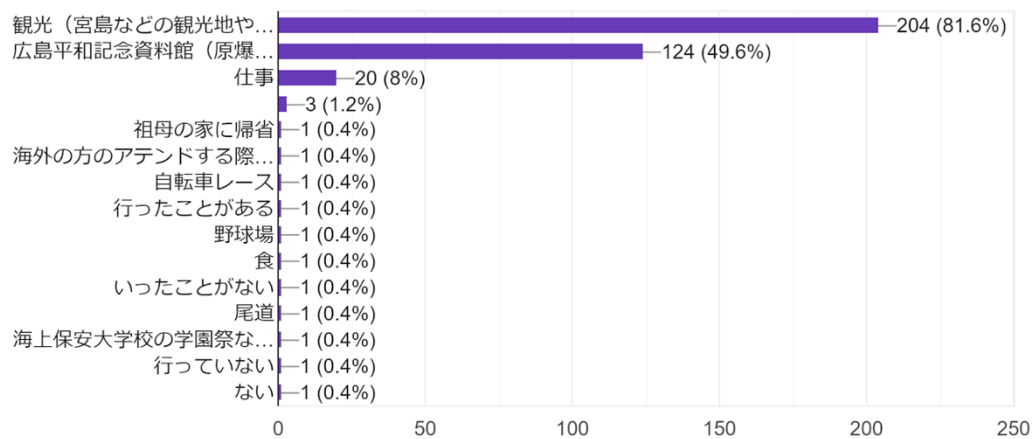
広島について知っていることの中から当てはまるものを全て選んでください。

250件の回答



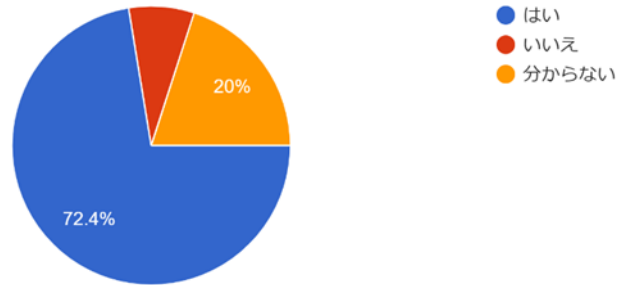
広島を訪れる場合、何を目的として行きますか。

250件の回答



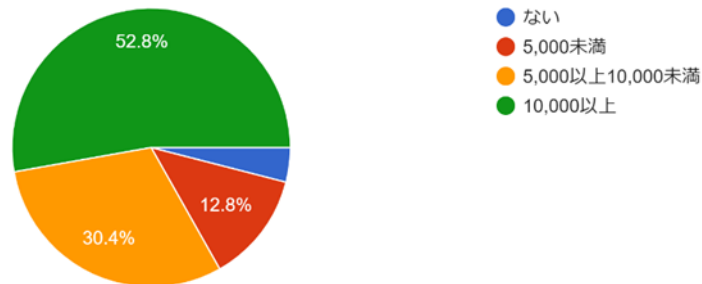
日本は唯一の戦争被爆国である。

250 件の回答



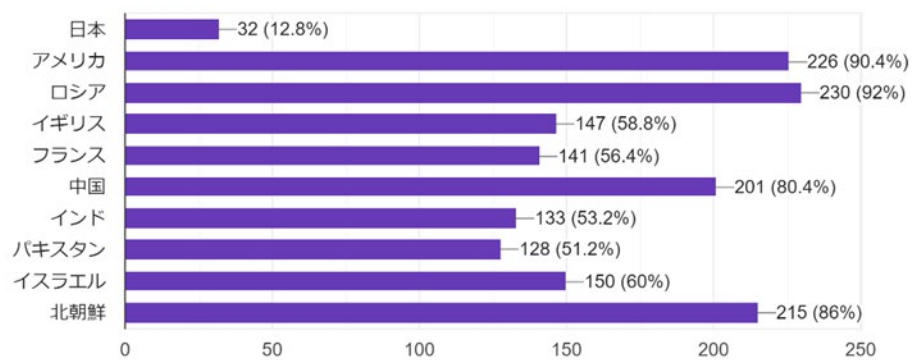
2023年6月時点、世界中にある核弾頭の数はおよそどのくらいあると思いますか。

250 件の回答

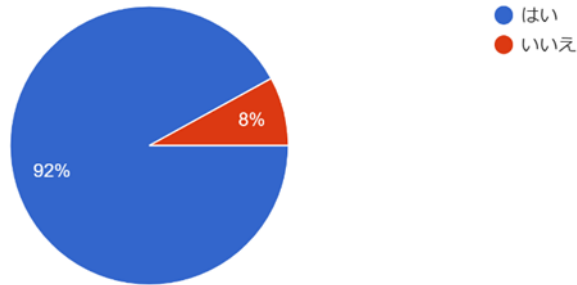


核保有国を全て選択してください。

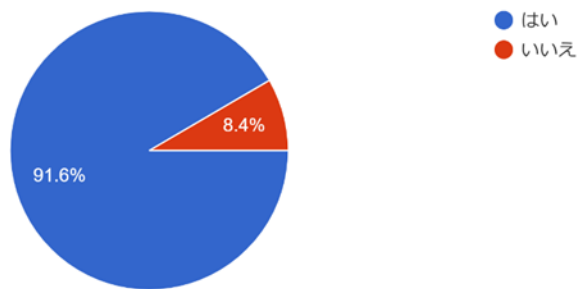
250 件の回答



広島・長崎の原爆投下の事実について世界に発信する必要があると思いますか。
250 件の回答



被爆体験を若者に伝える必要があると思いますか。
250 件の回答

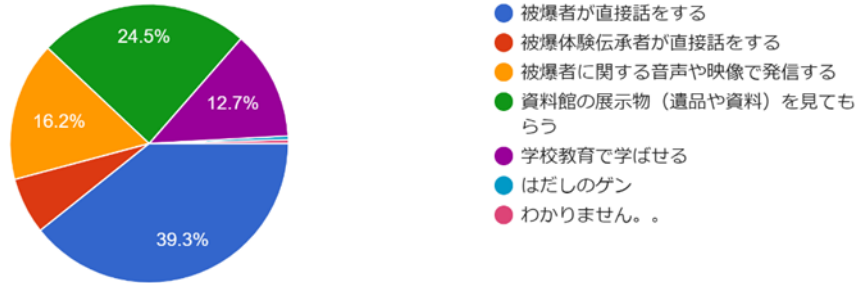


原爆の被害を学ぶ方法としてどれが一番有効だと思いますか。
229 件の回答



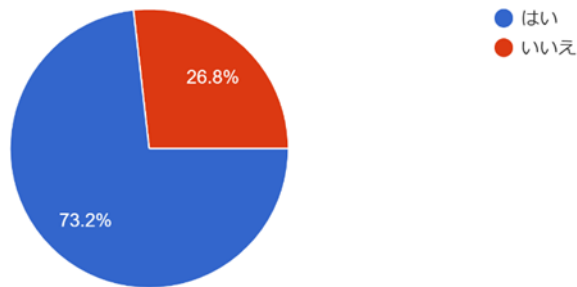
被爆体験を伝える方法としてどれが一番有効だと思いますか。

229 件の回答

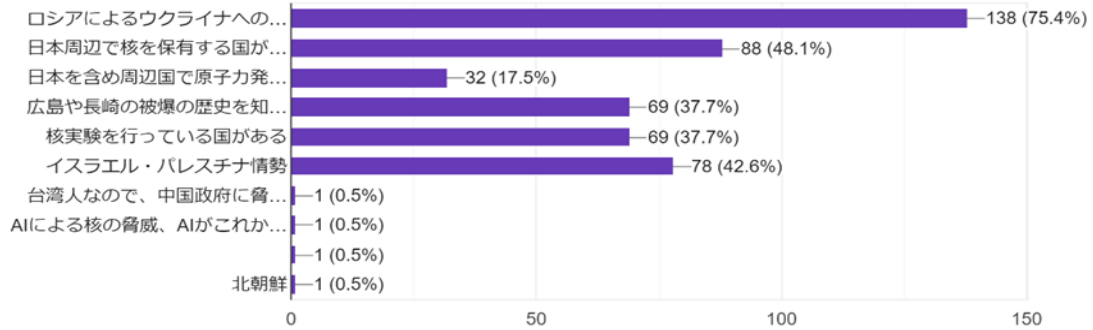


近年、核戦争が懸念されているが、あなたは核の危険性や脅威を感じたことはありますか。

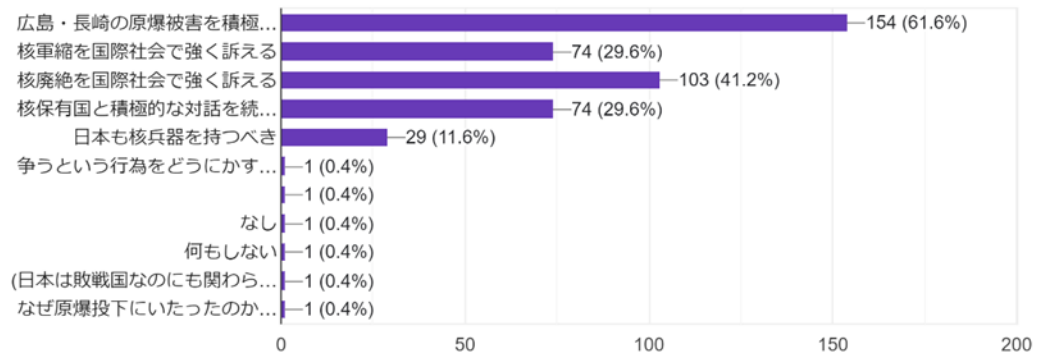
250 件の回答



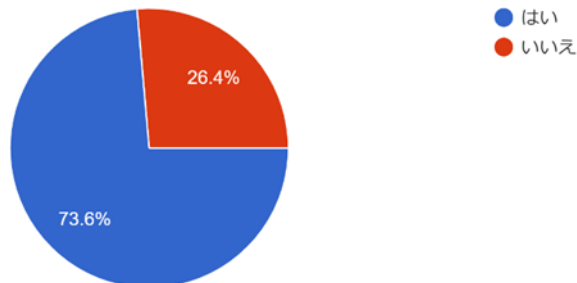
なぜ、核兵器の危険性や脅威を感じていますか。当...が無い場合はその他に無しと記入してください
183件の回答



唯一の戦争被爆国として、日本はどうすれば良いと...が無い場合はその他に無しと記入してください
250件の回答

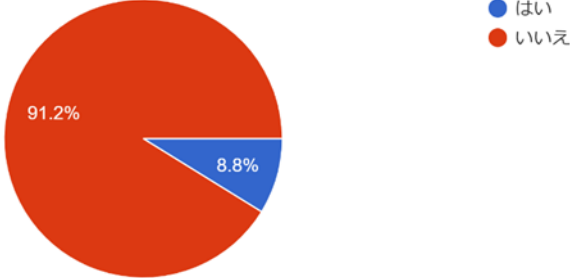


現在の日本は平和だと思いますか。
250件の回答



現在の世界は平和だと思いますか。

250 件の回答



謝辞

多摩大学インターゼミサービス・エンターテインメント班は過去14年間において、ウォルトディズニーの研究を皮切りに観光ツーリズムやZ世代の消費動向など、様々な研究に取り組み、日本のエンターテインメント業界やそれに関わる産業のあり方から、社会を洞察する研究に向き合ってきました。

2023年度は、「『広島観光』の可能性—原爆・戦争・平和を学ぶ旅をどう組み立てるのか」という課題に向き合いながら文献とフィールドワーク調査を行って参りました。

第二次世界大戦や広島への原爆投下および戦後の広島復興の歴史をたどりながら、平和都市を標榜する広島が世界及び日本人に対して何を語っているのか、どのようなメッセージを伝えようとしているのか、といった問題関心に基づいて広島の魅力や存在意義を考察し、「戦争の記憶と平和の継承」を目的とした新しい「広島観光」について、多方面から模索しました。文献調査や広島現地調査、そして多様な世代を対象としたアンケート調査を積み重ねた結果、今後の広島観光の在り方について大学生ならではの提案をすることに至りました。

今年度は、学部生7名、院生1名の計8名で研究に取り組み、昨年度同様に対面だけでなくオンラインでも議論を重ねました。経験値も年齢も異なるメンバーの方々が、1つの目標に向かって活動することは大変貴重な機会であり、特に指導教員や社会人の方々にも参画していただいたことは学部生にとって、刺激のかつ大変有意義な時間となりました。メンバー同士の意思疎通、プレゼンテーション資料や論文の原稿作成等で苦勞もありましたが、「学び続ける意識」と「探求心」を持つことの大切さを学びました。

本論文を執筆する上で、多くの方々にご支援・ご協力を頂きました。広島現地調査では、被爆者・切明千枝子氏、被爆体験伝承者・仁木美恵氏、平和博物館研究者の福島在行氏に多大なるご協力をいただきました。特に、福島氏にはご多忙の中、私たちのヒアリング調査にご協力いただいたほか、資料収集から論文の構成に至るまで親身になってご指導して下さいました。この場を借りてご協力いただいた方々に心より感謝申し上げます。

また、主体性を高め探求心を育む場を作って下さった寺島実郎学長を始め、学長室事務課の皆様、そして指導教員の巴特尔先生、桐谷多恵子先生、今村康子先生には多くの助言を頂きました。心より感謝申し上げます。

多摩大学インターゼミ
サービス・エンターテインメント班一同
2024年1月27日